

火野葦平と向井潤吉 ——従軍がもたらしたもの

福田 淳子

The Relics of Ashihei Hino and Junkichi Mukai as War Correspondents

Junko Fukuda

Abstract

The author traces the work and collaboration of the novelist Ashihei Hino (1907-1960) and the painter Junkichi Mukai (1901-1995), who were war correspondents during the Great East Asian War. They first met in 1939. In 1938 Hino, having been awarded the Akutagawa Prize while serving with his regiment in Hangzhou, got promoted to the press corps. He wrote about the battle of Xuzhou in *Wheat and Soldier* and with that book became a best-selling writer. Mukai's career was launched during the two years he spent studying in France. He was awarded the Chogyu Prize in 1933 for 11 works he completed in Europe. Mukai enlisted as a volunteer painter in China in 1937, and, the same year Hino was called up for military service in China. Later they served together in the Philippines in 1942, and on the Burma-India front in 1944. Although they were often face to face with death, they wielded their pen and brush to convey both wartime and peacetime situations. The realism that characterizes their work remains as compelling and informative today as it was when the work was created.

From 1948 to 1950 Hino was criticized for his involvement with the military during wartime and was purged. He came back as a popular writer, but often returned to the War in his writings. He committed suicide at the age of 52. After the war Mukai was active doing illustrations and oil paintings of old Japanese farmhouses until his death in Setagaya at the age of 93.

As war correspondents they met a variety of foreign people: enemies, friends, prisoners of war, spies, and civilians. In Hino and Mukai's work we can see that the War forced Japanese of all walks of life to open their eyes to the world outside Japan. Indeed their work seems more effective in doing this than works created in our globalized era. During the war, war paintings were welcomed with great enthusiasm and the technique of many oil painters reached its peak. Hino and Mukai together had a chemistry that allowed them to create works that observe and preserve the past.

Key words: war correspondent (従軍記者), press corps (報道班), Ashihei Hino (火野葦平), Junkichi Mukai (向井潤吉), war reportage (戦争ルポルタージュ), 戦争画 (war paintings), purge of public officials (公職追放)

はじめに

火野葦平(明治40年—昭和35年)は「糞尿譚」で第6回芥川賞を受賞、同年に日記体で書いた従軍記「麦と兵隊」でベストセラー作家となり、いわゆる戦争文学で一世を風靡した作家である。近代作

家としては最も長期にわたって従軍し、敗戦後は昭和23年6月25日から昭和25年10月13日の期間、文筆家追放指定を受けるが、解除後は作家として復活し、多くの作品を遺した。一方、火野よりも6歳年長の向井潤吉（明治34年—平成7年）は、2年間のパリ修行後、洋画家として二科会で活躍、日中戦争開戦後は従軍画家として戦地に赴き、戦争画を制作するかたわら随筆集や挿絵を発表、敗戦後は行動美術協会を結成し、各地をめぐる古民家を描くことを生涯のテーマとした。火野と向井は、昭和12年、ほぼ同時期に一兵士として従軍した。戦争の激化とともに従軍作家・画家としての本分を発揮し、中国、フィリピン、ビルマ、インドなどの戦地に赴く。特にバターン総攻撃、インパール作戦で二人は行動を共にし、戦場での濃密な時間を過ごしたことはよく知られている。

本稿は、従軍記者として日中戦争（第二次上海事変）から太平洋戦争にかけて戦争報道に携わった火野と向井について、先行文献を参照し、生涯と背景を概観し、接点を確認することで二人の戦争体験とその意味を探る。

1 火野葦平と向井潤吉—二人の経歴

(1) 火野葦平

①文壇デビュー以前

明治40年12月3日、福岡県遠賀郡若松町に、父玉井金五郎、母マンの長男として生まれる。本名玉井勝則。大正2年に若松尋常小学校に入学、立川文庫や武士道文庫を耽読するなど読書好きな一面をみせる一方で、野球に熱中する快活な少年でもあった。大正8年、県立小倉中学校に入学、画家を希望するが、従兄の影響で夏目漱石の作品を読んで文学を志すようになり、大正11年には同人誌「搖籃」に短篇小説「女賊の怨霊」を発表した。この頃、心を寄せていた志道静子との初恋が失恋に終わり、大正12年上京して早稲田第一高等学院入学、「思春期」ほか十七歳三部作を脱稿する。大正14年7月に童話11篇を収録した童話集『首を売る店』（内藤奎運堂）を自費出版、後に繰り返し出版・収録され火野文学の底流となる。翌大正15年には早稲田大学英文学部に入学する。2年後に幹部候補生として入隊するが、レーニンの訳本を所持しているのが発見され伍長で除隊となり、大学は父親の意向で中退させられる。文学を諦めて家業の石炭荷役業、玉井組を継ぐことを決意して福岡に帰郷、プロレタリア文化連盟を結成し労働運動に傾注するが、沖仲仕のストライキや上海での荷役の経験を経て転向、再び文学に向かう。この間の事情については後年、『魔の河』（光文社 昭和32年10月）や『青春の岐路』（光文社 昭和33年10月）に小説として書かれた。昭和9年には原田種夫、山田牙城と九州芸術家連盟を結成、機関誌「九州芸術」同人となり、劉寒吉のいる詩誌「とらんしつと」に加盟、「山上軍艦」「濁流」などの詩を発表した。昭和12年には久留米の同人誌「文学会議」に参加して小説「山芋」「河豚」などを発表する。同年7月の盧溝橋事件の後、上海における国民政府軍の総攻撃開始（第二次上海事変）により日中戦争に突入すると、9月に召集令状を受け取る。入隊前日まで書き続け脱稿した「糞尿譚」は劉を介して「文学会議」の矢野朗に託し（同年11月発行の4号に掲載）、9月10日に陸軍伍長として応召、小倉一四連隊に入営、第七中隊第一小隊第二分隊長となり、第十八師団に所属、門司港から済州島を経て、11月5日には北沙に敵前上陸、襲撃を受け激戦となる。この時の様子は、弟政雄に宛てた手紙形式で「土と兵隊」に書かれることになる。このあと南京攻略に参加するが、12月13日に南京は陥落する。17日、南京入城後、杭州攻略に向けて出発、26日に杭州に入城する。

②文壇デビューと「糞尿譚」

昭和12年11月発行「文学会議」4号に掲載された「糞尿譚」は芥川賞候補となり、昭和13年2月7日に第6回芥川龍之介賞を受賞、火野は8日に杭州の駐屯地で知らせを受ける。3月15日、小山書店より『糞尿譚』を刊行、27日には中隊本部の庭で芥川賞の授与式が行われ、特派員として文藝春秋社より派遣された小林秀雄から表彰を受けた。

火野が入隊直前に脱稿して雑誌発表が叶い、文壇デビュー作ともなった「糞尿譚」は、火野の郷里である北九州市若松で糞尿汲み取りをしていた父の友人・藤田俊郎に発想を得て書かれた小説である。糞尿処理業に私財を擲って奔走する主人公が、不器用ながらも頼れる人間を当てにしながら、理不尽な困難を乗り越えて何とか成功させようと邁進するものの、結局は騙されて大損をする物語である。最後、悲痛な気持ちを抱えて糞尿処理場の川尻に辿り着くと、複数の男たちに絡まれ争いとなり、堪忍袋の緒が切れた主人公は、柄杓で掬った糞尿を敵に撒き散らし、「誰でも来い、負けるもんか」と絶叫しながら自身も糞尿まみれとなって立ち尽くし、沈みゆく夕日を浴びて燦然と光輝く姿で幕を閉じる。絶望的な展開でありながら、もの哀しさの中に光明が差し、平易で軽妙な文体によって独特の世界観が描出される。人が生きる上で避けられない排泄行為が産生する〈糞尿〉を題材に、より平等で公正な共同体を社会に構築しようとする一種の社会主義的な理想を組み込んだところに、火野文学のヒューマニティが感得できる。描かれる〈糞尿〉は決して忌み嫌われる厄介者（物）ではなく、むしろ生涯をかけて勝負をかける神聖なものとして掬い取られている。ここには、敵味方が生死をかけて入り乱れる戦場で血と泥にまみれ、死体が散乱する戦場を這いつくばって死線を越え、また現地の人々に目を向け、行く先々の人間や自然を暖かく受け入れ描き続けた、従軍記者としての火野の筆法が既に息づいていると捉えることができる。

入隊前日に脱稿した「糞尿譚」は文学仲間の奔走で「文学会議」に一举掲載され、第6回昭和12年下半期の芥川賞候補となる。〈糞尿〉が放つイメージから未読あるいは敬遠する審査員がいた中で、鶴田知也が評価し再検討されたのち、受賞が決定する。選考委員だった川端康成は次のように評した。

文壇諸方面の人々が推薦してくれた作品は、全部読んだ。その結果、実に悲しむべきは、新人の作品で問題とするに足るものが、殆ど無かつたといふことである。だから、少し大げさに云へば、大早の雲霓を望むが如くで、その多少の欠陥は二の次とし、先づ喜んで「糞尿譚」を推した。有力な候補として話題に上った、他の作家、例へば、中谷孝雄、和田伝、大鹿卓、間宮茂輔などの諸君は、火野君と同列に比較は出来ぬが、芥川賞としては、火野君を選ぶのが面白いと考へたのである。優劣論ではない。（「芥川龍之介賞経緯」「文藝春秋」昭和13年3月 p84）

川端の〈期待〉が純粋な文学的期待であったかどうかはいずれにしても、火野の今後に期待を込める見方を示している。一方、菊池寛の以下の言葉には文壇ジャーナリズムの思惑が明白に記されている。

作者が出征中であるなどは、興行価値百パーセントで、近来やゝ精彩を欠いてゐた芥川賞の単調を救ひ得て充分であつた。（中略）自分は、真の戦争文学乃至戦場文学は、実戦の士でなければ書けないと云ふ持論であるが、火野君の如き精力絶倫の新進作家が、中支の戦場を馳駆してゐることは、会心の事で、我々は火野君から、的確に新しい戦場文学を期待してもいいのでないかと思ふ。（「話の肩籠」「文藝春秋」昭和13年3月）

火野に〈興行価値〉が見出され、「実戦の士でなければ書けない」「的確に新しい戦場文学」が期待されたことは確かであろう。

芥川賞授賞式は杭州第十八師団第百十四連隊第七中隊本部のある方童庵前で行われ、現役兵士の芥川賞受賞のニュースとして新聞・雑誌で大々的に取り上げられた。「朝日新聞」は『『糞尿譚』の栄冠陣中に戴く 上官もゝ占領の喜び、』（昭和13年4月3日）の見出しを付し、軍服姿の火野が文春特派員の小林秀雄から賞品を受け取る写真とともに報じた。

まだ作家とも言えない九州の無名の青年が、応召した戦場で芥川賞を受賞したことは、一個人を越えた一大センセーションとなった。軍部にとっても士気高揚につながる格好の話題となり、文学界にとっても戦時に乗じた大アピールとなったのである。

③従軍、日記・記録からルポルタージュへ

芥川賞受賞後の火野は、4月に小説「河豚」（『文学界』）を発表、同月末には馬淵逸雄中佐の斡旋で中支派遣軍報道部へ転属となる。5月、徐州会戦に従軍し、軍曹に進級している。この時の手記をもとに執筆したのが「麦と兵隊」であり、「改造」（8月号）に掲載後、9月15日には早くも『麦と兵隊』が改造社より上梓されている。この頃、日本から上海に到着したペン部隊を案内、10月には原隊に復帰して広東作戦に従軍、11月「文藝春秋」に「土と兵隊」を発表（『土と兵隊』改造社 11月24日）、12月久米正雄の依頼により「海と兵隊」を「大阪日日新聞」・「東京日日新聞」に連載（昭和13年12月20日～昭和14年2月15日、挿絵：林唯一、のち『広東進軍抄』と改題、新潮社 昭和14年3月9日）、「花と兵隊」を「朝日新聞」夕刊に連載（昭和13年12月30日～昭和14年6月24日、挿絵：中村研一、『花と兵隊』改造社 昭和14年8月11日）、昭和14年2月には、海南島作戦に従軍し、4月「海南島記」（『文藝春秋』、『海南島記』改造社 昭和14年5月）を発表する。従軍しながらの旺盛な執筆活動を続けた。この間、初出から間を置かず単行本が次々と出版されており、読者の需要の大きさが窺い知れる。また、早くも2月25日にはK. & L. Bushにより『麦と兵隊』（*Barley and Soldiers* 研究社）が初めて英訳され、続いて中国語訳、ロシア語訳など20カ国語以上に翻訳出版される。（L. Bushは日本在住、旧制高等学校で英語を指導、戦後も長く火野との交流が続いたことがルイス・ブッシュ著『おかわいそうに 東京捕虜収容所の英兵記録』（文藝春秋社 昭和31年8月）に寄せた火野の序文に見える。）さらに同年、Farrar & Rinehartから、石本〔後に加藤〕シズエ訳 *Wheat and Soldiers*（エピソードの配列を変えた抄訳）（『土と兵隊』*Earth and Soldiers* も収載）が刊行された。

同年6月には仙頭作戦に従軍後、11月に現地除隊となり、帰還する。11月15日の朝日新聞社主催、共立講堂での講演「前線と銃後」を皮切りに年末まで、早稲田大学や横浜・大阪、九州各地で講演を行い、戦場での兵隊たちの労苦は筆舌に尽くしがたく、新聞報道されているような簡単なものではないといった内容の話をする（鶴島正男「新編＝火野葦平年譜」「文学批評 敍説 XIII」平成8年8月）。

この年は、日活が「土と兵隊」、松竹が「広東進軍抄」を映画化し、高田保による脚本・演出で新国劇「土と兵隊」が上演、ラジオ小説「土と兵隊」が放送されるなど、火野ブームに沸いた。

昭和15年、兵隊三部作により1月に朝日文化賞、4月に福岡日日新聞文学賞を受賞する。5月、中山省三郎、劉寒吉らと10日間にわたって沖縄を旅行、「十日間滞在した私は、その風景と、情緒の美しさに、いつまで、琉球が好きになってしまった」（『解説』『火野葦平選集』第六巻 東京創元社 昭和33年4月）と書くように土地への愛着を深め、『赤道祭』（新潮社 昭和26年11月）や『琉球舞姫』（山田書店 昭和29年8月）等の作品に繋がる。8月に新築した河伯洞に転居、9月には火野が関わっ

ていた「九州文学」「九州芸術」「文学会議」「とらんしつと」が合同で「九州文学」を創刊，同人となる。11月，童話集『母さん母さん』『力持うん吉』を上梓したほか，「少女の友」に「花の命」を連載（昭和15年12月～16年8月）するなど，戦記以外の作品も多く手がけた。12月，向井潤吉の挿絵で新聞小説「美しき地図」（「朝日新聞」昭和15年12月6日～16年5月21日）を連載する。この年，L. Bushにより英訳 *War and Soldiers*（『麦と兵隊』・『花と兵隊』・『麦と兵隊』・『海と兵隊（後に「広東進軍抄」と改題）』）がロンドン Putnam から刊行された。昭和19年には井上思外雄による『麦と兵隊』の英訳 *Corn and Soldiers*（研究社 火野の序文つき）も出されている。また，新国劇「麦と兵隊」（高田保脚色），ロッパ一座「ロッパと兵隊」（菊田一夫脚色）が上演された。

昭和16年3月，「北九州文化連盟」が発会し，会長となる（～昭和18年2月）。6月には，南京報道部の命により宜昌作戦に従軍（～7月16日）。7月7日支那事変四周年にあたり日比野士朗，上田広，中野実ら従軍作家と「文化奉公会」を結成。9月，川端康成，高田保，大宅壮一，山本実彦と満洲事変一〇周年記念講演旅行に参加，新京放送局から日本向けに座談会を放送，その後一行と別れて北京在住の妹文子のもとで小説「新市街」を書き，10月帰郷，12月8日に太平洋戦争が勃発する。

④「麦と兵隊」

「麦と兵隊」は，軍報道部員として徐州作戦に従軍した，昭和13年5月4日から5月22日までの従軍日記である。芥川賞受賞後，最初に発表されるが，従軍の時間的順番からすると「土と兵隊」・「花と兵隊」・「麦と兵隊」となる。『火野葦平選集』第二巻（東京創元社 昭和33年11月）の「解説」には「私にとって，「糞尿譚」が忘れがたい作品である以上に，「兵隊三部作」は，私にとっての記念的作品である。文字どおり生命を賭けて書いた作品であり，生涯に二度あろうとも考えられぬ運命的な体験でもあったので，その当時の思い出は胸の奥底に染みついている」（p399）とし，『麦と兵隊』刊行の際に添えられた「前書」について「弁解をするわけではなかったが，自由に戦争を表現できない作家としての悲しみも，わかる読者には伝えたいと思つたし，これまであらわれた戦記に対する私の批判も，それとなく述べておきたいと考えたからである」（pp412-13）と記し，当時の火野が兵士としての覚悟と報道部員としての使命を自覚して戦争に臨んでいたことを回顧している。

昭和12年11月5日，杭州湾北沙に上陸して以来，激戦の中，命がけて戦場に身を置いた火野は，「私は戦場の最中であつて言語に絶する修練に晒されつつ，此の壮大なる戦争の想念の中で」（『麦と兵隊』p3）この体験を文学として書くときが来たとしてもそれは後のこと，静かに振り返って整理してみなければ「この偉大なる現実について何事も語るべき適切な言葉を持たない」，「私は，戦争について語るべき真実の言葉を見出すといふことは，私の一生の仕事とすべき価値のあることだと信じ，色々な意味で，今は戦争については何事も語りたくはないと思つてゐたのです。しかしながら，又，別の意味で，現在，戦場の中に置かれてゐる一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも，亦，何か役に立つことがあるのではないかと考へ，取りあへず，ありのままを書き止めて置くことに致しました」（pp3-4）と記していた。さらに，兵隊三部作の構想や内容について，次のように記す。

一兵隊として戦闘に参加した杭州湾の敵前上陸から，嘉善，嘉興，湖州，廣徳，蕪湖を経て南京に入り，南下して，十二月二十六日，杭州に入城するまでの戦闘記を第一章とし，杭州入城後，四月末日迄，美しき西湖の畔にあつて警備の任に服した駐留記を第二章とし，命に依り，軍報道部に配属されるとともに直に従軍を命ぜられた徐州会戦の従軍記を第三章として，書き録して置きたいと思つたのです。それは私が

各々別の角度から戦場に置かれたからです。そこで、この徐州会戦従軍日記は、一兵隊の戦場の記録である「我が戦記」とでも命名せられるべき三部より成る覚書の最後の章なのであります。これは或る事情から最後の部分が先に発表されることになったものであります。これは、徐州戦線に於ける全般的な戦況とか作戦とかには何の関係もないもので、単に、私が従軍中毎日つけた日記を整理し清書したに過ぎないものであります。もとより小説ではありません。(『麦と兵隊』pp4-5)

自身の目を通した従軍日記であり、あくまでもルポルタージュとしての執筆であることを表明しており、報道部写真班梅本左馬次の記録写真が、さらに迫真性を添えている。

内容は、戦況の報告のみならず、地形や建物、移動中の景色や動植物の様子、地元農民の様子、食事や就寝時などの兵士の日常、あらゆるものを五感を通して捉え、そこに火野の感懐が織り交ぜられた記録である。一日一日の記録は決して単調ではなく、日ごとに対象が切り取られクロースアップされる、ある意味で計算された小説的構成を感じさせもする。クライマックスともいえる5月16日に敵襲にあった孫圩での記録は、銃弾が飛び交う中、被弾した仲間の血飛沫を浴びながら、自身の死をも覚悟せざるを得ない危機に遭遇しても筆を止めることなく、分刻みのテンポで進めていく。一挙手一投足も漏らすまいと忠実に記録する、火野の誠実で几帳面な報道に対する姿勢と情熱を伺わせる。

報道として意味を持つのは、新聞記者に戦況を発表する高橋少佐の発言に籠められた言葉だ。我々から云えば徐州など問題ではなく、徐州を中心とする敵の殲滅が最大の目的である、新聞では大きな地点がニュース的価値を持つが、戦線では地図にもないような小部落での戦闘で将兵たちは苦勞し犠牲を払っていることを了解してほしい、と訴える。この言葉は、従軍記者としての火野の役割を明らかにしている。つまり、軍隊の戦力としての兵士でもなく、報道を伝える新聞記者でもない、それら全てのことを内側から捉え記録するのが従軍記者なのである。新聞報道ではない、火野個人の目を通した戦争の記録である。

しかし火野には兵士としての従軍経験もあり、その経験を生かして死闘を切り抜けた様子も描かれる。「『麦と兵隊』所感」として後書きに付けられた高橋少佐の文中でも、これに触れている。

また、隣国同士で殺戮し合うことへの困惑、死体のポケットで動き続ける時計の描写や、死闘を終えて次の死闘まで安眠する兵隊の描写、恋人からの熱烈な恋文を持った捕虜の姿などを通して、戦闘に対する疑問や仇敵に対する人間的同情もさりげなく書き込んでいる。静と動、生と死、の残酷なまでの対比も、感情的な動揺を見せることなく淡々と描くところに火野の特色がある。中国人の死骸の山を目にし、自身でも敵を撃ち殺し、悪魔になったのかと自問する場面もあるが、検閲を意識して表現には細心の注意を払ったようだ。しかし、火野の「解説」(『火野葦平選集』第二巻)によれば、「改造」掲載時に27カ所が削除訂正されていたとされる。

作家として認められると同時に与えられた仕事が戦争報道という、作家としても兵士としても予期せぬスタートを切ることになった火野は、ある意味では菊池寛をはじめとする文壇の思惑、ジャーナリズムに乗せられた形になった。しかし、従軍記者として書く機会を与えられ、戦場報告としてのルポルタージュを心待ちにする読者の前に成果を披露できる、作家としては恵まれた好機を手にしたとも言える。報道班員としての役割を担うことが、作家としての腕を磨く機会でもあったことは間違いない。筆の速い火野は黙々と執筆を続ける。戦場文学であっても、戦闘場面から残酷さを感じさせず、人間同士の交流や自然描写、動植物の描写などを巧みに織り交ぜながら、平易で軽妙な表現や文体で

描かれ、加えて分かりやすいストーリー展開は大きな特色であり、一般読者に広く受け入れられたのもこのためであると考えられる。

兵隊三部作完成の後も作品を次々と発表、各地で講演を行いながら、戦争報道、戦場文学で作家としての地歩を固めていく。菊池の言う「実戦の士」として火野は戦場文学を書き続け、「興行価値」を見出した菊池の目論見は的中、火野は従軍作家として名を馳せることになった。

(2) 向井潤吉

向井潤吉は、明治34年11月30日、宮大工であった父才吉と母津彌の長男として京都市下京区に生まれる。大正3年に京都市立美術工芸学校予科に入学するが、大正5年に父の反対を押し切って中退し、油絵を描くために関西美術院に入る。大正8年「中学世界」の口絵に応募した絵「南禅寺附近」が当選し、9月号に「私の生ひ立ちと私の画について」とともに掲載される。また、新聞社のコンクールに「ダリア」が入選する。この年の第6回二科展に「室隅にて」が初入選するなど、才能が認められ始める。大正9年5月、親に無断で上京し新聞配達の仕事をしてながら川端画学校に通うが、年内に京都に戻り黒谷境内の寺で下宿生活をする。この年、第7回二科展に「八月の鉢」が入選する。大正10年、大阪高島屋呉服店図案部に勤務、12月に京都伏見深草歩兵第三十八連隊に入営し、2年後の大正12年に除隊となり、再び高島屋呉服店に勤務、信濃橋洋画研究所に通う。大正15年、第13回二科展に「葱の花」が入選する。その後も高島屋に勤務しながら二科展出品を続けて入選し、昭和2年10月には安価なシベリア鉄道でパリに向かう。

パリでは「午前中はルーブル美術館で模写、午後は自由製作、夜はアカデミー・ド・ラ・グラン・ド・ショーミエールで素描」を課す独自のプログラムを遂行し、徹底して古典絵画の技法を学ぶ2年間を過ごした。ヨーロッパ絵画の模写21点とともに帰国、昭和5年9月、二科展に滞欧中の作品11点（「司厨夫」「力士達」「新聞売る廃兵」「首飾と婦人」「後向く女」「街上労働者」「梳る女」「髪結ふ女」「街の群衆」「月と男」「三人の男女」）を特別出品して樗牛賞を受賞、その後二科展の常連となる。10月20日「朝日新聞」にはパリを回想した文章と挿絵「身辺秋心」が掲載された。翌昭和6年1月6日から2月25日まで林美美子「浅春譜」の挿絵を担当する。昭和8年には世田谷区弦巻に転居し、終の棲家となる。昭和11年、第23回二科展に「霽れゆく寒霞溪」「立てる少女」を出品し、会員に推挙され、9月6日の「朝日新聞」で「二科会新会員七氏」として顔写真入りで宮本三郎・栗原信らとともに報道された。この後も二科展への出品を続け、個展を開くなど、画家としての地歩を固めていく。

昭和12年8月13日、くすぶっていた日中関係は第二次上海事変に突入、宣戦布告もなく目的も明確にされないまま開始された戦争は、様々な体制整備が間に合わず、従軍希望の美術家は大勢いたものの受け入れることができない状況にあったようだ。国の対応を待ちきれなかった向井は、個人の資格で従軍する道を選択し、同年10月から11月下旬にかけて、天津、北京、北支、蒙疆方面に向かう。とにかく行かなければ、という気持ちが逸っていたことが『絵と文 北支風土記』（大東出版社 昭和14年7月）の「従軍後記」で語られる。昭和12年10月5日「朝日新聞」夕刊では「絵と彫刻の従軍」のタイトルで「北支、上海の一線に活躍する従軍記者の数はおびただしい数に上つてゐるがこの『文章報国』陣に対し今度『美術報国』の旗印も高く二人の芸術家が全くの芸術家としての立場から単身従軍する」、「一人は二科会の重鎮向井潤吉氏（三七）、今一人は日本美術院の彫刻家中村直人氏（三三）」と顔写真入りで報じた。11月7日から3日連続で「朝日新聞」に「従軍画家 向井潤吉」の署

名でさっそく「北支点彩」と題した文章と挿絵が掲載され、蒙古族の帰化城や建物、野戦病院の様子などを伝えている。帰国後12月には銀座・青樹社と大阪長堀の高島屋で「北支戦線従軍スケッチ展」を開催し、油絵38点を発表する。こうして向井は先陣を切って従軍画家となるのである。

日本軍が中国大陸への進出を続ける中、洋画壇の中堅から成る「彩管部隊」が編成され、向井は中村研一、小磯良平らと上海に行き、上海軍報道部の委嘱により記録画を制作する。昭和13年4月16日の「朝日新聞」は彩管部隊について「部隊長は中村研一画伯で隊員は二科会の向井潤吉、(中略)この一隊は今事変による従軍画家とは違ひ上海の現地陸軍報道班から招きを受けて彩管報国に従軍するもので今事変の戦争画を後代に伝えるため当局からピックアップされたもの」(「彩管部隊」中支へ出動)と報じている。一隊は5月に出発、記録画を制作する。同年6月には鶴田吾郎、向井潤吉、清水登之ら11人を発起人として大日本陸軍従軍画家協会を結成、9月、第25回二科展に「突撃」を出品する。昭和14年4月には陸軍美術協会へと拡充され、この時点で従軍画家・彫刻家は200名を超えていたという。

戦争に素早い動きを示した向井らの動きに「朝日新聞」が寄り添いながら美術界を先導する役割を果たし、戦時色を強めて行く。朝日新聞社の主催で「聖戦美術展」(昭和14年、昭和16年)が開催されたほか、「航空美術展」(昭和16年～昭和18年)、「大東亜戦争美術展」(昭和17年、昭和18年)、「海洋美術展」(昭和17年～昭和19年)、「陸軍美術展」(昭和18年～昭和20年)、「国民総力決戦美術展」(昭和18年)などが盛んに開催された。第1回大東亜戦争美術展の巡回展まで含めた延入場者数は380万人に上り(河田明久「戦争美術とその時代 1832-1977」(『画家たちの戦争』新潮社 平成22年 p96))、戦時下の国民が戦争美術展を熱狂的に歓迎したことが窺える。大東亜戦争聖戦記念展を幼少期に満洲の新京(現、長春)で観たという画家の今泉省彦は、後に「戦争画の時期はですね、日本の絵描きにとってはいわば一種のルネサンスであったみたいなものだね」「戦争政策遂行、戦意高揚という国家要請を外在する必然とし、戦争協力を内在するところの必然として、技倆のかぎりをつくすという、それは一面において当時の画家達に訪れたいつきの権力との蜜月、いつきのルネサンスであったと思うのです」と語り、「あそこには的確に外在する必然と内在する必然が手を結んだ、現代美術のセンテンスにはないところの、まれな作例がある」(照井康夫編『美術工作者の軌跡 今泉省彦遺稿集』海鳥社 平成29年6月 pp30-31)とする。当時の画家にとって、多くの鑑賞者に歓迎された、またとない機会が戦争美術展なのであり、表現者である彼らはその力量を発揮すべく、こぞって様々な試みを実践し、絵筆を振るっていたのである。

昭和13年7月29日から7月31日にかけて「朝日新聞」紙上で、服部学芸部長を司会に藤島武二、中村研一、向井潤吉、川端龍子、清水登之、川島理一郎のメンバーで「近代戦争と絵画 従軍画家を迎へて」と題する座談会を開催、近代戦は戦いの現場を見ることが難しく、戦いに従軍しても現場では絵を描く状況ではない、アトリエで時間をかけて描いては即時性が失われるなど、戦争現場を絵にすることの難しさが議論されており、日中戦争初期において従軍画家たちは試行錯誤の状態にあったことがわかる。9月9日の「朝日新聞」には、二科展に出品して話題になった向井の「突撃」の写真が「戦時下の紙上美術展」として掲載された。

「突撃」に関しては、銃を振り上げる兵士の鬼気迫る表情が日中戦争に対して悪印象を与えるとのアルゼンチン大使からの批判を受け、向井は、昭和14年2月15日「朝日新聞」の「二科会飾った戦争画 海外頒布を禁止」の記事中で「私は大正十年度徴集の歩兵上等兵です。それで今回の事変に従

軍して画家としてのみならず嘗ての兵士の経験をもって聖戦の意義を一層感慨深く感じた、突撃は、日本の兵隊にして始めて出来る戦法だ、戦争画の白眉として突撃を描いた、不幸にして制作を急いだこととて表情の研究が足りない恨みがあった、その為にいろ／＼の支障があり、中には日本の兵隊は怒りの中にも慈悲もなければならぬなどとの意見もあった」と語っている。この「突撃」(12号)は現在行方不明とのことだが、同じ「突撃」と題された別の絵が昭和14年3月9日にイタリア陸軍に贈呈されている。3月7日「読売新聞」夕刊では「これは陸軍大学教官八里知道中佐の慫慂により奮闘続ける皇軍の勇戦振りを防共の盟邦に知らせようといふもの」「昨年五、六月ごろ陸軍従軍画家として上海戦線に従軍した向井氏が劉家口、新木橋付近の戦闘をスケッチした十二号のキャンバス一杯に生な実感が盛り上って血路を衝く皇軍の突貫の様は鬼神を哭かしむるものがある」という文章とともに、絵の横に立つ向井の写真入りで掲載された。一方、3月10日「朝日新聞」(夕刊)には「此『突撃』はさきに物議を醸した『突撃』とは全く凶柄を異にし、砲煙弾雨を潜り鉄条網を突破して躍進して行く将兵の姿を十五号キャンバスに納めたものである」とある。12号、15号との異なる報道があり、詳細は定かでないが、陸軍省発行、大日本陸軍従軍画家協会印刷の色刷の郵便はがきに画面が確認できる。イタリア大使館に問い合わせたところ、所在不明とのことであった。

昭和14年7月、第一回聖戦美術展が陸軍美術協会と朝日新聞社との共同で開催され、向井は「福山機師の壮絶なる雄志」を出品、9月の第26回二科展には「難行」「甦民」(ともに二百号)を出品し、「突撃」と合わせて「聖戦三連作」とされる。

向井は戦争画家としての仕事を着実に進める中、『絵と文 北支風土記』(大東出版社 昭和14年7月)を刊行する。「従軍後記」とした最後の章では、大正十年に徴集されたこともあり今度の事変では当然召集されると思っていたが一向に令状が来ない、しかし男と生まれ画家を生業とする以上、一度は戦塵を浴びてみたい、生き死の巷に立ってどれほど周章てるかを体験したい、自分の身体がどのくらい酷使に耐えられるか、際限ない欲が出たので思い切って従軍画家に志願した、と書き、日中戦争開戦に意気立つ向井の心情が吐露されている。それは従軍経験のある兵士としての自覚と同時に、現地を自分の目で確かめ描きたいという画家としての自覚から発せられた衝動に他ならない。火野が激戦地へと駆り立てられた心情と全く同じである。しかし続けて「時期としては、たしかに立ち遅れであり、又方法としては頗る不完全なものだった。／結局は軍の進んだ後を、追って歩いたと言ふ事に止まり、或一二カ所を除いては、戦績を描いて廻るより他に、スケッチ出来なかつたと云ふ残念さを白状しなければならない。(中略)恐らく第一線部隊に従って行く以上は、油彩スケッチなどは到底至難な事であり」「せいぜい鉛筆スケッチか写真位、それも丁寧に描くとすれば陣中の状況を主とするか、行軍、戦闘の有様を想ひ起して露営の夜にでも素描するのが限度だらう」(pp277-79)と、山岳地帯を重い絵の具箱や材料ほかの荷物を担いで行くことの困難さを述べ、「両眼をうんと見開いて、(戦闘)と云ふ物凄さを強く心臓に焼きつけるか、その雰囲気吸ふのが関の山だと云へる」「心の何処か片隅で軍の行動のむしろ邪魔をしてゐるやうな気遣ひに左右されて居ては、折角の好機を取り逃がす事が再々であり、又何彼と不便が多い」(pp279-80)と書き、戦場で油絵を描くことの困難さ、不便さを率直に記している。

昭和15年8月の第27回二科展には「豆満江畔」を出品、10月の紀元二六〇〇年奉祝美術展覧会には「黄昏」を出品する。12月6日から火野の小説「美しき地図」の挿絵を担当し(「朝日新聞」昭和15年12月6日～16年5月21日)、これが向井と火野との最初の出会いとなった。

昭和16年7月、第2回聖戦美術展に審査員として「待機」を出品、9月第28回二科展には「坑底の人々」を出品し、評議員となる。11月、国民徴用令により比島派遣渡集団報道班員としてフィリピンに赴き、翌年9月に帰国する。ここで、約2カ月後に上陸した火野と約240日間、報道班員として行動し、仲を深めていくことになる。

3 従軍における火野と向井の交流

(1) フィリピン従軍

昭和16年12月8日、太平洋戦争勃発。20日、火野は全九州から文化人が集う「米英撃滅文化翼賛九州大会」に文化部長岸田国土らと出席する。昭和17年2月、宣甲部隊（南方方面派遣軍宣伝中隊）員として白紙徴用を受け、3月4日にフィリピンのマニラに到着、第一陣の尾崎士郎、石坂洋次郎、今日出海、向井潤吉、永井保と合流し、パターン作戦に従軍する。4月10日に、米比軍が降伏する。火野はマニラに帰ると Deng 熱で陸軍病院に約15日間入院。40度を越える熱をおしてパターン戦記「兵隊の地図」を脱稿し、6月7日「時局雑誌」に発表、8月24日に改造社からパターン半島総攻撃従軍記『兵隊の地図』が刊行される。この装幀を担当したのが向井である。向井のスケッチと熊井健夫の写真とともに、現地での戦いや宣撫工作の様子、捕虜とのやりとりなどが描かれる。

この間、国家総動員法に基づく個人企業整備のため、火野の実家“玉井組”は強制解散となり、第一港運 KK に統合され、弟政雄が対応にあたった。火野が任務を解かれて帰還するのは、12月25日である。

陣中新聞「南十字星」には、火野の小説「眼」（82号、17・7・22）、小説「敵將軍」（86号、9・22）、詩「雲丹の話」（号不明、11・8）、小説「歩哨線」（90号、12・18）等が掲載され、翌年『バタアン戦話集 敵將軍』にまとめられる。これらの短篇9篇を収録した著作『民俗精神の開花』（比島派遣軍報道部、昭和17年11月）が英訳付きで現地向けの強化宣伝活動の一環として発行されており、戦死した日本兵の遺品として保管していた米国の女性が、44年ぶりに持ち主の遺族に返却されたと報道された（「故火野葦平の未発表従軍記が日本兵の遺品に 戦中、比で出版 米人が遺族に返還」読売新聞夕刊 平成元年12月28日）。日本人の思想や武士道の解説書として現地向けに出版し、表紙は向井が担当したようだ。国会図書館にも所蔵がなく、未見である（新聞の記述によれば火野葦平資料館でも未所蔵、「敍説 XIII」の著作目録でも未見とされている）。

一方、向井は『比島従軍記 南十字星下』（陸軍美術協会出版部 昭和17年12月）を刊行する。タイトルは比島派遣軍報道部が発行していた陣中新聞「南十字星」に因んでいる。扉には「比島作戦に昇華せる英霊と／南太平洋に散華せる／弟正宜の霊前にこの一書を捧ぐ 一著者一」、続いて現地を描いた原色版の口絵、陸軍中佐勝屋福茂の前書き「「南十字星下」のために」、口絵の解説に続いて、パターン前線で向井と火野の二人が空を見上げて立つ写真を置き、手書きで「陽炎の山べに立てば青空ゆ爆弾いだき飛行機のゆく 葦平」と書かれており、二人の親しい間柄を物語っている。日付はすべて「××月×日」とされ、天候や食事の内容、一緒に従軍している作家たちとの交流、現地の兵隊の様子などの日常を記した日記体の記録である。巻末の「追而書」には「一人の画家が、戦場の蔭を縫って歩いた片々たる身辺雑記」と書くように、自身の仕事の領分をわきまえた記録として書いていることがわかる。また、食べ物の記録が実に多く、豪華な献立表を見て銃後の読者は腹立たしく思うのではないかと書きながら、しかし「現在の私の舌に味覚としてハッキリ残つてゐるのは、すまし汁、

の味が、恐らく銭湯の終ひ風呂の湯垢を温め直したのぢやないか、と疑ひたくなるやうな、実も何もない塩加減だけのモロモロとしたものだった、といふことである。／その食事はやがて、豚と鶏を追ひ廻す野戦料理に変はり、更に水牛と、犬と猫になり、果ては谷川の水だけ、といった風に、凡そ代用食の粹をつくしたものに、舌鼓をうつやうになつたのである。これが戦場の正真正銘の日常茶飯事であり、誰ひとり不審にも思はなければ、又不服を云ふものも無いのである」と記す。仕事については、兵隊の様子など「どこを見廻しても画心を大いにそゝるが、写真スケッチ共一切厳禁されてゐるので、たゞ眼を娯します許りである」という状況であつたことがわかる。コレヒドール陥落後は、「永い間米国流の精神に馴致された比島の人々に対する生活の指導、文化工作」を重要な軍報道部の仕事とした（巻末「追而書」の末尾に「皇紀第二千六百二年十月三十日」とある）。最後に、脱稿直後に弟正宜が戦死、もう一人の弟で彫刻家の良吉も出征することが記されている。

また、『南十字星下』の1年後に『大東亜戦争画文集 比島』（新太陽社 昭和18年12月）を上梓する。『南十字星下』が時間軸に沿って書かれた日記体であつたのに比べ、項目ごとに整理された内容で、スケッチを多く配しながら、現地の様子を絵と文章で分かりやすく伝えている。向井による「後記」には「私の今度の比律賓行は、肩書に軍報道班員と云ふ厳めしさが附随してゐたので、その仕事の性質上、又心持の置き所に「旅」とは全然ちがつた感慨が揺曳してゐて、素直に風土風俗と云ふものを味はふ機会が少なかつた」「落着きを失つた原住民、破碎された町々、それらにも画趣をそそられる前に、戦ひと云ふものの凄烈さ、苛酷さをひしひしと感じた。何処か締めりのない平べつたい暑熱は、私の細い身体から尚もあらゆる水分を絞ほり上げて、珍奇な植物や果物を眼の前におきながら、描き写すことをすっかりと忘れて居たのである。そして土埃と汗で空白な所を汚しただけが私のスケッチブックの収穫であり、しかもその粗雑さをありのままに正直に投げだしたのがこの一本である」（pp125-26）とあり、最後には「十八年六月 遠く緬印国境に発つ日 向井潤吉」と記されている。

向井と同様、従軍画家であつた栗原信は同時期に著書『六人の報道小隊』（陸軍美術協会出版部 昭和17年12月）の「後記」に「私は画家である。絵画によつて表現することを私の生命とするものである。／たゞ、今度の大東亜戦に報道任務を帯びて前線に出た私は、その仕事（報道）がすこぶる複雑で、決して絵画だけの範囲に限られず、寧ろ文字によらなければ、この感情、感激、を伝えることが出来ない行動の世界を経験した。／また、文字によるこの記録を思ひ立つたもう一つの動機は、訓練のない、軍人でない、文士、記者、写真家、画家、といふ前線報道の経験をもたぬ我々が、たゞ持合せの熱情だけを以て、ともかくも現地の報道を（その善し悪しは別として）多数送つてゐるので、報道任務の実際に当る人々に、その実情を報告したいのであつた。／また、銃後の人々に、前線の報道記録といふものは如何にして作られるか、製作者が、その戦場の中にあつて、進んで経験してゐるものは何んなものであるか、等々を見て貰ふのも、前線の実際を識る上に興味があるだらうと思つたからである」と文章を綴る理由を書く。

向井が油絵のみならず、スケッチに添えて文章を書き綴つたのも同様の理由からではないか。従軍して兵士と生活を共にし、現地の人々と触れあい、行動し観察することによって、多くのスケッチを描き残した。現地では宣撫工作で多忙な日常であり、油彩での大作は帰国後描くにしても、速写で描き留めておくことに意義を見出していたと考えられる。

二人と同じ時期に朝日新聞特派員として同行していた西田市一は、「朝日新聞」に書き送っていた原稿にいくつか加えて『バタアン・コレヒドール攻略戦記 弾雨に生きる』（宋栄堂 昭和18年3月）

を上梓、表紙や装幀を向井が担当している。作戦の記録、戦いの報告、兵士たちからの聞き書きや兵士に見せられた従軍手帖の記述の写し、自身の日記など、多角的に捉えられた内容の文章で構成されている。「二三、作家は語る一日本兵の感情」には「火野氏の言葉」(pp155-58)として、パターンに従軍して感じた日本民族の強さに見る日本兵の美しさについて語った文書を書きとめ、向井が語ったパターン総攻撃時の体験談なども書き留めている。西田の文章は、最初から新聞用に読者を意識して執筆された“報道”であり、記事の内容も平板にならないよう複層的に展開されており、火野や向井の従軍記とは明らかに異なる。火野は戦争の作戦の全容を示すような書き方はしない。自身が体験し、見聞したものを、あくまで自分の動きの範囲内で記すことで、記録者の節度とリアリズムが守られる。文体も語り口調で平易、万人に受け入れられる親しみやすさがあり、西田とは対照的である。

向井は昭和17年9月11日に帰国、12月には朝日新聞主催の大東亜戦争美術展に「パターン半島完全攻略(4月9日の記録・第25号軍用路に於いて)」を出品する。昭和18年3月5日の「読売報知」では、「撃ちてしまん 陸軍美術展出品画『肉薄攻撃』向井潤吉作」が掲載され、絵筆を持って大作に向かう向井の写真とともに「作者のことば」がある。「コレヒドール島の周辺は水際をコールタールで塗り固め、鉄条網を張りめぐらし、真上にトーチカを据ゑた廿数米の断崖だった。昨年五月六日の払暁こゝに〇〇工兵隊は第一線部隊を揚陸し突撃路を開いたのであるが、上陸部隊の華々しい戦果の陰にひそむその労苦は全く言語に絶するものがあつた。／制作は現地の調査と生残り部隊の演習スケッチを基礎に始めたが瞬時の記録ではなく、この主題のもつ時限や空間の幅の広い制約を表現するのが難しいと同時に面白いと思つた」と述べている。9月の第30回二科展では「セクスモアンの伽藍」を出品。この年6月、ビルマ、アキャブ方面に従軍する。

火野は12月25日に帰還、昭和18年、「軍艦島」(「改造」1月号)、連載小説「真珠艦隊」(「週刊少国民」6月6日号まで23回連載)、1月から4月まで九州各地を中心に「比島より還りて」の題で講演、パターンを中心とした比島作戦における兵隊の労苦や比島における文化工作の困難などを実体験に基づいて例をあげながら話した(「紋説 XIII」年譜参照)。3月1日「文学は兵器である」(九州文学)3月号)などを書く。文学報国会に出席し、23名の発言者のうちの一人として、「軍人精神と文学者の日常生活」について語った。講演を多く行ったほか、「陸軍」を「朝日新聞」に連載(5月11日～昭和19年4月25日)、5月20日『歴史』(生活社)を上梓、8月25日には大東亜文学者決戦大会に日本代表の一人として出席した。11月20日には『バタアン戦話集 敵将軍』を上梓する。この年、芸術小劇場で北村喜八演出による「幻燈部屋」が上演されている。

(2) ビルマ・インド方面への従軍

日米開戦から2年たち、優勢にあった日本軍は、連合軍による猛反撃に遭い、昭和18年2月にガダルカナル島撤退を余儀なくされた時点からすでに戦況は厳しい状況に追い込まれていた。4月18日に山本五十六連合艦隊司令長官がブーゲンビル島上空でアメリカ陸軍航空隊に襲撃され戦死、5月29日にはアッツ島守備隊玉砕、キスカ島撤退と報じられ、アメリカの反撃が徐々に激しくなる。11月25日にはマキン、タラワ両島守備隊も玉砕。この間、9月8日には同盟国イタリアが無条件降伏している。昭和19年2月1日、アメリカ軍はマーシャル群島に上陸、2月6日にはクエゼリン、ルオット両島の日本軍が全滅、2月17日には中部太平洋日本海軍最大基地のあるトラック島が空襲にあい、18日に日本軍は壊滅、絶対国防圏の東の最先端を失い、戦局は厳しさを増していった。

全土支配に成功したビルマも苦境に追い込まれ、日本軍はイギリス・インドを中心とする連合国軍のビルマ反攻作戦を阻止し、インド国内の反英運動を高揚させる必要があった。昭和19年1月8日に大本営はインド侵攻作戦として「インパール作戦」を発表する。この作戦は、ビルマとインドとの山岳地帯470キロの行軍を強いる苛烈なものであり、3月8日に開始し4月初旬までは日本軍が優勢だったものの次第に劣勢になる。大本営は雨季に入る前3週間でイギリス軍が拠点とするインパールを陥落できると予測し、20日分の糧秣を運ばせ食料にするための牛・山羊・羊など2万頭を準備しただけであった。山岳地帯での悪路に加え食料・物資等の補給は断たれ、師団長の抗命者も出るが、それらは強引に封じ込められ攻撃は続行、結局はインパールを攻略できずに7月4日に漸く作戦の中止が決定、後退の途上で多くの兵士が病没、餓死し、3万人超の死者を出した。

4月下旬、大本営は特別報道班員派遣を企画し、文壇から火野葦平、画壇から宮本三郎、楽壇から古関裕而を指名するが、宮本三郎は出発前日に急病となり、急遽向井潤吉が選ばれる。向井は同行する作家が火野であることを知り、即答したという（「解説」『火野葦平選集』第四巻）。向井は、昭和15年に火野の新聞小説「美しき地図」の挿絵を担当、昭和17年のフィリピンにおけるバターン作戦にも共に参加しており、すでに友情と信頼関係が築かれていた。

4月25日、火野は家族や文壇仲間に見送られ別れを惜しむが、死を覚悟していた。「日本が興亡を賭けた最後の戦場に屍をさらすことに、責任のようなものを感じていたのである。インパール作戦従軍は、私が志願したのであった」（「解説」『火野葦平選集』第四巻）と後に記すように、生命がけて責任を果たそうとした従軍であった。しかしこの時、危機的戦況を新聞は報じていないから、火野も真実を知る以前の、漠然とした覚悟である。雁ノ巣飛行場から上海に向かい、翌26日には屏東に一泊、27日にはサイゴンに一泊、28日にはバンコクに一泊して29日にラングーンに到着する。

昭和19年5月9日「朝日新聞」の記事「描く `勝利の記録、火野、向井、古関氏ビルマ前線へ」は3人の顔写真入りで報道した。重爆撃機に搭乗し9時に離陸、火野は持参した「万葉集」を取り出して読み、居眠りをする（『インパール作戦従軍記—葦平「従軍手帖」全文翻刻』（解説 渡辺考・増田周子集英社 平成29年12月））。

古関裕而は『鐘よ鳴り響け 古関裕而自伝』（集英社文庫 令和元年12月）に「インパール作戦従軍記」の一章を設けて、当時の様子を詳細に綴っている。3名に朝日新聞記者石山慶二（従軍記では「次」郎を加えた4名は、新鋭重爆撃機に乗り博多に一泊、上海に一泊、大和の屏東飛行場に到着。翌朝、海南島を見下ろしながらサイゴンに下りて一泊、翌日はバンコクに一泊してラングーンに向かった。古関は昭和17年にもラングーンに慰問に出向いている。派遣軍司令部に向かうと、インパール陥落はまだまだなのでラングーンで休養してくれと言われ、「一日三回はオフィスに集まり、記者や通信員の人々と雑談しながら食事したりお茶を飲んだりした」。「夕食後は酒の入った火野葦平さんが、へんな豊後浄瑠璃をうなって皆を笑わせたり、また将棋をさしたりで和やかなひとときであった。土曜日の夜は、庭にゴザを敷いて野外宴。決まってすき焼きをした」（p136）と記している。火野と向井は先に現地の様子を見に行くことになり、火野は出発前に「ビルマ派遣軍の歌」の原稿を古関に渡す。古関は「火野さんらしい格調の高い詩」と書く。古関は現地にいる三十名ほどの軍楽隊とともに軍の慰問のほか、ビルマの住民のために市内や近郊で演奏会を開いていたという。また各部隊から部隊歌の作曲を依頼され、かなりの数の曲を作ったようだ。さらに、現地のビルマ舞踊団を見て、歌や踊りの採譜をし、また古関は日本語学校を訪ねて子どもたちが歌う日本語の歌を聴くなど、現地

での文化交流の様子が興味深く描かれている。

7月4日に大本営はインパール作戦の中止を発表、ライマナイから撤退した二人はマンガレーで古関と合流したが、火野はその後、雲南省で戦っていた郷土部隊、通称「菊兵团」を訪ねている。火野は、生命を保つことさえ難しい兵士に進撃命令が下される状況に、すべては無謀、無駄な作戦だった、と伝えている。ラングーンも毎日空襲を受けており、向井は8月に、火野は9月3日に帰国するが、古関だけはサイゴンに赴き、レコーディングや演奏会などを行っていたという。

火野は11月11日、南京で開催された第2回大東亜文学者大会に日本代表12名の一人として参加、26日に帰国する。12月7日に松竹で映画化された「陸軍」が封切られる。

4 敗戦後の火野と向井

敗戦後、昭和23年6月25日から昭和25年10月13日まで文筆家追放指定を受けた火野は、昭和23年1月から5月まで「青春と泥濘」を「風雪」に連載するが、占領軍から干渉があり中断、昭和24年3月「新小説」、同年4月「叢知」、同年12月「風雪」に発表して完成、昭和25年3月『青春と泥濘』を六興出版社から上梓する。「後書」(末尾の日付は昭和二十四年十二月一日)には「ふたたびペンをとり得るかも知れないといふかすかな灯を発見したとき、まつさきに、私の執筆の衝動をかりたてたのは、インパール作戦、私もその渦中にまきこまれた末期的戦場、戦争の実態をいまこそ書き得るといふ希望と情熱、そして、私は憑かれたやうに、「青春と泥濘」の稿をおこしたのであつた」(p397)。「理想主義はたやすい。平和はたれも望んでゐる。反戦思想や、戦争否定の絶叫は、すこしも骨の折れぬ仕事である。ヒューマニズムといふものは、たれでも、お題目のやうに唱へることができる。しかし、戦争のなかに投げこまれた人間そのものの運命と苦痛とは、さういふ公式論では、なにごとくも解決しない。肉体と精神との実際に置かれてゐる場のぎりぎりの認識は、美しい観念をよせつけないのである。しかし、それは観念が無価値といふことではない。むしろ私は人間を救ふ観念の所在を信じる。私は、つねに人間を救ふ芸術といふことを考へてゐるが、それは、いつでも、強力なニヒリズムの壁で遮られてゐる」(p400)と書く。

公職追放が解除されて連載可能となった新聞小説「赤道祭」が、昭和26年3月11日から8月19日まで「毎日新聞」に掲載される。挿絵は向井が担当、3月6日の予告では、「昨秋追放解除となり注目を浴びている火野葦平氏の『赤道祭』であります。(中略)氏が、今日を期して雌伏三年間に蓄積してきた創作情熱を、どのような形で読者の前に展開するか、御期待を願います」と記された。連載終了の4カ月後、12月7日には東宝から「赤道祭」、同日、新東宝からは同じく火野原作の「新遊俠伝」が封切られた。翌27年には「花と龍」を「読売新聞」に連載(昭和27年6月20日~28年5月11日)、挿絵は同じく向井が担当し、6月5日掲載の「次の連載小説」では「次回の朝刊連載小説は火野葦平氏作「花と龍」、挿絵は名コンビを謳われる行動美術の向井潤吉氏」と紹介された。

一方、向井は昭和20年秋、新潟県川口村で取材して『雨』を制作、以後、油彩画で日本の古民家を描くことを生涯のテーマとする。「民家と私」では「私の民家への執心は敗戦前後から始まる。空襲警報を聞くたびに、犠牲になって脆くも灰と土に還元する家、殊に草葺きの家についてその造形の美しさに惜別の愛情を持ったのが直接の原因」(「アサヒグラフ別冊 美術特集 向井潤吉」昭和51年5月p84)と書く。二科会の再結成には加わらず、11月に行動美術協会を結成する。

向井によれば、二科会は昭和19年の夏、戦局の重大さから在京評議員会員の会合の席上で解散が

宣言されたが、戦争の終末まで待とうとする案と、一挙に解散する案とに分かれ、最終的には解消することに決定した。ところが昭和20年10月20日に、二科会有志を名乗る人物から再結成のための会合通知が届き、このことに疑惑と不信の念を持った同志9名で新団体を創成し発足したのが行動美術協会である。「行動美術協会趣意」に「私達は文化遺産を嗣ぐものとしての立場に拠って、新しい芸術行動を実践する。歴史の線に沿って、世界の旧い見方より新しい見方に向うべく、相互の錬磨を組織的に行い、自分が自分より脱皮するために自主的に行動する」とし、毎年行動美術展を開催、機関美術誌「ぱれっと」を昭和21年9月に創刊した。第2号(22年9月発行)には火野が「画集三巻」という文章を寄せている(未見、『行動美術 35年の小史』行動美術協会 昭和55年11月 p33に拠る)。

画家たちが残した戦争画と従軍記についてまとめた溝口郁夫『絵具と戦争』(国書刊行会 平成23年3月)によれば、戦後、GHQは藤田嗣治、向井潤吉、宮本三郎らの戦争画153点をアメリカに持ち帰り(昭和26年「無期限貸与作品」扱いで日本に返還)、同時に画家たちの書いた従軍記を含め、7700余りの本が没収されたという。その中で向井の絵は4点(「4月9日の記録(バタアン半島総攻撃)」「マユ山壁を衝く」「バリッドスロン殲滅戦」「水上部隊のミートキーナの奮戦」)確認できる。従軍画家が書いた書籍は11点没収され、うち2点が向井の『絵と文 北支風土記』、『比島従軍記 南十字星下』である。

インパールに同行した古関裕而は、火野の『青春と泥濘』を読んで「戦記というより芸術的作品」と評し、「『麦と兵隊』『花と兵隊』等の作品により火野さんは「戦犯」としてある期間筆を持つことを停止されたが、彼は戦争製造人ではなく、兵隊(すなわち当時の大衆)の最も深い理解者であり同情者であった。その作品を完全に理解しようとする能力が、「戦犯決定者」つまり裁く側にあったとしても、誰かを、何人かを犠牲の祭壇にあげねばならない敗戦国の悲運だったことによるのだろう」(『鐘よ鳴り響け 古関裕而自伝』pp140-42)と記す。戦後、菊田一夫とのコンビでラジオドラマやミュージカル、演劇、映画などの音楽を担当して活躍した古関は、火野の作品でも音楽を担当した。「火野葦平選集月報第4号」(東京創元社 昭和33年4月)にも文章を寄せており、インパールでの縁が続いていたことが分かる。

火野は『火野葦平選集』全八巻(昭和33年5月~34年6月)を上梓する。第一巻の巻頭には作家となるきっかけとなった「糞尿譚」を置き、「愛着のある作品はほとんど」(「選集編纂に当って」「火野葦平選集月報第1号」東京創元社 昭和33年2月)収載、各巻の最後には自筆の「解説」、最終巻には自筆年譜を収録、作家となって二十年の月日を改めて振り返ることになった。選集完結後約一年後に自殺したことを考えれば、「解説」は遺書のようにも読める。しかし、敗戦直後から追放中に執筆した作品や沖縄戦線で戦死した弟千博に捧げた小篇「桃太郎」等を収録した第七巻の「解説」には、〈敗戦三部作〉を構想していたことや、沖縄に関する長編小説を書きたいとの意向を吐露していた。

『火野葦平選集』第六巻(東京創元社 昭和33年4月)の扉には、向井潤吉による「女馭者」を載せている。火野が昭和28年にパリを訪れたときに乗った馬車で、随筆「女馭者」(「文学界」昭和29年2月)に女馭者との交流が綴られている。『火野葦平選集』第六巻「解説」末尾には「最後になったが、この巻のために、絵を描いてくださった向井潤吉画伯にお礼を述べたい。向井さんとは、「花と龍」「赤道祭」など、新聞小説の外、文と絵のコンビとして縁が深いだけでなく、フィリピン作戦、インパール作戦などに従軍し、生死をともにした仲である」と書き添えている。

選集完結後、長篇『革命前後』を書く。『革命前後』は、モデルが特定できる人物を多く配して、自身の戦争体験と文筆活動を見つめ直した最後の作品である。『革命前後』の「あとがき」で、火野

は「自分がいつかは書きたい、書かなければならぬと考えつづけて来た題材とテーマとを、とうとう書いたというよろこびから来るものでありまして、いま、「革命前後」を書き終えてホッとしています」「太平洋戦争の敗北は、日本人にとって大きな悲劇でしたが、この経験を日本人はけっして忘れてはならないと、私は考えつづけてきました。そして、私自身は、作家として、人間として、日本人として、どうしても敗戦前後のことを作品に書かなければならないと思いつづけて来ました」「この「革命前後」を書きあげたことに或る満足をおぼえています」と書いた。初出誌「中央公論」では向井が挿絵を担当しており、木村一信は第1回目の絵について「向井の脳裡に、かつて火野たちと共に体験したフィリピンの地の風景がよぎったと考えることもできるであろう」、「なぜ、向井潤吉のカットや中川一政の装幀にこだわったのかというと、こうしたいわば気心の知りあった人たちのカットやさし絵などに包まれるようにして「革命前後」が世に出たということ、それはとりもなおさず、この作品の一つの特質を浮きぼりにすることにもつながっているのではないか、とみなせるからである」と指摘する（『「革命前後」の〈自己凝視〉』「叙説 XIII」）。

火野は戦争とは離れた小説や随筆なども書いてはいたが、身体や脳裏に刻み込まれた体験や記憶は必ず甦る。過去を反芻する仕事は戦後の火野にとって痛みが伴ったはずである。それでも火野は生涯戦争をふり返り、『麦と兵隊』前書に宣言した「戦場を去った後に、初めて静かに一切を回顧し、整理してみるものでなければ、今、私は、この偉大なる現実について何事も語るべき適切な言葉を持たない」をそのまま戦後も自らに課し、決して放擲しなかった。

向井はエッセイ「交遊抄 葦平さん」で、インパールに従軍した時を振り返り「ギリギリの時でも、葦平さんは勇気と自信にみちた微笑をたたえて、途中で私と別れてただ一人、郷土部隊が奮戦しているという最悪状態の雲南方面に出掛けて行ったのであった。その行動は文学者であるというよりも、任務に忠実果敢な一下士官そのものであった」（『日本経済新聞』昭和42年8月12日）と書いている。記憶の中に飛び込んで傷ついて這い出し、また飛び込んで這い出し、53歳で睡眠薬自殺を遂げる。

一方向井は、画業60年の節目にあたる昭和49年5月、朝日新聞社主催で画業六〇年記念「向井潤吉環流展」を開催した。行動美術協会の趣旨どおり芸術行動を実践し続け、昭和55年には難波香久三と共同編集で『行動美術三十五年の小史』（行動美術協会 昭和55年11月）を刊行、向井は第47回（平成4年）を除く全ての回に出品しており、緻密で几帳面な仕事ぶりを発揮した。

昭和57年10月、世田谷区名誉区民となり、昭和59年1月には世田谷美術館に作品28点を寄贈する。昭和61年10月、世田谷美術館において向井潤吉展を開催。平成5年7月には、長年住んだ住居を世田谷区に寄贈し、展示施設として整備された向井潤吉アトリエ館が世田谷美術館分館としてオープン、「開館記念展 郷愁と輝き・向井潤吉と民家」（7月10日～10月11日）が開催された。

日本中を旅し古民家を描くことをライフワークとした向井は、自身の絵について「私はいつの間にか、日本の風土の柔らかな空気の中にうけつがれた、本質の脆さを代表した民家を描くことに、知らず知らず貧しい技術を合わせていることに気がついた」と発言している（三宅正太郎「向井潤吉の画業」『アサヒグラフ別冊』昭和51年5月）。写実を根底に据え、西洋絵画の前衛を観ながらも抽象に屈することなく、“後衛”と自称する独自の画風を守り続け、滅び行くものに魂を注ぎ込んだ向井は戦争の世紀を絵筆とともに生き、平成7年11月、93歳で急性肺炎のため自宅で死去する。

火野と向井は22年間にわたる交流があった。（詳細は次項略年譜参照。網掛部分は二人の接触があった時期を示す。）

火野葦平略年譜				向井潤吉略年譜			
西暦	和 暦	年齢	概 要	西暦	和 暦	年齢	概 要
				1901	(明治 34) 年	0	11月30日 才吉・津彌の長男として京都市に生誕。
				1902	(明治 35) 年	1	
				1903	(明治 36) 年	2	
				1904	(明治 37) 年	3	
				1905	(明治 38) 年	4	
			12月3日生誕。	1906	(明治 39) 年	5	
1907	(明治 40) 年	0	戸籍上は1月25日 金五郎・マンの長男として福岡県若松港に生誕。本名玉井勝則。	1907	(明治 40) 年	6	
1908	(明治 41) 年	1		1908	(明治 41) 年	7	
1909	(明治 42) 年	2		1909	(明治 42) 年	8	
1910	(明治 43) 年	3		1910	(明治 43) 年	9	
1911	(明治 44) 年	4		1911	(明治 44) 年	10	
1912	(大正 01) 年	5		1912	(大正 01) 年	11	
1913	(大正 02) 年	6	若松尋常小学校入学。	1913	(大正 02) 年	12	
1914	(大正 03) 年	7		1914	(大正 03) 年	13	京都市立美術工芸学校予科に入学。
1915	(大正 04) 年	8		1915	(大正 04) 年	14	
1916	(大正 05) 年	9		1916	(大正 05) 年	15	京都市立美術工芸学校中退。関西美術院に学ぶ。
1917	(大正 06) 年	10		1917	(大正 06) 年	16	
1918	(大正 07) 年	11		1918	(大正 07) 年	17	〈森と池〉
1919	(大正 08) 年	12	小倉中学校入学。	1919	(大正 08) 年	18	「中学世界」9月号口絵懸賞に〈南禅寺附近〉、第6回二科会に〈室隅にて〉が初入選。「中学世界」同号には「私の生ひ立ちと私の画について」も掲載。〈ダリア〉〈自画像〉
1920	(大正 09) 年	13	画家志望であったが文学に志望を変更。	1920	(大正 09) 年	19	上京。万朝報の配達をしながら川端画学校に通う。第7回二科展に〈八月の鉢〉入選。京都に帰り黒谷境内の寺にて下宿生活。
1921	(大正 10) 年	14	ツルゲーネフ、ドストエフスキー等を濫読。	1921	(大正 10) 年	20	大坂高島屋呉服店図案部に勤務。京都伏見深草の歩兵第三十八連隊に入営。在隊二年で除隊。
1922	(大正 11) 年	15	「搖籃」に「女賊の怨霊」を発表。	1922	(大正 11) 年	21	
1923	(大正 12) 年	16	早稲田第一高等学院入学。	1923	(大正 12) 年	22	
1924	(大正 13) 年	17		1924	(大正 13) 年	23	高島屋呉服店に復職。信濃橋洋画研究所に通う。
1925	(大正 14) 年	18	童話集『首を売る店』を内藤奎運堂より自費出版。	1925	(大正 14) 年	24	
1926	(大正 15) 年	19	早稲田大学英文学部入学。同人誌「街」創刊。A. ダウソン詩集を翻訳。	1926	(大正 15) 年	25	第13回二科展に〈窓の花〉入選。
1927	(昭和 02) 年	20	同人誌「聖杯」創刊。	1927	(昭和 02) 年	26	10月29日 京都を出発、シベリア鉄道經由で渡仏。11月18日パリ着。ルーブル美術館に通い模写に励む。
1928	(昭和 03) 年	21	福岡歩兵第二十四連隊に幹部候補生として入営。12月 除営、早稲田大学中退。	1928	(昭和 03) 年	27	〈首飾と婦人〉 サロン・ドートンヌに出品。
1929	(昭和 04) 年	22	玉井組の作業現場に出る。	1929	(昭和 04) 年	28	(スペインに旅行。)
1930	(昭和 05) 年	23	日野良子と結婚。9月長男闘志誕生。	1930	(昭和 05) 年	29	1月27日 帰国。作品展開催。浦宗静枝と結婚、上京。第17回二科展に滞欧作〈司厨夫〉〈力士達〉〈新聞売る廃兵〉〈首飾と婦人〉〈後向く少女〉〈街上労働者〉〈梳る女〉〈髪結ふ女〉〈街の群衆〉〈月と男〉〈三人の男女〉11点を発表、梶牛賞受賞。
1931	(昭和 06) 年	24	若松沖仲仕労働組合を結成。書記長に就任。	1931	(昭和 06) 年	30	第18回二科展に〈サキソフォンを持つ男〉〈拳闘〉〈四ッノ顔〉入選。
1932	(昭和 07) 年	25	父と、50人の玉井組沖仲仕と上海に渡る、長女美絵子誕生。	1932	(昭和 07) 年	31	第19回二科展に〈家族〉〈叢林〉が入選。
1933	(昭和 08) 年	26		1933	(昭和 08) 年	32	東京都世田谷区弦巻にアトリエ兼住まいを構える。長女誕生。〈衣をぬぐ女〉。第20回二科展に〈七月の田園〉〈ル・バル〉〈父と子〉入選。
1934	(昭和 09) 年	27	詩誌「とらんしつと」に加盟。	1934	(昭和 09) 年	33	第21回二科展に〈争へる鹿〉出品。
1935	(昭和 10) 年	28	「九州文化」に小説を、「九州芸術」に詩を発表。	1935	(昭和 10) 年	34	第22回二科展に〈風浪の室戸岬〉〈踊子習作〉A・B出品。銀座三味堂にて豆絵展開催。
1936	(昭和 11) 年	29	「九州文化」に「帝釈峠記」。朝鮮、満洲に旅行。	1936	(昭和 11) 年	35	第23回二科展に〈霧ゆく寒霞渓〉〈立てる少女〉を出品。会員に推挙される。
1937	(昭和 12) 年	30	久留米の同人誌「文学会議」に「糞尿譚」他を発表。12月 伍長として応召。	1937	(昭和 12) 年	36	10月初旬から11月下旬にかけ、天津、北京、北支蒙疆方面に従軍。12月「北支戦線従軍スケッチ展」(油絵38点)開催。第24回二科展に〈凍日〉〈伐採の人々〉出品。
1938	(昭和 13) 年	31	3月「糞尿譚」芥川賞。4月 中支派遣軍報道部へ転属。5月 徐州会戦に従軍。重曹に。	1938	(昭和 13) 年	37	5月上旬 上海に赴き上海軍報道部の委嘱により作戦記録画を制作。大日本陸軍従軍画家協会設立され会員となる。第25回二科展に〈突撃〉出品。〈影〉
1939	(昭和 14) 年	32	2月 海南島作戦従軍。4月『海南島記』『広東進軍抄』刊。11月 現地除隊。12月 帰還。	1939	(昭和 14) 年	38	陸軍美術協会が結成され、会員となる。「聖戦美術展」に〈新木橋の激闘〉を出品、『北支風土記』(大東出版社)刊。第26回二科展に〈甦民〉〈難行〉〈福山楼〉
1940	(昭和 15) 年	33	兵隊3部作で朝日文化賞受賞。朝日新聞朝刊に「美しき地図」連載。『兵隊について』	1940	(昭和 15) 年	39	第27回二科展に〈豆満江畔〉。昭和洋画奨励賞受賞。「紀元二千六百年奉祝美術展覧会」に〈黄昏〉を出品。
1941	(昭和 16) 年	34	9月 満州事変十周年記念講演旅行。大連、旅順、奉天、新京、ハルビン、ハイラル、チチハル、黒河などに赴く。『美しき地図』『春日』『百日紅』。12月8日 太平洋戦争勃発	1941	(昭和 16) 年	40	第2回聖戦美術展に審査員として〈待機〉出品。第28回二科展〈坑底の人々〉。11月 国民徴用令によって比島派遣渡集団報道班員としてフィリピンに赴く。第一回航空美術展に〈影(蘇州上空にて)〉を出品。
1942	(昭和 17) 年	35	白紙徴用され、3月4日フィリピンに上陸。パターン作戦に従軍。 Deng熱のため20日間入院。12月 帰国。『兵隊の地図』	1942	(昭和 17) 年	41	9月11日 帰国。大東亜戦争美術展に〈パターン半島完全攻略(四月九日の記録・第二十五号軍用路に於いて)〉を出品。『南十字星下』(陸軍美術協会出版部)刊。
1943	(昭和 18) 年	36	『パターン戦話集 敵将軍』『歴史』『青狐』『真珠艦隊』。日本文学報国会結成され、九州支部幹事長を委嘱される。	1943	(昭和 18) 年	42	6月 ビルマ、アキャブ方面に従軍。『大東亜戦争画文集 比島』(新太陽社)。〈肉迫攻撃〉
1944	(昭和 19) 年	37	4月、報道班員としてインパール作戦に従軍、9月9日 帰国。『南方要塞』刊。記念講演旅行。	1944	(昭和 19) 年	43	4月 火野葦平、古関裕而らとビルマ、インパール戦線に従軍、8月 帰国。〈ロクタク湖白雨〉〈バリッドスロン殲滅戦〉〈マユ山壁を衝く〉制作。
1945	(昭和 20) 年	38	『陸軍』刊。7月7日西部軍報道部結成、白紙徴用を受け嘱託となり福岡滞在。8月15日 敗戦。『陸軍』10月「九州書房」設立。	1945	(昭和 20) 年	44	新潟県川口村で取材した〈雨〉を制作。以降民家を生涯のテーマとする。旧二科会同志と行動美術協会を結成。〈水上部隊ミーティングの奮戦〉
1946	(昭和 21) 年	39	「九州文学」復刊。	1946	(昭和 21) 年	45	第1回行動美術協会展に〈よあけ〉〈まひる〉出品。

火野葦平略年譜 (続き)			向井潤吉略年譜 (続き)		
1947	(昭和 22) 年	40 『石と釘』『怒濤』『夜景』	1947	(昭和 22) 年	46 〈雪〉。第 2 回行動展に〈炭塵の中に〉。
1948	(昭和 23) 年	41 5月16日 文学者の追放指定を受ける。『歌姫』『黄金部隊』	1948	(昭和 23) 年	47 第 3 回行動展 〈一隅の肖像〉
1949	(昭和 24) 年	42 『河童』。「青春と泥濘」完結。	1949	(昭和 24) 年	48 第 4 回行動展 〈昏明期〉
1950	(昭和 25) 年	43 10月13日までで追放解除。	1950	(昭和 25) 年	49 第 5 回行動展 〈亭午〉
1951	(昭和 26) 年	44 追放解除により新聞小説の道が開け、3月から毎日新聞朝刊に「赤道祭」を連載。	1951	(昭和 26) 年	50 第 6 回行動展 〈鏡の座〉
1952	(昭和 27) 年	45 読売新聞朝刊に「花と龍」を連載。『どんこの舌』	1952	(昭和 27) 年	51 第 7 回行動展 〈残冬〉
1953	(昭和 28) 年	46 阿佐ヶ谷 3 丁目 23 番地に鮎魚庵を移す。新築祝いに向井から『ロクタク湖白雨』を贈られる。5月末～8月はじめまで渡欧。	1953	(昭和 28) 年	52 第 2 回日本国際美術展に〈春蘭〉を出品。第 8 回行動展に〈海〉(裸婦群像)を出品。
1954	(昭和 29) 年	47 『活火山』『琉球舞姫』『小説ヨーロッパ』『戦争犯罪人』	1954	(昭和 29) 年	53 第 1 回現代日本美術展に〈めし喰うやん衆達〉を出品。第 9 回行動展 〈生活の河〉
1955	(昭和 30) 年	48 4月6日から6月9日までインド、中国、北朝鮮を訪れる。『赤い国の旅人』『天国遠征』	1955	(昭和 30) 年	54 〈斜陽の家〉。第 10 回行動展 〈ハムレットに於ける芥川比呂志〉
1956	(昭和 31) 年	49 『ある詩人の生涯』『沈まぬ太陽』	1956	(昭和 31) 年	55 第 11 回行動展 〈煙雨の岬〉 日本橋高島屋にて民家を主とした油彩展開催。〈海〉。
1957	(昭和 32) 年	50 『河童曼陀羅』『コマよ、まわれ』『魔の河』	1957	(昭和 32) 年	56 〈浄土ヶ浜〉(山麓雨日) 第 12 回行動展 〈北端の村〉。
1958	(昭和 33) 年	51 9月から11月にかけてアメリカ旅行。『金銭を歌う』『百年の鯉』	1958	(昭和 33) 年	57 〈雪原〉(岩手山新雪(洪民))。第 13 回行動展 〈黄の壁〉(暗い河)。 『油彩』(東峰書院)。
1959	(昭和 34) 年	52 『火野葦平選集』全 8 巻完結。筑摩書房版『新選現代日本文学全集』第十九巻「火野葦平集」刊。	1959	(昭和 34) 年	58 5月14日 長女を伴い渡仏。30年ぶりにルーブル美術館を訪れる。イタリア、スペイン、ドイツ、スペインへ旅行。
1960	(昭和 35) 年	1月24日 若松の自宅で自死。 『革命前後』。享年 52。	1960	(昭和 35) 年	59 3月10日 三井船舶榛名山丸で10か月ぶりに帰国。銀座松屋で「石彫聖人素描展」開催。〈山村杏花〉8月1日、火野葦平文学碑除幕式に参列。
			1961	(昭和 36) 年	60 原因不明の不審火によりアトリエ、応接間を焼失、前年持ち帰った滞欧作 40 点を含む作品、模写 4 点、スケッチ等百数十点を失う。〈春—杏花の村〉。第 16 回行動展 〈叢の中の家〉(山懐ろの家)
			1962	(昭和 37) 年	61 第 17 回行動展 〈飛驒立秋〉(飛驒晩春)。〈孟春〉
			1963	(昭和 38) 年	62 アトリエを兼ねた住まいを再建。
			1964	(昭和 39) 年	63 『民家十二月集』(芸神堂)。
			1965	(昭和 40) 年	64 第 20 回行動展 〈晩春〉(残雪と若菜)。〈しぐれる大原〉
			1966	(昭和 41) 年	65 訪中日本美術家代表団として北京、上海、蘇州、広州などを回り風物を写す。日本橋高島屋にてミニチュール展開催。〈トレド新春〉など 25 点を発表。銀座松屋で開催の「中国スケッチ展」に〈龍門石仏〉などを出品。〈聚落〉
			1967	(昭和 42) 年	66 〈磐梯山好日〉(飛鳥路三月)〈洛北小春〉など 40 点発表。第 22 回行動展 〈蒼緑の村〉(草原の六月)「交遊抄 葦平さん」
			1968	(昭和 43) 年	67 『日本の民家』(保育社)。
			1969	(昭和 44) 年	68 岩手県一関から土蔵を自邸に移築しアトリエの一部とする。〈岳麓好日〉
			1970	(昭和 45) 年	69 至道博物館(山形県鶴岡市)にて「向井潤吉洋画展 日本の民家」開催。第 25 回行動展 〈雨後檐下宿〉
			1971	(昭和 46) 年	70 第 26 回行動展 〈岳への徑〉
			1972	(昭和 47) 年	71 第 27 回行動展 〈残冬〉(暎春)
			1973	(昭和 48) 年	72 第 28 回行動展 〈遠野春色〉(山雨来る部落)
			1974	(昭和 49) 年	73 京都府立文化芸術会館において、民家を主とした自選 50 点を出品。「画業六十周年記念向井潤吉選流展」開催。第 29 回行動展 〈微雨〉(海霧の岬)
			1975	(昭和 50) 年	74 横浜高島屋にて「向井潤吉民家展」開催。故郷の京都府に〈洛北暮雪〉など自作 22 点を寄贈。第 30 回 〈一隅の風景〉(山居立春)
			1976	(昭和 51) 年	75 第 31 回行動展 〈丘〉(春映)
			1977	(昭和 52) 年	76 第 32 回行動展 〈雨後千曲川〉(叢中花)
			1978	(昭和 53) 年	77 第 33 回行動展 〈峠の下の村〉出品。日本橋高島屋にて「民家を主とした油彩展第 9 輯」を開催。〈北国街道白雨〉等 44 点を発表。
			1979	(昭和 54) 年	78 「向井潤吉素描展」に 70 点を出品。第 34 回行動展 〈山野新雪〉
			1980	(昭和 55) 年	79 『行動美術三十五年の小史』(向井潤吉・難波香久三篇、行動美術協会)。第 35 回行動展 〈雲とみ仏たち〉
			1981	(昭和 56) 年	80 中国に旅行。第 36 回行動展 〈小鳥とみ仏たち〉
			1982	(昭和 57) 年	81 世田谷区名誉区民となる。第 37 回行動展 〈塔と壁〉
			1983	(昭和 58) 年	82 第 38 回行動展 〈宿雪の峽〉
			1984	(昭和 59) 年	83 世田谷区に自作 28 点を寄贈。第 39 回行動展 〈春塘〉
			1985	(昭和 60) 年	84 第 40 回行動展 〈春韻武蔵野〉
			1986	(昭和 61) 年	85 世田谷美術館において「向井潤吉展—日本の抒情・民家—」開催。第 41 回行動展 〈遅れる春の丘より〉
			1987	(昭和 62) 年	86 第 42 回行動展 〈小吹雪く日〉
			1988	(昭和 63) 年	87 第 43 回行動展 〈春叢〉
			1989	(平成 01) 年	88 笠間日動美術館において「向井潤吉展」開催。第 44 回行動展 〈春麗〉
			1990	(平成 02) 年	89 「米寿記念 向井潤吉展」開催。第 45 回行動展 〈秋酣〉
			1991	(平成 03) 年	90 第 46 回行動展 〈湖東の家〉
			1992	(平成 04) 年	91
			1993	(平成 05) 年	92 自邸および土地、改修費、自作約 600 点を世田谷区に寄贈。世田谷美術館分館向井潤吉アトリエ館開館。第 48 回行動展 〈春山遠望〉
			1994	(平成 06) 年	93 第 49 回行動展 〈山峽早春〉
			1995	(平成 07) 年	第 50 回行動展 〈武蔵野の春〉 11月14日 弦巻の自宅にて急性肺炎で逝去。享年 93。

5 火野と向井の接点

向井はパリで火野の訃報を聞いた。その時向井は「火野さんが死んだ」と叫んで絶句し、それから一週間というもの、同行していた娘の美芽さんに口をきかなかったという。(渡辺考「もうひとりの主役」『インパール作戦従軍記』集英社 平成 29 年 12 月 p480) この一週間、向井の脳裡を駆け巡ったものは何だったのか、向井の失語の意味を探る。

ここでは、火野と向井が行動を共にし、あるいは共同で仕事を行った記録から、互いについて言及した部分を、管見の限り、火野の著作と向井の著作(絵画作品を含む)から摘記し、ほぼ時系列に整理し、火野の連載小説に挿絵を担当する話が持ち上がったと思われる昭和 14 年から、火野没後に向井が火野を回顧した文章までの交流の軌跡を辿る。引用範囲は、おもに二人の名前の現れる部分とその前後とし、資料の説明と注記を施した。(名前は記されていないが実際には連続して行動を共にしたことが明らかな場合もあるが、引用は省略した。)[] は引用者の補記。誤植と思われる個所には(ママ)を付し、旧漢字は概ね通行の字体に改めた。

資料 1 火野葦平「美しき地図」(朝日新聞 昭和 15 年 12 月 6 日～16 年 5 月 21 日 全 165 回)

挿絵 向井潤吉。

昭和 16 年、改造社より単行本刊行(装幀 中川一政, カット 青柳喜兵衛)

連載では見出し付近に小画が入り、ほぼ章ごとに図案が変わる。各回、本文中央には内容に沿った向井の挿絵が入る。各章名と小絵は以下の通りである。

- | | | |
|-------------|--------|--------------------|
| (1)～(7) | 太鼓について | 黒犬の小画 |
| (8)～(15) | 雲について | 片手 |
| (16)～(21) | 川について | 靴一足 |
| (22)～(26) | 伝説について | 尾鱗のついた男 |
| (27)～(37) | 橋について | 橋 |
| (38)～(54) | 馬について | 馬 |
| (55)～(63) | 鞭について | 鞭 |
| (64)～(76) | 花について | 花 |
| (77)～(92) | 銭について | 銭 |
| (93)～(101) | 機械について | 線と点の図 |
| (102)～(112) | 雨について | 傘と雨 |
| (113)～(127) | 命令について | 椅子 |
| (128)～(141) | 旗について | 国旗 |
| (142)～(151) | 歌について | 鞆 |
| (152)～(163) | 土について | 若葉と根 |
| (164)～(165) | 決勝 | 玩具 [人形の上に「不倒搬」とある] |

連載第 1 回 内地でサーカスの娘の綱渡りを幼い息子二人とともに見物する千太郎は、そこで数年前の戦地の記憶が甦る。

連載第2回 警備にあたっていた支那の街で奇術を見物していた時、青地千太郎軍曹は上官に呼び出され、内地の妻の死を知らされる。連載第2回のこの回想の場面の挿絵には、小太鼓を敲く人寄せの男と見世物師、そして路上の見物人が描かれている。

注 この街頭風景に近似する向井の彩色スケッチを、「街頭所見」と題する軍事郵便葉書（陸軍需品本廠 株式会社光村原色版印刷所印行）に確認することができる。そこには現地人に混じって日本兵3名の見物人が描かれている。これは新聞挿絵の原図あるいはバリエーションとみてよいのではないだろうか。

向井は火野との初めての出会いを昭和14年、「A新聞の小説にさし絵を担当した縁であった」と回想している（「交遊抄 葦平さん」日本経済新聞 昭和42年8月12日）。火野の自筆「年譜」（『火野葦平選集』第八巻 東京創元社 昭和34年6月）昭和15年の項には「台湾から広東へ〔講演旅行に〕来て欲しいという要請があり、行きたい気持は強かったが、朝日の連載が切れるおそれがあったので思いとどまった。」（p541）とある。

火野は従軍前の渡支を含め現地の経験を経ていることは言うまでもなく、向井にもすでに2度の従軍経験があり、その収穫は『絵と文 北支風土記』（大東出版社 昭和14年7月）に確認できる。そこには北京の賑わいが活写され、挿絵には「見世物を見る男」（p33）などが載っている。この火野と向井の共有する支那の記憶が、連載第2回目の「回想」場面に反映していると考えられる。

挿絵には火野の似顔絵と思われる絵が2カ所登場する。最終回の絵は初回の少女が同じ祭りで、初回とは逆に、綱を左から右に渡る図である。少女の転落について初回と同じ危惧を抱く子等と眺める由紀子の描写とともに、長編は完結する。

資料2 陣中新聞南十字星編集部編『南十字星文芸集』（比島派遣軍宣伝班 昭和17年6月）

印刷はマニラ日日新聞社印刷部による。

表紙1, 4は向井作、休息をとる兵士の一枚図。

題字は軍司令官本間雅晴閣下、「序」が比島派遣軍宣伝班長 勝屋中佐（六月十五日付）。

南十字星編集部の「編輯記」，「目次」に続いて「マニラ攻略篇」63篇（以下，絵，絵と文，文を合計），「比島事情篇」46篇，「バタアン攻略篇」174篇が収録される。「編輯記」及び「編輯後記」によると，ガリ版半紙1枚の形式で発足し4号まで発行された「陣中新聞 南十字星」は，以降，活版に改め新聞班により継続され，これに掲載された作品を収録したものが本書である。本文集の中扉には，「比島派遣軍 陣中新聞 南十字星文芸集〔第一輯〕」比島派遣軍宣伝班編輯兼発行」とあるが，第二輯以降の刊行は確認できていない。

向井は表紙絵の他，本文中に「サンフェルナンドの寺院」のスケッチ（p19）を，「バタアン，コレヒドル遂に落つ 宣伝班 向井潤吉」（p287）と題し「星条旗墜ちて静かや是必取（コレヒドル）」他7句を掲載している。将兵の文集にまじって，マニラ日本人小学校5年生 中島結子「日本の兵隊さん」（p64）が見られる。「南十字星」第百号（昭和18年9月8日）表紙3の投稿規程には「在留邦人諸氏の投稿も歓迎す」とある。同時期に報道班員として従軍した火野の名は本書には見えないが，火野の自筆「年譜」（『火野葦平選集』第八巻 東京創元社 昭和34年6月）には，昭和17年12月，任を解かれて帰国するまでに「兵隊のための雑誌『南十字星』を編集。」（p542）とあるので，その総集編としての本書の編纂に関わったことは，明らかである。

資料3 火野葦平『兵隊の地図』（改造社 昭和17年8月24日）

装幀・表紙絵・挿絵 向井潤吉。

表紙 「砲兵観測陣地」の兵士のスケッチ

扉 中央に星座が入った蠍のイラスト。イラストの上にタイトル「兵隊の地図」、イラスト下に縦二行で「火野葦平著／改造社刊行」（以下、／は改行）

中扉 火野自筆タイトル「兵隊の地図（バタアン半島総攻撃従軍記） 火野葦平」

前書き（粹付）には以下の説明がある。「バタアン半島総攻撃従軍のために編成されたわれわれの報道班は、つぎの人々である。小隊長、渡辺清二少尉、向井潤吉画伯、写真小柳次一君、熊井健夫君、新聞山口善男君、映画松尾君、電気岡部三郎君、通訳先原強祐君、壹岐秀徳軍曹、別府誠哉軍曹、岡健一兵長、堀田嘉市兵長、山之内三雄衛生兵長、板崎米一上等兵、池田八郎上等兵、松岡喜代次上等兵、佐々木秀雄一等兵、津森定一等兵、宮西一一等兵、比島兵トリガン、運転手、范君、林君、尤君、それに私である。」

本書は、昭和17年3月14日（サンフェルナンド）から4月11日（マリベレス港）までの29日間の日記体記録である。この期間の行動はほとんど向井とともにしており、以下の冒頭●印の記載には向井の名が登場する。バターン半島、マニラ湾、マニラ一帯の地図が付され、以下の日記に、本文中10枚の向井のスケッチ、および写真12枚が挿入されている。

3月14日（サンフェルナンド） 向井のスケッチ「サン・フェルナンドの教会」

●3月15日（バランタイ河畔） 写真「マリベレス、サマットを望む」

向井のスケッチ「カボット台よりナチブ遠望」

「午前八時半出発。勝屋班長、尾崎[士郎]さん、向井画伯、寺下君、松内さん、渡辺少尉、小柳君など。バコロール、グアグア、ヘルモサ、サマル、を経て、廃墟となったマバタンの部落から、西の山に入る。ま正面にマリベレス山、サマット山が見える。」(p9)

3月16日（サンフェルナンド） 向井のスケッチ「比島人の捕虜」

3月17日（サマル） 向井のスケッチ「難民の女達」

3月18日（サマル）

●3月19日（バランガ）

「[展望哨から] 帰ったのは、午後二時、向井潤吉画伯と池田一等兵とが側車で来た。望月少尉が留守中に連絡に来たといふことである。／裏の水道傍に出て、シャツと袴下とを洗濯した。僕は洗濯が好きでね、といひながら、向井画伯も、せつせと洗濯をしてゐる。水道の栓がなくなつてゐるので、水は間断なく出ばなしなのであるが、水量の減るといふこともない。のめるけれども、生ぬるいの欠点だ。／「マックアーサーがコレヒドルから逃げだしたのを知つてる？」／と向井さんがいつた。」(pp47-48)

3月20日（ブリット高地） 向井のスケッチ「砲兵陣地山寨の図」

●3月21日（デナルピアン） 向井のスケッチ「難民区の糶つき」

写真「グアグア市場の中」

向井のスケッチ「グアグア市場」

この日デナルピアン兵站病院に寄り、外科病棟の状況の説明を受ける。そこで火野は親友中山省三

郎の弟、育四郎中尉（内科軍医）から声をかけられ、彼に省三郎の面影を見る。少し離れたトタン屋根、木造の内科病棟にも療養する多くの兵士がいた。

「〔病棟の〕梯子をのぼり、育四郎君が天井裏を案内してくれた。木像の基督像、使徒像、マリヤ像などがたくさんあった。向井画伯は六寸くらいの鼻のかけたマリヤの木像をひとつ持つて降りた。」
(p63)

3月22日（サマル）

3月23日（サマル） 向井のスケッチ「福山橋の朝」

3月24日（ブリット高地）

3月25日（オラニ）

3月26日（マニラ）

3月27日（サマル）

3月28日（サマル）

3月29日（アボアボ河畔） 向井のスケッチ「砲兵観測陣地」〔表紙絵に同じ〕

3月30日（ブリット高地）

3月31日（タリサイ河畔） 写真「渡辺小隊」

向井のスケッチ「寝てゐる兵隊」〔5名の寝姿〕

4月1日（タリサイ河畔）

向井のスケッチ「木の葉虫」

注 火野に同題の短篇がある。資料7参照。

4月2日（ブリット高地）

写真「河畔の炊爨」

4月3日（ブリット高地）

4月4日（ブリット高地）

●4月5日（カモトン河畔） 写真「タリサイ川」〔渡河中〕

「昨日までは敵の道であった道路を、東海道五十三次のやうに、いまは、日本の兵隊が陸続と通る。鹵獲された敵戦車が日本の兵隊の手で運転されてゆく。砲弾が時折り、附近に落下する。そんなことはおかまひなしに、兵隊街道の往来は頻繁をきはめる。まるで、参勤交替だね、と、向井画伯と笑った。前線はどんどん追撃に移つてゐるらしい。」(p160)

「橋の下に、裸で入つて、身体を洗つた。まるで水牛ぢやな、水さへ見ると入りたがる、と、向井画伯が笑った。橋梁の石崖の横に、草を敷いて露営した。」(p162)

●4月6日（カポット台） 写真「カポット台」

「すこしづつ、砲弾が緩慢になつて来たので、私たちは橋の下から出た。司令部附近に落ちた一弾のため、下士官数名が戦死したといふことであつた。／八時半、出発。渡辺少尉、向井画伯、鮫島君、熊井君、池田上等兵、板崎上等兵、佐々木一等兵らの一行である。（中略）日夜、遠望してゐたサマツ山の肌へ私たちは入つてゆくのである。」(pp164-65)

●4月7日（リマイ山）

「歩いてゐると方角も距離もわからなくなる。歩いたわりには、そんなに道がはかどつてゐない。一時間も前に歩いた道が、ひよつくりと、谷を隔てた向ふに見えることもある。戦車が来ると、兵隊は道を避けて、殿様のやうに通過させた。装具の負紐が胸をしめつけて来た。私たちは何度も休んだ。いちばん年よりの向井画伯はなかなか元気である。胸の前に、いつか、デナルピアン教会

堂から持つて来た鼻かけのマリヤ像をぶらぶらさせながら、歩いた。」(pp183-84)

「遠くで聞えてゐた砲声がしだいに近づいて来た。曳光弾が来て、ぼうつとあたりが赤くなった。砲弾が頭上を唸って過ぎはじめた。弾着が近くなつて来た。無電機をおこしたので方向を探知されたのかも知れない。いよいよ砲弾は近くなつた。私たちはすこし下つた藪の根に来た。どこにも安全な場所はなかつた。暗闇のなかで、ざわめきが聞えた。私は、小隊員はばらばらになるな、といつた。私の右横に渡辺少尉がゐた。左下のところに、向井さんが寝ころんでゐた。地ひびきと轟音とが同時に聞えて、藪を透して、眼の前に火柱が立つた。仰むいて、夜空を見てみると、赤くなつたり青くなつたりしてゐる星がある。月のやうに明るく光る星がいくつもあつた。オリオン星座や南十字星が手ではらへば落ちさうに近く眺められた。虫が鳴いてゐる。砲弾はつづけさまに近く落ちてた。十二時ちかくになつて、やつと止んだ。」(pp185-86)

●4月8日(イランガン河畔) 写真「山中進軍」

「日が暮れはじめ、暮れた。向井画伯、鮫島君、熊井君、坂崎上等兵^(ママ)などと、はぐれてしまった。前方にえんえんと火災が起つてゐる。まつ暗のなかで、道は大変な混雑である。夜行軍する部隊が肩を接し、馬も車も、兵隊も、ぶつかり合ひながら、闇夜の街道を押し流されて行つた。／イランガン川の溪谷に降りて、藪のなかに露営。汗と埃にまみれたまま、ごろ寝である。溪谷に降りて顔を洗つた。向井画伯の一行も附近にゐることがわかつた。寝ころんでゐると、ごうと山鳴りがして、はげしい地震に身体をゆすぶられた。」(p198)

●4月9日(アモ河畔) 写真「捕虜」
写真「捕虜の群」

「私たちが草のうへに腰を下してゐると、奇妙なフィリッピン人が二人やつて来た。はじめ、われわれに気づかず、左の方の道から、こつそりと足音を忍ばせるやうにして出て来たので、われわれは声をかけた。こちらを見ると、にこにこ作り笑ひをしながら、近づいて来た。トルコ帽をかぶつた方の一人は背が低く、ガソリン缶や、ゴム靴を両手にぶら下げ、鉄兜をかぶつてゐる背の高い方は、右手に防雨外套や新しいズボンをかかへ、左手に空の水筒をぶら下げてゐた。彼等は身体で調子をとるやうな燥いだ様子で、どこかに水はないか、われわれは二日間も一滴の水をのんでゐないといつた。(中略)しかし、私たちが彼等の挙動で、それはお芝居にちがひないと覺つた。彼等はもともと兵隊なのであつて、逃亡をしようと企て、いままでの衣服はすっかり棄て、どこかで上から下まで新しいものづくめに着換へ、ここまで出て来たのだ。そして、もし、見つかつたら、水をさがしに出たといはうと申し合はせをしたにちがひない。(中略)彼らは両のズボンから、何枚も投降票を出した。そして、しきりに、われわれは兵隊ではないと弁解した。(中略)彼らは思ひだしたやうに、頓狂な声を立ててげらげらと笑つた。荷物をかつがせて、つれて行くことにした。棒切れを切つて来て、荷物を吊し、担がせて行つた。まるでチンドン屋みたいだといふので、向井画伯が、背のひくい方に、チン、背の高い方に、ドン、といふ名をつけた。彼らは自分たちの新しい名を珍らしがり、スペルはどうだなどと聞いた。(中略)／私は、向井画伯、鮫島君、熊井君と先行した。」(pp201-03)

注「チン」と「ドン」は、火野の『花と兵隊』(改造社 昭和14年8月 p37他)における「タクアン」と「ナラツケ」を連想させる。

4月10日(マリベレス港) 写真「マリベレス」

4月11日(マリベレス港) 写真「マリベレス陸軍墓地」

後記には、従軍のために三つの報道部隊、すなわち「西海岸部隊には上田広君のゐる切東隊」、「中央部隊には柴田賢次郎君のゐる大塚隊」、それに火野の「渡辺隊」が編成され、上田広は『地熱』を、柴田賢次郎は『樹海』を書いたことを記し、本書と併せ読まれることを望み、挿絵について向井画伯に、写真について熊井健夫に感謝を述べ、「四月九日、マニラ陸軍病院にて 火野葦平」で擱筆している。

この従軍記の完成については、上田浩「四十二度の作品」(「火野葦平選集月報第5号」東京創元社 昭和33年9月)に詳しい。パターン攻略戦が終りマニラの軍司令部に引き上げた火野は Deng 熱のため高熱を出し陸軍病院に入院した。体温計は上限の42度まで上がり、この高熱は1週間以上続くのが普通だった。上田と柴田は「一週間殆ど不眠不休」でそれぞれ200枚ばかりの戦記を書き上げ、火野を見舞うと、彼は「ベッドの上に寝ていた」が「私達に原稿は書けたかときいてから、「僕も書いたよ。」といて枕もとの分厚い原稿の綴りを差し出した」のが「『兵隊の地図』と題する250枚の原稿であった。」(pp7-8)

資料4 向井潤吉『比島従軍記 南十字星下』(陸軍美術協会出版部 昭和17年12月)

陸軍報道班員 向井潤吉の著作であり、装幀・挿画も著者向井による。

表紙1・4 兵と馬の一枚連続のスケッチ

表紙見返し 見開き 休憩する兵士

裏表紙見返し 見開き 仮眠をとる兵士

献辞 比島作戦に昇華せる／英霊と／南太平洋に散華せる／ 弟正宜の霊前にこの一書を捧ぐ
—著者—

扉 南十字星下 挿絵「サンフェルナンドの交叉点 三月十四日」

口絵色刷1 「ヘルモサの教会堂」油彩

口絵色刷2 「ヘルモサの村端れよりバタアン新戦場遠望」(右の鋸状の山ナチブ山・左後方はマリベレス山・前の小山はサマツト山) 油彩

口絵色刷3 「サンフェルナンドの伽藍」油彩

口絵色刷4 「ピナロナン宿営地」油彩

目次 故国出帆 1 [4日分の日記]

船中待機 11 [20日分の日記]

上陸よりマニラまで 49 [13日分の日記]

ナチブ攻略戦 75 [15日分の日記]

バタアン総攻撃 131 [25日分の日記] [計77日分]

序 「南十字星下」のために 旧比島派遣軍報道部長 陸軍中佐 勝屋 福茂

口絵色刷1~4 解説

口絵写真モノクロ1 「バタアン前線の著者(右)と火野葦平氏」

火野の筆跡(ペン字)で「陽炎の山べに立てば青空ゆ

爆弾いだし飛行機のゆく 葦平」と記されている。

- 口絵写真モノクロ2 「賑ふ街頭（マニラ）」
- 口絵写真モノクロ3 「買出しの娘部隊（グワグワ市場にて）」
- 口絵写真モノクロ4 「宣伝班に蝟集した群集」
- 口絵写真モノクロ5 「戦跡スケッチ中の著者」

本書の記録は「昭和16年 ××月×××日 水曜日 晴」から書き起こされ、77日分の記録である。冒頭の月日はすべて×印で記され、曜日は記される時と記されない時がある。

向井の年譜（『向井潤吉の絵画と写真』世田谷美術館 平成14年1月）には昭和16年11月、国民徴用令によって比島派遣渡集団班員としてフィリピンに赴き、翌17年9月11日に帰国したとある。戦中で宣戦布告（12月8日）をラジオで聴き（p22）、1月上旬には上陸しているから、火野たちと3月上旬にマニラで合流するまでの約2カ月間、すなわち日記の目次「バタアン総攻撃」までは、火野との接点はない。以下、目次に沿う。

- 故国出帆 扉絵 船室で雑魚寝する兵士たち
- 船中待機 扉絵 輸送船と兵士のスケッチ
 - 写真1 密林の生活 宣伝班宿舎
 - 写真2 追撃急行軍
 - 写真3 炊事・洗濯（カトモン川にて）
 - 写真4 カポット台占領直後の宣伝班員 [右端が火野]
 - 写真5 難民の群れ
- 上陸よりマニラまで 扉絵 馬車の絵
 - 香港降伏のニュース入る（p56）
 - 「八紘一字」「日比親善」「米人駆逐」サンドイッチマン30名を使う（p56）
- ピナロナン行
- ピナロナンへ進発
- ピナロナン滞在
- ピナロナン滞在
- ピナロナン滞在 「宣撫用ポスターを描き、尾崎、佐坂、寺下三君の散髪を試みて正月頭にす
る。」（p65）
- カバナツアンへ
- バリアツグへ
- バリアツグ滞留
- マニラへ
- ナチブ攻略戦 扉絵 街区のスケッチ
 - ヘルモサ行
 - オロンガポー—ヘルモサ
 - ヘルモサ
 - ムラウキン行
 - ムラウキンよりハト陣地へ

- 写真 1 架橋に挺身する工兵隊
- 写真 2 福山橋にて（総攻撃前進第一日の朝）
- 写真 3 裸のインテリ部隊（マヤガホ棧橋にて）
- 写真 4 山中難行〔トラック〕
- 写真 5 サンフェルナンドの街角
- 写真 6 サマール所見

ハト陣地出発

バランガへ

バランガ出発

ピラル川滞陣

ヘルモサに帰る

ヘルモサ滞在

クラークフィールド飛行場行〔飛行場の彩色スケッチは世田谷美術館アトリエ館所蔵〕

ヘルモサ滞在

オラニ、サマール、アブカイ行

マニラへ

バタアン総攻撃 再びバタアンを征く 扉絵 米兵（アメリカ陸軍兵の帽子を被っている）の座る姿
この章のための解説文には3月1日にマニラ宣伝本部に、三木清、玉井勝則（火野葦平）、上田広、柴田賢次郎、沢村勉他が到着したことが見え、ここではじめて火野葦平が登場する。

絵画班要員として指名されている野中勲夫、永井保のほかにも上島長健を引き込み、現地徴用の形で、英語、タガログ、スペイン語を話す鶴井実（在マニラ10年以上）を加えて7名の大家族となった。

「火野君や兵隊さん達とその〔宿舎近くの〕寺院の前庭で悠々キャッチボールをしてゐるのを眺めると、これが火を噴く総攻撃前の風景かと、一寸微笑まれた。（中略）／戦機は日一日と濃くなつて来た。私は三月十九日、一足先きに火野君の先行してゐるサマールへ向つた。」（p135）

^(ママ)
サアールへ

「洗濯をしてゐると火野君が前線視察に行つて来たと言つて陽に火照つた赤い顔をしてやつて来た。」（p137）

^(ママ)
サアール滞陣 ブリット高地行

「宿舎に戻ると、近所の軍通信班から昼飯に招かれたので渡辺小隊長、火野君、小柳君と一緒に掛ける。」（p139）

「ブリット高地の野重の観測陣地を見に行かうと云ふことになつて支度して掛ける。二台の乗用車で（中略）狭い谷間に入つて車を捨てる。（中略）／やがて友軍陣地から猛烈な砲撃が始まつた。（中略）弾着点が近づいて来る気配があるので急ぎ乗用車に乗り一目散に走り出した。（中略）一二発が右横近くに落ちて車は前のめりに急停車した。『弾丸に気を取られちやいかん。道だけを見て急ぐんだ。』／火野君が大声で怒鳴つたので一層スピードを出して車を走らせアブカイの部落に出、見る度に荒廃して行く寺院の形相を横に見ながら十八時三十分、サマールの宿舎に帰つた。」（pp139-42）

デナルピアン，サンフェルナンド行

「十時すぎ，火野君，小柳君と同乗して渡辺小隊長の何度目かの危い運転で，ゆるゆると走り出し，デナルピアンへ行つた。」(p142)

「兵站病院に行く。表からスケッチして(中略)／山本院長と，中山省三郎氏の弟さんで内科主任をしてゐる育四郎中尉に逢ふ。火野君とも奇遇で話に依ると渡辺小隊長とも旧知ださうである。中山中尉の案内で内科病室へ行く。(中略)階段を登つて屋根裏に案内される。いつの頃からか捨てたままになつてゐる，埃に埋まつたキリストや天使や，使徒達の大小さまさまの木像が横たはつてゐる。稚拙な味と，剥げ残つた色が美しいので小さい天使を一つそつと手に下げて降りる。」(p143)

注 この記述は，資料3と符合する。

西海岸モロン行

写真1 敵軍使自動車白旗を掲げて我陣地に到着

写真2 弾雨下に戦況を聴く宣伝班員

写真3 円鈴山荘大夜宴の図

写真4 総攻撃第一日・わが×砲の巨弾炸裂(手前サマツト山 後方 マリバレス山)

写真5 宣撫ポスターを描く著者

写真6 投稿の敵将校に紅茶の接待

写真7 診察を待つ捕虜の列(××野戦病院)

サンフェルナンド

^(ママ)
サアールへ

「一洗濯すると，やはり風もあり広々ともしてゐてサマールはやはりいいなと思ふ。味噌汁で昼飯を終り寝床に転んで，雑誌の拾ひ読みをやつてゐると，急に大勢の人声が湧くように聞え，やがて渡辺少尉，火野君の連中が山から帰つて来た。午後徒然，夜は大塚准尉も参加して賑やかな夕食になる。」(p151)

サマール滞在

サマール滞在

「一日中雑誌を読んで暮らす。(中略)マニラに連絡に出掛けた渡辺小隊長も，火野君も遂に帰つて来ず。」(pp153-54)

サマール滞在 [3日分]

「元気な渡辺小隊長と，火野君が今日，山の設営地を下検分して来たので明朝早く出発する事になり，今夜は大いに飲んで騒がうと云ふ寸法である。／灯の洩れないように囲つた蠟燭を壁側に一本立てて，十二三人が車座になり，グワグワ製らしいウキスキーと，ビールで大いに気焰を上げ，最後に台湾軍の軍歌を合唱して二十四時，お開きになる。」(p154)

前線行

「放送器材を持って夕方来ると云ふ渡辺少尉と火野君を残して八時四十五分出発する。」(p155)

滞陣

「渡辺小隊長，火野君達が対敵放送を実施するために十時少し前出掛けて行く。殆んど報道班全機能を挙げての対敵工作で，残つたのは鮫島君と兵二名，運転手二名と私だけである。」(p160)

滞陣

「マニラを出発してからもう十九日だ。毎日毎日一体何をしてゐるのか、と自問自答してゐる。日々平穩、戦線また静かなり、と言つて了へばそれ迄だが、その蔭に骨を削ぐり、肉を嚙む死闘が執拗にくり返されてゐるのだ。／蒼緑の山に生死の筈す日」(p162)

注 資料9 向井潤吉「ロクタク湖白雨」(油彩 昭和19年)の、向井の添え書きと類似する。

滞陣

「九時半から、もう日課になつた観測陣地に上つて行く。爆撃があると云はれたが待ちくたびれて、真下の情報班に降りて行くと通訳の近藤君が、／『もう大分射たれるのに慣れて、胆ツ玉が据わつて来よりましたわ』／と云ひながら、器用に手製の竹篋を使つて石鹼の塊に女の裸身を彫刻してゐた。／十一時、渡辺小隊が全員無事で帰つて来た。尤も無事と云つても相当猛烈な抵抗射撃を食ひ、附近にも落ちた弾片の飛沫を浴びて、松岡一等兵は左肩に破片擦過創を、山内衛生兵は左手拇指に骨まで見える破片創をうけて居り、火野君も幸ひ怪我はなかつたが口辺すれすれに弾がかすり、実に危なかつたといふ。」(pp164-65)

総攻撃第一日

「夕食後、又火野君と二人で山へ登つた。再び砲撃が開始されて、美しい夕靄の中に劇しく射ち合ふ音、サマツト山の下腹部に命中する砲煙、曳光弾の赤い妖しい光。オリオン山の肩のあたりで発射と共に閃く鋭い閃光、かすかな車馬の響き、悠然と低空を行く友軍の一機、暗くなるまで我々はこの山上に立ちつくして、言葉もなくこの壮大な総攻撃を見守つた。」(p167)

ブリット高地滞陣

ブリット高地出発

「バランガの方へ三四百米ほど行つた所から右に折れて一本道だ、ときいて来たが林の中へ迷ひ込んで道が判らず、たう〜砲兵陣地迄来て行き詰まつて了つたので、諦めて明朝出直す事にして引き返した。宿營の位置を橋の下近くに移動してまづ水に浸つた。肥つた身体に一杯石鹼をなすりつけた火野君が悠々と川の石に腰を下ろした。」(p173)

カポット台へ

[地名表記なし]

「その先のマンゴの木の下に百名近い捕虜が円を描いて坐つてゐた。私は初めて見る大量の捕虜を撮影しておかうと思つて、肩に手をやつてハツ、とした。写真機がないのだ。／私はまた元の藪原へ入つて行つた。そして思ひの外の遠い奥でやつと探し出したが、二度の往復で、半袖から出た両腕がかすり傷だらけになつた。(中略)汗でべとべとになつた身体を装具も解かず、そのまゝ凭れてゐるとついウトウトしたが、小隊長に呼ばれて眼を覚まし、火野君と一^(ママ)所に部隊長の所へ行つた。(中略)何処かの若い将校がこの辺りの地図を拾つたと持つて来たので、上から天幕を被むせ、皆が顔をつつこんで懐中電灯を頼りに、道路の研究が始められた。」(pp182-83)

[地名表記なし]

「私達は三大隊の後尾に従いて行く事になつたが、道を流れるやうに行く各部隊の急流のために、忽ち私達もその渦の中に捲き込まれて了つた。苦力になり下がつた米兵や比島兵も、その中にまじつてぞろ〜行くので、火野君が／『コリヤ、日比米混合軍みたいぢや』／と云つて笑

ひ出した。暑さは今が頂上である。」(p186)

マリベレス附近にて

「チンとドンはこんな光景 [比島兵が電線で縛られ、胸に (捕虜なり、アトの部隊でよろしく処置タノム) と書かれた白い紙片を下げてゐる光景] を見て行くうちに少しづつ心境に変化が来たと見えて、不平面が次第に消えて行つた。然し腹が減つてゐるらしく、川へ来る度に水を呑みたがるので面倒になり、その世話を兵隊達に頼んで、私は火野君と熊井君鮫島君とで、急ぐ事にした。部隊はどこへ行つたのか、ひっそり閑として道を行くのは私達四人だけである。ふと気が付くと、砲声も銃声もピタリとやんでゐる。期せずして、(コリヤ、愈々陥落したのぢやないかな) と云ふ気持が閃めいた。自然と足が早くなつて一つの峠に出たとき、余り遠くもない所に海が展げ、島らしいものが横に伸び、そして忘れて居た椰子林が立つてゐた。(中略) 左方を見ると、大きいマンゴの樹の下に数百の捕虜が丸くなつて蹲がんでゐるのだ。監視してゐるらしい年とつた准尉から『今朝、十時半敵は無条件降伏を申込んで来たさうです』と聞かされた。私は不意に涙が出た。次ぎから次ぎに何かこみ上げて来る感動に、ちつとしてゐるのが苦しくなつた。この瞬間を得るために、どんなに苦しんだか、馬鹿野郎、ザマを見やがれ、と誰にともなくそつと言葉を吐いた。」(pp191-92)

マリベレスの町近く

「装具や荷物は一切貨車で運ぶことにして、私達は小隊長、火野君、塩川君と共に出発した。」(p196)

「私は小隊長や火野君の来るまで、ちつと同じ所に立つて、どうする事も出来ずにこの騒然たる有様を見てゐるより他なかつた。相変らず部隊が通つた。／その中からへんな型の自動車に乗つた渡辺小隊長と火野君が現はれた。」(p199)

マリベレスの町にて

「朝食は壹岐軍曹の自慢の檳榔樹の若芽の味噌汁である。缶詰の鰯をほり込んで煮込んだので脂がギラギラと浮き、檳榔樹は噛むと一寸若竹の感触と味だが、なんだかあくどくて気持がわるい。味噌汁のすきな火野君が『こりやうまいよ』と感嘆して、何杯もお代をして健啖振を示した。」(pp201-02)

山中待機

全員休養日のこの日で日記は終わる。

続く「追而書」の日付は「皇紀第二千六百二年 [昭和 17 年] 十月三十日」。日記の終わった日からさらにコレヒドール攻撃を待機するため 10 数日をバターンの円鈴山荘で暮らしたこと、攻撃日程が延期され、50 日ぶりにマニラに帰ったこと、そこでマラリヤに倒れたことを記す。

「火野君と仲よく前後して陸軍病院に入り、そのためにコレヒドール陥落は、その寝台の上で聴くやうな事になつて了つた。」(追而書 4 頁目)

向井は最後に、脱稿した日の朝、弟正宜が南太平洋で散華した報を手にしたこと、「今一人の弟、良吉も、彫刻の篋を剣に代へて、戦場に向はうとしてゐる」(追而書 6 頁目) ことを記している。

資料5 向井潤吉「従軍三百日」（大東亜戦争記録画譜「新美術」第十九号 春鳥会 昭和18年2月3日 pp39-47）

『草屋根と絵筆』（国書刊行会 平成30年9月）に再録されているが初出の図、写真は収録されていない。

昭和16年11月に故国を出発し、翌17年9月11日に帰国後認められた、300日に及ぶフィリピン従軍についての報告である。タイトルの署名は向井の筆跡。スケッチ2点（米兵・現地人）、写真（火野葦平の短歌が書かれ、火野と向井が写っている）、フィリピンで著者が制作したポスター（「ESTABLISH THE NEW PHILIPPINES WITH THE SWEAT OF YOUR BROWS」と記された画面に、日本国旗のついたランニング姿の鋤を持つ男が描かれている）が付載されている。

この報告のうち3月17日以降はほぼ、火野と行動をともにしており、時期は『比島従軍記 南十字星下』と重なるため記述も類似する。80種以上の言語を持つと言われる比島における宣撫工作の実際と苦勞の一端を窺うことができるが、火野については以下の感懐が綴られている。

「流石に同行の火野葦平君だけは、少しの休み場所を見付けると手まめに小さく特製させた手帳を上衣のかくしから取り出して、芥子粒のような細字で、丹念に記録してゐた。時折、覗くとそれらの精確な文字の間に丁寧な挿絵が描かれてゐるのだ。兵隊の精神と云ふものは、軍服を着、鉄砲を握つてゐる間だけでなく、むしろその後の生活に於いてはつきりと把握されるものだ、とつくづく感じた。」（p44）

「思はずハツとして、火野君と眼が火花を散らすようにカチ合った。／「ありや、コレヒドールぢやないかな」／「まさか。しかし余り静かすぎるね」／「降伏したかも知れんぞ」／「何にしても鉄砲の音がしないのがおかしい」／しかし私達は間もなく道端に縛られてゐる捕虜や、木蔭に蹲くまつてゐる投降兵の大群を発見することが出来た。監視の准尉が／「今朝、十時半、敵は無条件降伏を申込んで来たそうです」／と伝えてくれた。私は急に身内が熱くなり不意に涙が滲み出た。感動は私を啞にした。（中略）この夥たゞしい捕虜の顔、姿を見るために、私はいや私達、いや数万の兵隊達がどれ位、苦しんだか。私はこの瞬間の激しい情感を見失なふまいと努力するようにたゞ一散に走りたくなつた。」（p45）

資料6 比島派遣軍報道部編纂『比島戦記』（文藝春秋社 昭和18年3月）

本書は比島派遣軍報道部員により分担執筆された「戦記」である。本書に記名された陣容からだけでも制作には、火野、向井を含む関係者44名が関わり、報道部総動員の仕事とも言える。口絵写真には最高司令官本間雅晴閣下の写真、「最高指揮官閣下題字」（かくありてゆるさるへきや密林の木かけにきえし友をおもへは）に次いで向井の油彩「総攻撃開始」が原色版で掲げられ、陸軍少将和知鷹二の「序」には、昭和17年9月時点で「今や、比島戡定作戦は終熄を告げた。」とある。「跋」の「『比島戦記』編纂に就いて」は比島派遣軍報道部長 陸軍中佐 勝屋福茂が執筆し、最高指揮官本間閣下の「戦記の一本を戦死者の遺家族へ贈呈したし」との意向をうけ、報道部内に比島戦記編纂委員会が設けられた経緯を説明し「いたづらに無味乾燥なる戦闘史となることを避け、味はひと潤ひとを持つことが自分の願ひであつた。また、手にとつてみて、まことに楽しい本となることをも自分は望んだ。それについては部員諸士に適切な人々が居つたことはなにより幸ひであつた」とし、「戦没せる英霊の墓前にたむけられて、いささかでも英霊を慰撫することのできるひもとの花ともなり、香ともなるにふさはしいものであらうことは信じて疑はないのである。」と記している。

「第一部 作戦篇」の概況は尾崎士郎が、「バタアン半島総攻撃」の項の「東岸部隊」(pp87-109)を火野が執筆し、向井は挿画「サマルの塔」(p93)、「マリベレス附近の難民」(p106)を寄せている。「第二部 戦塵抄」には三木清、石坂洋次郎、今日出海らが執筆している。

資料7 「南十字星」第百号（比島派遣軍報道部 昭和18年9月8日）

表紙 向井潤吉（四月三日のバタアン総攻撃）

表紙裏 大伴家持「海行かば」の長歌／題字 和知鷹二〔とのみ。この時点で中将カ〕

「改編に当りて」に比島派遣軍報道部長 齋藤二郎は、100号を記念に、「携帯に便なるやう清新なる改装をなし、新たなる意図を包蔵して進発することとなつた。」と記す。全96頁の冊子。

「表紙絵について」(p28)には、「火野葦平著より抜粋」と断り「四月三日、いよいよ総攻撃が開始せられた。」に始まる文章が載る。この文章は「東岸部隊」(『比島戦記』文藝春秋社 昭和18年3月)の「三 総攻撃」(pp92-93)から抜粋されている。「編集後記」にはこの絵が総攻撃当日に写生された油絵であること、向井画伯に御寄贈いただいたことを記している。

総攻撃の表紙絵の説明が、向井でなく火野の記録の抜粋で代えられていることは、二人の観測が、互いの記録を相補いうるものであることを示している。資料4と符合する。

本文には火野葦平の短篇「木の葉虫」(pp29-37)が載る。末尾に（バタアン戦話集の一篇）とある。『バタアン戦話集 敵将軍』（第一書房 昭和18年11月）に収載されている。

この号は発刊された時期に、火野も向井も任を解かれており、報道部長も交代している。

資料8 火野葦平「従軍手帖」(『インパール作戦従軍記—葦平「従軍手帖」全文翻刻』解説 渡辺考・増田周子 集英社 平成29年12月)

引用はすべて本書に拠る。巻末に「故・鶴島正男氏による翻刻作業〔「敍説」(一九九七～二〇〇一年所収)〕なくしては、決して成り立たなかった。」と記し謝意を表している。

昭和19年4月25日～9月7日にかけて火野が記した6冊のインパール作戦従軍手帖の翻刻から、火野の向井についての記載を拾う。

注 「ビルマ方面軍は、圧倒的な敵の制空権、制海権の下で、八コ師団余（のちに二コ師団が増強された十コ師団）の兵力で二十～三十コ師団の英印軍、中国軍に対し、ビルマを守り抜くことは難事の中の難事で、このままでは、やがてジリ貧に陥ると判断された。そこで、敵の準備いまだとのわかないのに乗じ、進んでアラカン山系内の要衝インパールを攻略し、敵に一撃をあたえうえアラカンの天嶮を利用して、防衛の強化をはかるとともに、印支連絡のルートを遮断し、あわせて、チャンドラ・ボースに、インドの一角に独立の旗挙げをさせ、政治的効果を狙ったのがインパール作戦であった。」(後勝『ビルマ戦記—方面軍参謀 悲劇の回想』(新装版) 光人社 平成8年11月 p65。なお、旧版は昭和28年に日本出版協同より刊行されている。)

インパール作戦は、ビルマ方面軍司令官河邊正三の麾下、第15軍(牟田口廉也司令官)、31師団(通称「烈」師団 佐藤幸徳師団長)、15師団(通称「祭」師団 山内正文師団長→柴田卯一師団長)、33師団(通称「弓」師団 柳田元三師団長→田中信男師団長)が参加し、火野・向井らは「弓」師団に従軍した。

4月25日(上海) 搭乗。一行、向井潤吉、古関祐而、朝日石山慶次郎、バンコック^(ママ)、軍司令部参謀部員沼大尉、朝日関口泰(中略)中尉、朝日記者など、同勢《空白》人。(p28)

画伯《向井潤吉》[以下フルネームの補記は略]と自動車便を借り、内山書店に行く。(p31)

- 4月26日(飛行場で佐藤春夫氏に会った)(屏東) まつ暗な町に散歩に出る。画伯、古関氏、石山氏。観山亭といふレストランで、高砂ビールをのむ。(p34)
- 4月27日 海南島(Saigong 西貢) 翠香園。昼のしいてある日本料亭。(中略) ここでできるといふまづい Tiger Beer。水つばいばかりで、高砂ビールに似てゐる。画伯酔ひを発し、腹に顔をかいて私のラバさんをおどる。かへる。(p40)
- 画伯の知人といふ青木少尉話に来る。(p40)
- 4月28日 Bangkok(盤谷) 町に、画伯と連れだつて買物に出る。日本人の店で、靴下、シャツ、小刀などを買ふ。(p45)
- 4月29日 天長節(ラングーン) 部屋を割りあてられる。画伯は一号館、古関氏は三号館。こちらは二号館で、正木君のゐる家。正木君、部屋を変つてくれる。(p54)
- せつかくの手帖が長くて、ポケットにはいらぬので、十冊とも上下を切つてもらふことにする。中上君が印刷屋でやつて貰ふといふので、ついてゆく。画伯も古関氏も正木君も同道。(p55)
- 5月7日(ラングーン→ナウンキオ) 満月の水祭があるといふので、画伯、古関君、三人でシェイ・ダゴン・パコダ^(ママ)へ行く。たいへんな人出である。(p62)
- サイドカーが来る。画伯と三人[高橋大尉]で乗り、兵舎に行く。アンペラ^{むしろ}《筵のような織物》の簡素な建物。住民に会ふ。(p64)
- 5月9日(メイミョウ) スバス・チャンドラ・ボース氏邸。パーモ長官の別荘。印度兵が門をひらく。(中略) 向井画伯は日印軍インパール入城の記録画を描きに来たのである。／それは大いに結構である。(中略) サハイ氏(仮政府内閣書記官長)はいつて来る。(中略) 向井画伯にも、「ああ、東京でお目に」といつたにはあきれた。日本語うまし。(中略) 画伯がスケッチした肖像を見せると、実物よりも肥えとる、と、顎のあたりをさして笑ひ、サインをする。(pp77-83)
- 5月12日(メーミョウ→マンダレー) 空襲が長いので、壕の中で眠くなる。(中略) 一時間あまり経つて、解除の警報鳴る。出てみると、空は雲に掩はれてゐるが、月でぼうと明るい。小便をしてゐるともう一つ向ふの壕から画伯と中埜君と出て来る。どこに落ちたかななどと話す。(p90)
- 市場をまはつて西瓜(一個十円)とシエレ煙草(ひとくくり50本3円で、マンゴを三つおまけ)を前線慰問用にすこし買つて、町に出ると、マンダレーはラングーン以上の廢墟である。主として重慶軍の放火によるもの。そのなかに冷たいものをのませるといふ瓦城園に入る。「アイスクリームは売り切れました」とて、冷しコーヒーをのむ。同行は、中尾大尉^(ママ)、濱島准尉、画伯。(p95)
- 5月13日(ナシガ) とつぜん、眼前に低く敵機があらはれた。(中略) みんなばらばらと木かげを見つけてかくれる。鉄兜をかぶつた画伯がずつと先の方から、手まねきして呼んでゐる。(p98)
- 5月16日(インダンギ) 雨もよひのせい、昨日のやうには暑くない。ときどき、ばらばらと来る。画伯は梁山泊を写生してゐる。(中略) 夕刻、医務室から、北島少尉が迎へに来る。画伯と二人で行く。二畳くらゐの竹の間に、いささかの馳走がととのへてある。(p111)
- 5月18日(インダンギ) 画伯、しきりにグルカ兵、チン兵を写生。(p118)
- 5月19日(インダンギ→シイン) 前線へ画伯を同行することがよいかわるいか、残るやうにいほうと思つたが、画伯が無頓着の様子なのでいはぬことにした。(p123)
- 5月20日(シーン→ティディム) 小川で身体を洗つたり、洗濯をしたりする。左手に力がはいらないので、画伯にしぼつてもらふ。すぐ乾く。蟬。(p125)

まだ没しない陽が西に夕焼けを作りかけてゐたが雨雲に消されて、薄黒色になり、やがて、ぱらぱらと降りはじめた。寒い。画伯の上衣を借り、雨合羽を小田兵長と二人で被る。画伯はジャケットを着こむ。くねくねと曲った急坂を自動車はのぼってゆく。(p125)

テイデウム着。(中略)車を本道から森のなかに入れ、二三回道を迷って、連絡所に行く。(中略)兵隊に案内されて、暗い崖道を降り、せまい谷につくられた小屋に行く。二畳くらゐ。ここへ六人寝ることになる。画伯に上衣をかへし、雑囊からあるだけのシャツの類を出して四枚着る。(pp127-28)

5月21日(テイデウム) 強いて死ぬ必要もないが、死は惜しくないのである。(中略)ただ、画伯のことを考えると、画伯を自分と同じ立場と思ふことはできないし、かういふ前線まで伴つて来たことがよかつたか悪かつたかと気になるのである。(p131)

下に小屋があつて、チンの苦力(と兵隊はいふ)の男女がある。女は特有のスカートをはき、首に紅玉の首かざり、右腕に真鍮の腕環を巻いてゐる。画伯、写生。その小屋に「美しき地図」があるのにおどろく。ぼろぼろになつてゐる。署名を求められる。(p132)

注「美しき地図」は資料1に挙げたように朝日新聞連載(挿絵 向井潤吉)の後、同昭和16年8月7日に単行本『長篇小説 美しき地図』(装幀 中川一政, カット 青柳喜兵衛)として改造社から刊行された。所蔵されていたのはこの単行本であろう。

5月23日(テイデウム) 寝ころんで「沃土」を読んでゐると、大久保憲美記者(毎日新聞東亜部)たづねて来る。前線から、物資徴達^(ママ)にかへつて来て、さつき三浦参謀と話をし、聞いてたづねて来たといふ。髭ぼうぼう、画伯からもらつた白い煙草をうまさうに吸ふ。(p138)

5月27日 海軍記念日(テイデウム) 雷鳴のためラヂオかからず。仕方なく、明るいうちから、寝る。画伯、パリーと絵かきの話などする。(p154)

注 従軍手帖第2冊巻末には以下の向井の話の内容が記されている。

○巴里にゐた岡本平といふ男、すこし気が変になり、橋の上を通るときに腹が痛くなるのは、両方から石ではさまれるからだ、といつたり、蚤の市の日本刀を買ひ集めたりした。日本刀は維新のどさくさに渡つて来たもので、国辱だから、無理算段をして買つてゐるのだといふのである。

○中村常夫^(ママ)。面白い物知り男。フランスにゐた。ギロチンのこと、医者のこと、画のこと、芝居のこと、なんでも知らぬことなし。ナポレオンが胃癌で死に、そのコックが支那人だつたといふこと、女優がどういふベッドに寝てゐること、ソルボンヌ大学で国際航空法などを習得したり、土浦に山本元帥^(ママ)の銅象を作つたり、中央公論から「ムツソリーニ自己を語る」を出したり、松陰神社には毎月花をもつて必ず詣つたり、挨拶することを知らなかつたりする男。

○ロンドンで行はれた万国博覧会に、日本館ができ、それにマネキンとしてパリから雇はれて行つた者がある。箆筒をほどいたり組みたてたりする役。

○巴里の街は美しく、靴みがきがない。ゐるのは靴墨の広告など。(p516)

5月28日(テイデウム) 向井さん、あんたの絵をハルピンで見ました、と、[柳田元三]閣下は鬱積した心のなかを隠して、次々に話をされるが、なにか、こちらは虚心に話ができない。(p155)

注 柳田は、インパールに敗走する英印軍第17師団の包圍殲滅に失敗した(3月24日)ため、5月12日、牟田口司令官に、火野らが従つた第33師団長を罷免されていた。(土門周平『インパール作戦 日本陸軍最後の決戦』PHP 研究所 平成17年2月 pp266-71 参照)

5月30日(テイデウム) 早く前線へ出たい心。あせつて来る。画伯をおいて、一人で行かうかと

も考へる。敵機。(p161)

丘の上からとつて来た石楠とコスモス。画伯、こんなものでも描かにや仕方がないと笑ふ。霧かかったり、晴れたり。月明るし。(p162)

6月1日(ティデウム) 四時ごろ、白い霧雨のなかを画伯と西機関へ行く。(中略) 今、[牟田口] 閣下はやすまれたばかりといふので、また後で来ることにし、事務室に行く。(p164)

[牟田口の談話要旨を火野が筆記] 自分はインダンギから、パレルの方へ廻るつもりだが、ともかく、ビシエンプール前線へ一度出て、見て貰ひたい。戦闘司令部のあつたモローから一望すると、インパール平原、ロクタク湖畔、その先にパレルの戦場も見え、実に壮大な感にうたれる。(p167)

注 牟田口と火野の談話は、夜八時の「時間が来たので」火野は「先に出」(p168)て、20人ほどの人員が3台のトラックで帰營している。終了予定時刻が定められていたようだ。この会見場面の記録に向井の名前は登場しないが、同席した可能性は高い。ただし、世田谷美術館アトリエ館所蔵の向井のスケッチ「牟田口廉也」像は、この夜の牟田口の服装「毛糸の袖なしチョッキ」(p165)とは異なるようである。

ここで強く印象づけられるのは、火野も向井もまだ見ぬロクタク湖畔一帯についての牟田口の描写「実に壮大な感にうたれる」である。これが、向井の「ロクタク湖白雨」(昭和19年制作 資料9参照)や火野の『青春と泥濘』(六興出版社 昭和24年3月)を導くいわば「起点」となったとも考えられる。

牟田口中将は、ビルマ方面軍司令官河邊正三中将与、作戦続行か否かを決定するインダンギでの会見(6月6日)(土門 前掲書 pp310-12)の途次、6月1日、ティディムの西機関に立ち寄った。火野が牟田口に会うのはこの日の夜である。牟田口は「烈」兵団長佐藤中将の撤退を翻意させようとしていたが、佐藤は5月31日夜半に無断撤退を開始し、翌6月1日にそれを司令部に打電報告した(土門 前掲書 pp298-300)。佐藤の撤退は、インパール作戦の敗退を不可避にするものであり、当日の牟田口の苦衷は火野の記録には見えないが、牟田口の「一望すると(中略)壮大な感にうたれる」という表現から、火野は牟田口の見果てぬ夢を察知したのではないか。

6月3日(ティデウム) 一日無為。(中略)十日ほどの月あかるし。(中略) 話、猥談になり、大久保君、99知つてゐるといふ。(中略) 隣の部屋でやるのをきいてゐた。雨降りて、女は蝙蝠傘を持って来てゐた。男が、この眼はたれのものときくと、あなたのものといふ。鼻は? あなたのもの、口は? あなたのもの、手は? あなたのもの、といろいろいつてゐたが、女あはてた風で、蝙蝠傘は私のものといつた。(画伯)(pp171-72)

6月5日(ヒアンズン) 案内のチン兵道を知らず、大迂回をして、急坂を何度ものぼり降りし、ゴム底靴(コレヒドール土産)の画伯、しきりに^{すべ}に^{すべ}る。(p178)

チン人ら、なにかぶつぶつ呟く。(中略) 次は[ヒアンズン] 村長の息子。すこし上唇のまくれた四人の少年。二番目らしく、もう一年も左耳から膿が出る、夜になると痛むといふ。中耳炎。[村長] パウザカン、膝に抱き、心配さう。竹で箸をつくり、消毒し、黄葉をガーゼにつけて耳に入れ、繃帯をしてやる。アルバジール(画伯の提供による)に他の薬品をませ、砂糖をつけようとすると、砂糖はあるといふ。(p181)

6月8日(ティデウム町) 画伯と、ティデウム町に行く。(中略) 大久保君、案内してくれる。近道とて、谷を上り下りしてゆく。足痛くて楽でない。画伯は例によつて^{すべ}る。(p184)

6月9日(ティデウム) 画伯、安崎中尉の肖像を描いたので、一詩を加へる。月出でず、雨となる。(p188)

6月17日(テイデウム) 天狗俳会。暇とはいやなものである。

[全12句のうち] 向井さんでべそなでなでする気なり (p198)

6月18日(テイデウム) 有村君から原稿紙をもらひ、手帖、封筒などを作る。(中略) 飯で糊をねり、紙を切り、糸でとちてゐるやうなたわいない処作がなにかたのしい。四冊つくり、一冊を大久保君へやる。画伯が第一頁に似顔をかいたので題して曰く「いんどのいくさはてもなく、ひごとよごとのうたてさに、ときにいととりふみをあみ、ひげのおとどへたてまつる」(pp198-99)

6月20日(マニプール河渡河点) トンザン。(中略) マニプールの渡河点附近に出る。すこし手前から、右へ折れ、車を待機させる。すぐ傍へマニプール川へそそぐ支流があつて、きれいな水が奔騰してゐる。／三時。画伯と渡河点に行つてみる。もとからあつたと思はれる鉄橋は破壊されて水中に落ち、かけられた二つの橋も流れ、渦をまいた濁水が矢の早さでながれてゐる。(中略) この水速ではとしばらくぼんやりと眺める。(中略) 画伯と裸になり、流れにつかる。すこし冷たい。アボアボ川を思ひだす。兵隊はながれに来て米を洗ひ、炊爨をはじめ。煙を出すなどなる声。(p207)

注 アボアボ川は、ルソン島中部、バターン半島のサマット山附近の密林を流れる川。火野と向井は昭和17年3月、フィリピン戦におけるバターン半島総攻撃に従軍し、この川の記憶を共有している。資料3『兵隊の地図』3月29日には観測地から前線近くに案内されるが、その記録には「しばらく行くと溪流のあるところに出た。板をくみ合はせたばかりの福山橋[速橋]といふのがあつた。アボアボ川である。浅いので、底の岩がいたるところに出て、すみ切つた早い水が白い飛沫になつてながれてゐた。兵隊たちが大勢で、洗濯をしたり、炊爨をしたり、裸になつて水に浸つたりしてゐた。そこら中は、どこも兵隊であふれてゐた。こんなに多くの部隊がゐるやうとは思ひがけなかつた。」(p96)とある。

待避所へかへる。(中略) かへる道で取つて来た花。蠟燭のやうな芯を一枚の葉がとりまいてゐて、茎には黒い斑点があり、すこしいやらしくて毒草かと思つたが、花の奥にいっぱい蟻がくつついて蜜を吸つてゐる様子なので、毒はないのであらう。画伯写生しながらすこし猥褻ぢやなと笑ふ。(pp208-09)

6月21日(3299高地) 3299まではまだ数箇所も道がふさがつてゐるのでとても行けない、今日すつかり開けるつもりとのこと。／出発。(中略) 四キロほど行つたところの道の曲り角に車を入れて、大休止。(中略) 青砥副官、根本少尉、画伯と、一軒の小屋にはいり、食事をして、横になつたと思ふと、昨夜の不眠の疲れで、すぐに眠つてしまった。(p212)

6月22日(3299) 画伯と出る。(中略) あたりいちめんは何百といふ自動車が散乱し、焼けてゐるもの、てんぷくしてゐるもの、こはれてゐるものがある。(中略) ひつくりかへつてゐる自動車の残骸には、象のマークが多く、猫もある。赤十字のマークのものも多い。(pp218-19)

注 向井潤吉作画「印緬戦線 敵機甲部隊を殲滅」(陸軍省・海軍省編纂『昭和十九年秋季大祭記念 靖国之絵巻』靖国神社臨時大祭委員編纂発行 昭和19年9月)には残骸の前面に黒猫の標識が描かれている。この絵の制作年はわからないが、向井が昭和18年6月に従軍した時の作品か。

画伯は本ばかり読んでゐる。「成吉思汗」(p222)

6月23日(3299) 橋を架けに行くといふので副官について出る。画伯は留守番。(中略) 日暮れて帰營。小雨。(中略) 画伯、巴里の話などに花咲かせ、深更にいたる。夜にいたり雨いよいよはげし。(pp222-26)

6月25日(3299) 画伯、幕舎の残骸を画いてゐる。一緒に軽四でかへる。(p231)

6月26日(91マイル) 20時、出発。杉山隊も主力をもって81マイルに前進するとていつしよ。
(中略)画伯は後の車の運転台に乗る。(p233)

ここはおほむね91マイル。(中略)寝るところもほとんどないらしく、画伯と二人、トラックのなかに寝ることにする。(中略)トラック道の下の木かげに入る。天幕をとき、毛布を出して寝床をつくる。シートの屋根があり、たのしいわが家である。(pp234-35)

注「たのしいわが家」は「私の青空」の歌詞「せまいながらも 楽しいわが家」からと思われる。「私の青空」は、アメリカンポップス“My Blue Heaven”を原曲とし、訳詞 堀内敬三、歌 二村定一で昭和3年に日本に紹介された。原曲とはイメージの異なる訳詞だが、日本人の庶民感覚に合い、「家族のささやかな幸せと安らぎ」を思わせ、誰もが知る歌の一つとなっていた。

6月27日(チッカ) 画伯、所在なくて、花などを描く。／同乗して来た軍医少尉、昨日は気分が悪くてとてもいけさうもないと弱音を吹いてゐたが、今日はすこし元気を回復し、眼のさきに指をつきつけて、あんたが向井さんで、そつちが火野さんですかなどといふ。(中略)／絵をいくらかやつてゐたらしく、画伯のスケッチブックを見て、この木がこちらにあつて、山が向ふにあるやうに見えるのは何故かときいて、画伯を当惑させる。(p236)

チン人30名来る。(中略)いろいろな灯火。いろいろな運搬道具。画伯と二人の荷物を四人の子供たちに持たせて先に降りる。(中略)子供の苦力に乾麵包三つづつやると、見かじめ役らしい老人もぬつと手を出す。(p239)

みんなを残し、画伯と二人、副官と行く。／止んでゐた雨また降る。チッカに入り、警備隊に行く。(中略)蚊帳を釣つて寝る。六時半。(p242)

7月1日(ライマナイ) 曇天。一人の兵隊来る。(中略)道を聞くと、その山脚づたひに行くと稜線に出ると教へてくれる。道らしいのがあるのは砲の陣地侵入路で、先はみんな切れてゐるのだとのこと。／出発。山脚へ出るのも道はなく、田圃のなかを踵まで水に没して行く。背囊と凶囊の負革が肩をきりきりと噛む。(中略)すこしづつ登りになる。駄馬道程度のもので、ときに岩がつき出てゐたり、石ころを足場にして登らなければならない。砲撃。敵が撃ちはじめたものらしい。雨ぱらぱらと来る。すこし上つて、ふりかへると、インパール平原が眼下にひらけはじめた。水光るロクタク湖がまづ眼に入った。なほ登る。(p245)

ロクタク湖は湖といふよりも、とりとめもない湿地帯のひろがりのやうである。水際と岸との区別などはまったくなく、乾期には陸となり、雨季には湖となるものらしい。水たまりの大きいを見るやうに、緑の平地へいたるところ水があふれて、まつ白に光つてゐる。湖の南端にいくつか島があつて、模型のやうにくつきりと緑の襞をあらはして坐り、はつきりと水に形をうつしてゐる。そこで水が終り、まつ蒼な絨氈がひろがつて、また、大小三つ柔かな瘤のある小山がぼつかりと置かれたやうに横たはつてゐる。地図を見ると、ロクタク湖は眼前に見る水たまりよりずっと広く、倍くらゐに描かれてあつて、三つ瘤の丘は水中の島である。まだ本格的に雨が降らぬので水量が足りないのであらう。(中略)湖の先には横に峨々たる山脈が横はり、黒味を帯びた青い色に沈んでゐる。パレルの戦場はその山岳の中にちがひない。平地は海のやうで、点々とある部落はいづれも樹木に包まれて、島のやうに見える。ビシエンプール、インパールはまだ望むことができない。見てゐる間に空は曇つたり晴れたりし、一帯が白く煙つて来ると、ロクタク

湖だけが、浮くやうに光りを強め、それも煙りはじめると、水面のなかに一筋帯を投げたやうに南北へ貫くものがある。(中略) 天候は一定せず、ある場所は照り、ある部落の上だけ雲がかたまつて、そこだけ紗の幕を垂らしたやうに雨が降つてゐる。特別にどこが印度といふところもないが、全体の大きな感じが、印度へ来たといふ旅情をさそふ。しかし、この壮麗な景観のなかでは凄惨な死闘がつづけられてゐるのである。わが将兵の多くがここに屍の山をきづいた。今もなほきつきつつある。さう思つて見ると、この新戦場にはいひやうもない鬼気がただよつてゐる。(pp246-48)

雨はやみ、青空が出て、暑くなつて来る。いよいよ荷は重くなり、胸をしめつけて来る。負革のために息苦しくなる。(中略) 画伯はなかなか元気である。(中略) 林が深くなり、坂をくだると細い清流がある。そこへ荷を下し、顔を洗ふ。ひやりとしてよい気持。思はず、がぶがぶとのむ。(中略) 水で元気をとりもどし、上ると、三十米ほどで、幕舎がある。どろどろの道のなかに入ると、画伯のよぶ声をする。そこへ行く。(中略) すぐ上の幕舎に行く。(中略) 申告。(p251)

幕舎にかへつて、クレオソート丸を五つのみ、蚊帳を釣り、昨夜からの疲れで、二人とも立ちどころにぐつぐつと眠つてしまった。(p252)

注 ここではじめて二人はロクタク湖を俯瞰する。火野の記録はほとんどそのまま『青春と泥濘』に使われた。向井に刻まれた風景は、帰国後、秋から冬にかけ資料9に描かれた。

7月2日(ライマナイ) 地図をうつしながら、画伯と二人と砂糖ばかり舐める。蚊と蠅と蜂。(p256)

山内中佐が、管理部ですこし貰つたからとて、たうもろこしの焼いたのを半分くれる。それを画伯と半分づつ食ふ。蚊帳の中に蠟燭を立て思はぬ身の上話などする。拍子木虫。(p257)

7月4日(コカダン) 雨のなかを首藤軍曹の案内にて出発。画伯は残す。(中略) 毛布は画伯のために残した。(中略) 路上の凄惨な状態に涙がとまらない。(pp258-59)

7月6日(ライマナイ) 雨降つて来る。17時半出発。(中略) 19時半、ライマナイ着。二日留守にただけなのに、なにか、ここの幕舎がなつかしく、画伯の顔を見て、ふつと眼頭があつくなつた。感傷的な自分である。(pp275-76)

7月7日(ライマナイ) 彼は外所啓次郎、兄は芳得。引つかへしたあと、バナナとジャングルいちちくと称する果実を持って来てくれた。なんの実かわからないが、上品な味のものである。六里ほど先から見つけて来たものだといふ。果物をあまり嗜まぬ画伯も舌鼓をうつ。(p280)

日暮れ近く、画伯と二人で下の流れに降り、炊爨の支度をする。(中略) 久しぶりの自炊。うまし。雨。(p281)

7月8日(38マイル) 樹間から仰ぐと雲の中を戦闘機八機、その後方から爆撃機六機、どうも友軍機らしいと画伯とよろこぶ。森林の坂を下つてゆくと、平地に出た。(中略) 道なのか、なにかわからぬ泥濘路。画伯もこちららも疲れ、肩はきりきりと痛み、胸は苦しく、泣きたいやうである。(p284)

道傍にしゃがんでゐる一人の兵隊と画伯話をしてゐると、三重県で、近所の者らしく、あのあたりは漁師村で、元気者が多いのに、しつかりしなくては駄目ではないかとマラリヤをおこつてゐる。阿部隊の兵隊が多く気合が足らぬのが、自分の郷里だけに、画伯ははがゆいのである。(p285)

森の入口でトラックから下される。(中略) 何度か迷ってやつと土屋中尉の幕舎にたどりつくると、その幕舎にやすんで下さいと暗い中からいふ。そこへ行くと、兵隊二人寝てゐてなかなか場所をゆづらない。腹が立つてどなる。ぬれ畳。やつと端の方に画伯と重なるやうにして横になる。(p286)

7月9日(66.5マイル) 雨やんで、青空見え、敵機何回となく来て、附近を銃撃。そのたびに、土屋中尉と画伯と三人、防空壕に入る。(p287)

49マイル。(中略) 車はここまでの由。(中略) 便がなかつたら島田准尉(小隊長)のところに泊めてもらふやうに話してゐると、トラックが来た。戦車隊だ。島田准尉出て行って、軍事小説家の火野先生ほか一名を乗せてもらひたいといつてゐる。画伯と二人乗る。(p288)

7月10日(72マイル) トラック止まる。ここで全員降りて下さいといふ。戦車隊の位置らしく、まだ明けがたまでは相当時間があるのに、70マイルまで送らうとはせず、歩いて下さいといつて、さつさと車を森林のなかへ待避してしまつた。画伯がもはや正確とはいへなくなつた標準時計を見ると6時すこし過ぎ。(中略) 泊まるとて、小屋などもない様子。画伯と二人、ちよつと情ない顔を見あはせたが、さりとて、どうとも仕方がないので、外被をかぶり、棒をさがして来て荷物に通し、ぼつぼつ前進をはじめ。(p289)

休憩してゐると、三人の患者が来た。中尉と准尉と軍曹。そばに腰をかける。画伯が煙草をやると何度も礼をいふ。(p291)

画伯と顔見あはせ、どうしても渡らねばならぬ故決心をする。河幅は三十米ばかり、靴をぬぎ、跣足となる。画伯、靴をふりわけにして肩に負ひ、よいしよと手を打つてから、するするとわたる。その身軽なのに感心する。こちらはさうはいかない。(中略) 大きな荷物がのこつてゐるのでまた引つかへし、画伯と二人でどうにか運ぶ。画伯は渡る途中、飛行機でも来たら心配してゐたが、わたりきつてすこし坂をのぼつたとき、爆音。顔見あはせて笑ひ、木かげに入つて朝食をする。前進。この膝栗毛道中は後世にとどめる価値ありとて、セルフ・タイマをつけて写真にとり、画伯はわが手帖へ記録画を残す。敵機来て、葦のなかにかくれる。(中略) やつと葦原を抜け、森林のなかの道らしい道に出て、しばらく行くと、(中略) 点々と小屋があつて、兵隊が居る。(中略) 画伯をのこし、部落の方に連絡に行き、小泉少尉(作間部隊将校、72マイル警備隊)に会ふと、車のこと手配してくれる。(中略) 画伯をともなつて部落に来ると、日が暮れ、本道わきの患者輸送隊の一行の小屋に入る。色のついた水を飲んで来て湯をわかし、塩を入れてのむ。(pp292-94)

7月11日(79マイル) 戦車の音がしたと思つてゐると、画伯からおこされた。あはてて荷づくりをして飛びだすと粉味噌の筒を忘れた。(中略) 画伯とまた荷を棒に通して歩きながら、83マイルからまた爆弾坂まで歩くやうなことになるのではないかなどと笑ふ。(中略) 安西中尉は(中略) 右目は見えないのだ。画伯が近ごろは眼科手術が進歩してゐるから、大丈夫ですよとなぐさめてゐる。(pp295-96)

薄暮。雨。こはれたトラックの運転台に避難。つめたい飯をすこし食べる。食欲がまるでない。画伯は健啖である。(中略) 二人のせて貰ひ、すぐに出発。(中略) 画伯と二人で棒を通して登つたが、ずるずると迂り、泥のなかに何度もころび、おくれてしまつた。(pp297-98)

7月12日(89マイル) すでに糧秣欠乏し、馬糧たるカラバイで二食にしてゐるが、通じはなかな

かよろしいといふ話。できめん、画伯、便通ひんぱんになる。(p299)

7月14日(3299) 22時ごろ出発。(中略)画伯が煙草を吸つてゐると、もしもし、最後の火を消さないで私に下さいといふ患者がある。(p301)

坂をくだり、本道に出て、3299の平地に到着。／杉山隊本部に行くと、塚越中尉が話してくれて、寝台を準備してくれた。(中略)疲れてゐたので、二つの寝台にかぶさるやうに蚊帳を吊つて寝る。画伯しきりに放屁し、カラバイのせいなりといふ。(p301-02)

7月15日(3299) 画伯と安崎隊に行く。(中略)[トラックに同乗しているインド国民軍兵士に]一本の煙草をわけてのむので、画伯煙草をやる。(p304)

7月16日(マニプル川) 自分たちが行くときには飛行機が昨日来たとか、去つたあとをやられたとか、いふ風になるね、と画伯と悪運つよきを笑ふ。(p307)

7月17日(テイデム) 河原の小屋に印度兵四五名。画伯写生に行くと、なかなか気どつたポーズをする。(中略)画伯が色つき肖像を一枚描いて[下級インド兵に]わたすと、なにもいはず、無造作に四つに折つて、荷物のなかにつこんだ。(pp308-09)

7月21日(フォートホワイト) 下に行く車はないの^(ママ)のことに、止むなく歩くことにして、9時過ぎ、小雨のなかを出発。画伯とまた荷を棒に通して持つ。(中略)行くときは夜間通過して、なにもわからず、すこし風景が見たいなどと話しあつたが、今度は昼間歩くのだから、その歎きはもはやないわけである。(中略)同じやうな道を前進。いづれも、さかんに放屁と脱糞。カラバイのせいである。(p318)

まつ黄色な実[マンゴー]がとろりとしむやうに舌にさはり、カラバイの腹壁にしみわたる。夢中のやうに、たちまち全部を平らげた。一つ五十銭は安くはないが、マニラでは一個十円もしてゐると画伯いふ。ラングーンでも一円くらゐの由。(pp319-20)

7月23日(シーン) いたるところでトラックが立往生をしてゐる。(中略)画伯が先頭に立つて行くと、赤土の上に降りたと思ふと、ずぶずぶと腰までぬめりこんだ。引き上げると全身まつ赤である。(中略)そばの水たまりで洗つてもこびりついた赤泥が落ちず、やけ糞だからこのまま行かうと画伯も苦笑する。(p327)

低い植物は木とも草とも知れず、ひよろひよろと細い幹が十尺ほど立つてゐるのに幅一尺以上もある団扇のやうな葉が五六枚唐突にくつついてゐたり、根もとからちかちかに巨大な赤味をおびた大根の葉のやうな葉が出てゐたり、奇妙な形と色の植物が密生してゐて、画伯はどんな出たらめな植物を画いてもありさうだといふ。(pp330-31)

将校室で装具をとき、また隊長室に行く。(中略)前線の模様など話す。二本のウイスキーで若干酩酊。辞して将校室に帰り、蚊帳に入つて寝る。画伯、浅石、関両将校とおそくまで話してゐる様子。／いつも感じるのであるが、話が現象的ではがゆいことがあり、やめればよいのにとはらはらせざるを得ない。画伯がいつ寝たのかは知らなかつたが、すさまじい雷鳴の音に眼がさめると、暗黒で、家も森も流れてしまふやうな豪雨である。(p331)

注 従軍手帖第4冊巻末には向井・火野連盟で大久保に宛てた以下の賞状の写しがある。

「賞状(写し)

淫巴留原より手出無に帰来すれば囊中我等が為に慰問品あるを知る、^{うべ}宣なり今日是を啖はざれば何時の日にか此の珍宝を如何せん、乃ち囊を開き^{ひら}盃を挙げて戦陣の労を落し貴官の厚情に酬ゆ、斯くて勝

利盃初めて其の所と時とを得たりと云爾、酔つて是を賞す／十九年七月二十日 安崎隊にて／火野葦平／向井潤吉／毎日報道班員／大久保憲美殿」(p576)

8月10日(芒市) シャンバツグ。(木綿でつくつたこの鞆は普通シャンバツグといはれてゐるが、シャン地方だけではなく、チン人も、カチン人も、同様に持つてゐるやうだ。ただ、その模様などに特色があるのであらう。向井画伯からたのまれてゐたので探したが、なかなか手に入らない。マンダレーで別れるとき、二つ三つ買つて来てくれるやうにとて、30円ほど出してゐたが、来てみると、一個二百円三百円といふ。井上中尉は土民の中に信用を博してゐる王様らしいので、あとできいてみると、笑つて、買ふのはたいへんですよ、私がなんとかかませうと無造作にいつた。銀三枚あれば買へると、軍票の下つてゐる話をした。) (p383)

8月26日(マンダレー) アラカン・パコダ^(ママ)に行きませんかと松田中尉にさそはれて、この前画伯と見そこなつてゐたので、早速同道。(p429)

8月27日(メイミョウ) 中埜君と村田君と来る。久闊。村田君が一人残つてゐるらしい。古関君はしばらく盤谷に滞在、「ビルマ派遣軍の歌」はそこで作曲してラングーンへ送る由、向井画伯はかへつたらしく、石山さんは沼南支局長になるとのこと。(p431)

資料9 向井潤吉「ロクタク湖白雨」(油彩 昭和19年 50号)



(北九州市立文学館蔵)

この絵は、「一九四四（昭和一九）年の秋から冬にかけて、向井が帰国後に描いた」ものであるとされる。（資料8 渡辺考「もうひとりの主役」『インパール作戦従軍記』集英社 平成29年12月 p474）

杉並区阿佐ヶ谷3丁目273番地に鈍魚庵を移した時の新築祝いとして向井が火野に贈り、「玄関脇の応接間の壁面を飾っていた。」（玉井史太郎『河伯洞余滴』学習研究社 平成12年5月 p101）

資料8の解説者渡辺考は「もうひとりの主役」で、北九州市立文学館にこの絵とともに寄託された毛筆書きの文章を紹介している。（pp474-75）

昭和十九年七月イムパール戦線敗退直前の一場面である。爆撃の為に火災をおこしたニトーコン部落を急降下攻撃する二機、日本軍後方を爆撃して、東より南より、又新しく出撃するすべては敵英印軍である。／スコールの激しい雨脚を呆然と立って眺めているのは、火野葦平君であり、坐しているのは向井である。この一本道はイムパールに通じるものであり、附近は人馬の死臭が充ちて、明るい風景とは裏腹の凄惨な場面である。向井記

北九州市立文学館学芸員 稲田大貴氏のご教示によれば、これは「色紙」に書かれているとのことである。

この絵の風景に至る二人の道のりは、資料8の手記や『火野葦平選集』第四巻（東京創元社 昭和34年2月）の火野自身の「解説」（p434）資料16からも辿ることができる。

資料10 火野葦平「赤道祭」（毎日新聞 昭和26年3月11日～8月19日 全162回）

挿絵 向井潤吉。

昭和26年11月 新潮社より単行本刊行。（装幀 向井潤吉）

新聞連載の本文中央には各回の内容に沿った挿絵が入り、見出し付近には章ごとの小画が入る。小画の図案は全て水中の生物である。これは、主人公 藤川第四郎が鰻の研究者であること、物語の舞台が城ヶ島、博多、沖縄、南洋など海に関係が深いことからであろう。

連載時の各章題と小画は以下の通り。

- | | | |
|-------------|----------------|---------|
| (1)～(8) | 人 魚 | 巻貝 |
| (9)～(21) | 遠い灯 | 蟹 |
| (22)～(29) | 赤と青 | トビウオ |
| (30)～(40) | 海 妖 | 鰻 |
| (41)～(49) | 女の運命 | 河豚 |
| (50)～(59) | 岐 路 | エイ |
| (60)～(72) | 貞操試験 | タツノオトシゴ |
| (73)～(86) | 二つのもの | ムツゴロウ |
| (87)～(98) | 「愛する者は、相逢うなかれ」 | ドンコ |
| (99)～(109) | 潮 流 | 海老 |
| (110)～(125) | 誘 惑 | 真珠貝 |
| (126)～(135) | 地 獄 船 | ウミガメ |
| (136)～(150) | 南 海 | 珊瑚 |

- (151)～(158) 奈 落 蝟
 (159)～(162) エピロオグ 海藻カ

昭和26年3月6日付朝刊に「昨秋追放解除となり注目を浴びている」火野葦平による小説「赤道祭（せきどうさい）」の連載が近く始まる旨の記事が載り、「さし絵は行動美術の向井潤吉氏が担当します」と紹介されている。同記事には「作者の言葉」として火野が執筆への意気込みを寄せている。

単行本の装幀も向井によるもので、表紙・裏表紙は沖縄の紅型を想起させるデザインで空を飛ぶ鳥たちが描かれている。扉は題字と顕微鏡のカットで構成される。挿絵は、連載時のものから19点が抜粋掲載された。

注 角度は異なるが、同じ福岡市の中洲を描いた挿画が「革命前後」（中央公論 昭和34年8月号 pp326-27）に見られる。

資料11 火野葦平「花と龍」（読売新聞 昭和27年6月20日～28年5月11日 全324回）

連載時の挿画は向井潤吉。

昭和28年 新潮社より単行本刊行（上巻5月25日，下巻7月31日）。上下巻とも装幀 斎藤清，見返し・挿絵 向井潤吉。

本文中央には各回の内容に沿った挿絵が入り，見出し付近にはほぼ章ごとになる小画が入る。連載12回を初めに，およそ30回ごとに「あらすじ」が入る。各章題と小画は以下の通り。

- | | | |
|-------------|------|--------|
| (1)～(12) | 女の出発 | 背負い籠 |
| (13)～(25) | 男の出発 | 柑橘 |
| (26)～(34) | 男と女 | 男女の線画 |
| (35)～(44) | 夫 婦 | 猫の顔 |
| (45)～(53) | 裸一貫 | 蟻 |
| (54)～(67) | 追 放 | 巻貝（タテ） |
| (68)～(79) | 仇 花 | 薔薇（一輪） |
| (80)～(93) | 愛 憎 | 薬缶 |
| (94)～(113) | 人情の谷 | 狐の面 |
| (114)～(130) | 七人の敵 | 印章 |
| (131)～(148) | 父と母 | 巻糸 |
| (149)～(166) | 死 生 | ランプ |
| (167)～(188) | 命 | 巻貝（横） |
| (189)～(205) | 大都会 | 絵記号 |
| (206)～(215) | 青 春 | 飛ぶ鴨 |
| (216)～(227) | 虚 実 | 薔薇（二輪） |
| (228)～(253) | 勝 敗 | 扇子（○印） |
| (254)～(270) | 親 子 | 歩く鴨 |
| (271)～(290) | 宿 命 | 賽子 |
| (291)～(312) | 暴 力 | 燈籠 |

- (313)～(318) 市街戦 滑空する鳥
(319)～(324) 死と夢 花と龍図案

昭和 27 年 6 月 5 日付読売新聞の火野による小説連載を予告する記事に、「挿絵は名コンビを謳われる行動美術の向井潤吉氏」とある。

単行本には、連載時の向井の挿絵から上巻 15 点、下巻 12 点を抜粋し掲載。見返し画は、連載時に類似の挿絵があるが異なる箇所もあるため、単行本用に描き直したか、新たに描いたと考えられる。

資料 12 火野葦平『どんこの舌』(創元社 昭和 27 年 12 月)

装幀は奥田雀草。表紙『鈍魚の舌』・扉は「鈍魚^{どんこ}の舌」。84 篇の随筆集。

「西洋ウナギ」

向井潤吉画伯も、パリーにゐたころ、フランス人の料理人が、ウナギをコンクリートの三和土のうへにたたきつけて、殺してゐたのを見てあきれた、と笑ってゐた。(p52)

「夜間飛行」

四月十五日、飛行機で、東京から九州へ帰った。(中略)ところが、前夜は、新しい新聞連載小説の打合せで、向井潤吉画伯を加へて飲みすぎた。(p182)

注 読売新聞連載中(6月20日～)の「花と龍」についての打合せか。

「胃袋」

ずっと以前、或る新聞社から、珍しい胃袋の芸当を見ないかと招待されたことがある。私は差しかへがあって行けなかったが、後になって、そのときの話を、向井潤吉画伯から聞かされた。芸当を公開したのは、眉目秀麗な二十四五歳の青年だったらしいが、向井画伯もほとんど感心したとのこと。／ラムネの玉ほどの青玉、赤玉、白玉を口に入れてのみこむ。客に、どの玉を取りだすか、注文させる。「赤玉」といふと、赤い玉をはき出す。(中略)いろいろな金魚を三匹のむ、糸の先に釣針をつけて口に入れ、客の指定した金魚を釣り出す。／「向井さん、それ、ほんとかね?」／「ほんとも。小さいころ、誤ってラムネの玉をのみくだしたのを、はきだしたのがきっかけで、稽古しはじめたら、そんなことができるやうになったといふよ。なんでも修練だね。」(pp218-19)

資料 13 火野葦平『河童七変化』(宝文館 昭和 32 年 4 月)

「向井潤吉画伯とのコンビ」

このごろ、方々へ原稿をわたした後、発行された雑誌を見ると、ほとんど向井さんの挿絵が入っている。私の小説の絵は向井画伯、という風についての間になつてゐるらしい。むろん、私は向井さんの絵が好きだし、私の小説の肌にも合つてゐるので、それに不服はない。考えてみると、向井さんと私とのコンビも、十七年になる。昭和十五年、朝日新聞に連載した「美しき地図」の挿絵をかいてもらったのが最初、フィリッピンのパタアン作戦にも、ビルマのインパール作戦にも同道、終戦後は毎日新聞の「赤道祭」、読売新聞の「花と龍」など、二人行脚をした。小説と挿絵とはいわば夫婦みたいなもので、調子が合わないと、どうにも困るものだが、向井さんとコンビの場合は、安心して書くことが出来る。しかし、実はほんとうに好きなのは、向井さんの人柄である。(p126)

資料14 向井潤吉「昭和二十九年七月、パリ凱旋門前にて、女馭者ラシエル・ドランジュさんの馬車に乗りて」(『火野葦平選集』第六巻口絵 東京創元社 昭和33年4月)

向井の口絵画は、火野の昭和28年5月末から8月はじめにかけての渡欧時の写真をもとに描かれている。写真は、読売新聞昭和28年7月5日(夕刊)に「女馭者 パリにて 火野葦平」の題のもと、ドランジュさんの短い紹介記事および「凱旋門にて 車上が筆者」の付記とともに大きく掲載されている。火野は「文学界」昭和29年2月号「創作特輯」欄に短篇「女馭者」を掲載しており、同名の女馭者と記念撮影するなどパリでの交流が描かれている。

資料15 火野葦平「解説」(『火野葦平選集』第六巻 東京創元社 昭和33年4月 pp437-46)

「最後になったが、この巻のために、絵を描いて下さった向井潤吉画伯にお礼を述べたい。向井さんとは、「花と龍」「赤道祭」など、新聞小説の外、文と絵のコンビとして縁が深いだけでなく、フィリピン作戦、インパール作戦などに従軍し、生死をともした仲である。(昭和三十三年二月二十五日)」(p446)

資料16 火野葦平「解説」(『火野葦平選集』第四巻 東京創元社 昭和34年2月 pp421-40)

『青春と泥濘』執筆に至る経緯が詳述されている。

「日本の新聞は、連日のように、「インパール入城間近し」と書きたてた。(中略)とんでもない話で、インパール戦線は膠着状態におちいつていたのみならず、日本軍は凄惨な敗勢の中でのたうつていたのである。四月末、大本営報道班員として、私が東京を出発するときには、報道部では、「今から行っても、インパール入城には間に合わんかも知れんぞ」などといっていたくらいだ。同行は向井潤吉画伯、作曲の古関裕而君。はじめは宮本三郎画伯が行くことになっていて、送別会まで開いたのであったが、出発の前日になって急病になったため、報道部から、急に、代りとして向井さんに電話をかけた。向井さんは「いつしよに行く作家は誰？」と訊ね、私の名を聞くと「そんなら行きましょう」と即座に承諾したということだ。向井さんとは、昭和十五年、朝日新聞に、「美しき地図」を連載したとき、挿絵を担当してもらったからの知りあいだが、その後、昭和十七年、フィリピン作戦にも従軍し、バタアン半島のジャングル内で生死をともした。私は向井さんの絵とともに、その人柄を深く愛していたので、向井さんが同行すると知つてよろこんだ。」(p422)

「古関君を残し、向井さんと二人、五月七日、小さい偵察機で、ラングーンを出発した。(中略)七月一日、どうにか、「弓」兵团司令部のあるライマナイにたどりつくことが出来たのである。(中略)その惨状とわびしさとは見るに耐えないほどだった。この高台から、美しいロクタク湖や、ひろびろした平原の戦場がよく見える。(中略)七月四日、向井さんを残して、私一人、下士官に案内してもらって、そこ[数キロ先のコカダンのジャングル内の戦闘指揮所]へ行つた。(中略)遂に、七月八日、全軍に総転進命令がくだつたのである。(中略)そこで、向井さんと私も部隊とともに退却を開始した。」(pp423-24)

「インパール作戦とともに従軍した向井画伯と古関裕而君とは、いわば戦友で、その後、ずっと親密につきあっている。向井さんとは「赤道祭」(毎日新聞連載、昭和二十六年)や、「花と龍」(読売新聞連載、昭和二十七年)その他の挿絵コンビをつづけて居り、古関君は、私が作詞した、若松高等学校、戸畑高等学校、香椎高等学校、その他、十数校の校歌の作曲を全部頼んでやつてもらった。向井さんはビルマから帰ると、インパール前線を描いた百二十号の大作をものし、傑作として評判になった。

ロクタク湖が光り、スコールがスタレになつて左から横ぎつて行く壮大な構図。その下の方に、向井さんと私らしい二人の人間が小さく描かれている。すばらしい絵である。昭和二十八年春、私が阿佐ヶ谷へ鈍魚庵を建てたとき、向井さんはこの絵を新築祝いとしてくれた。私はそれを壁間にかかげ、見るたびに、当時の思い出に耽つているのである。(月報参照)」(pp433-34)

資料 17 向井潤吉「葦平軍曹・潤吉上等兵」(「火野葦平選集月報第7号」 東京創元社 昭和34年2月)

従軍を2度共にした頃の回想。

「昭和十七年五月の、バタアン半島総攻撃には、葦平さんのお供で中央突破部隊に配属された。この時の戦闘は全く一方的な圧勝で、随分と危ない目にも逢ったが、別に怖いとも思わなかった。(中略)十九年の四月下旬再び組合わされて、印緬国境へ発つ事になった。サイパン失陥の前後であり、陸軍ではそろそろ怪しくなった戦線の景気直しにイムパール作戦に望みをかけ、その入城の機を捉えて葦平さんの感激の詩に古関裕而さんが作曲し、そして私が入城光景をスケッチし、銃後の士気を一段と昂めようとする魂胆であったのである。私達は福岡で葦平さんと落合い(中略)上海經由で緬甸へ出掛けたのである。(中略)私は一握りのもみを配給されて、それを鉄兜の中で搗き、ジャングル野菜を煮て食うより以外に術のない生活であったが、そんな時にでも葦平さんは端然と坐って、こまかいメモを、それも絵入りで丹念に綴っていたのである。それは大胆というよりも何か貴い使命感が溢れているといった風であった。／司令部が戦線を放棄して引揚げる前日、私達二人は乞食同然の姿でトボトボと後退したが、(中略)昼夜の別なく三三伍伍の傷病兵と前後して歩き続けたのである。(中略)放心状態になって葦平さんの腰について足を動かしたにすぎない次第だが、飢餓と冒険と不安の中の何十日を想出すと、今でもゾットする経験であった。全く中老の(青春泥濘)そのままであった。／葦平さんの無類の誠実さと、超人的な体力は今更語るまでもない事実だが二度の従軍のお供をして、私はそれを更に心底から確かめただけであった。」(pp5-7)

注 さらに同月報には「向井潤吉画伯の「インパール作戦」をバックにした著者。(昭和二十八年)」のキャプションのもと、向井の「ロクタク湖白雨」を背景とした和服姿の火野の写真が掲載されている。(p6) 資料9・資料14参照。

昭和28年3月は阿佐ヶ谷に新たな鈍魚庵を新築しており、この新築祝いに向井が贈った「インパール戦場を描いた油絵の大作」(火野葦平「年譜」『火野葦平選集』第八巻 p547)が資料9「ロクタク湖白雨」であったことは選集の第四巻解説(p434)から明らかである。

「こまかいメモを、それも絵入りで丹念に綴つた」ものが資料8の従軍手帖全6冊。

資料 18 火野葦平「革命前後」(中央公論 昭和34年5月～12月 全8回)

昭和35年1月30日、中央公論社より単行本刊行。

中央公論誌には、各回の冒頭見開きに内容に沿ったカットが入る。第1回～第6回は向井潤吉、第7回と最終第8回は山本正によるもの。

向井によるカットがある回の掲載号と画のモチーフは以下のとおり。

第1回(第74年6号 昭和34年5月号) 小型客船と海岸沿いの家々

第2回(第74年8号 昭和34年6月号) 防空頭巾にモンペ、国民服姿で大きな荷物を持って市中
を行き交う人々

- 第3回（第74年9号 昭和34年7月号） 簡素な造りの飲食店や露店で働く人、そこに集まる客
第4回（第74年11号 昭和34年8月号） 俯瞰した福岡市博多区中洲の町並み
第5回（第74年12号 昭和34年9月号） 高台から見下ろした山から海岸線にかけて広がる家々と海
第6回（第74年14号 昭和34年10月号） 彼岸と此岸に停泊中の船と船上の人

資料19 向井潤吉「小さい感慨」（「本の手帖」 昭森社 昭和38年8月号）

「火野葦平さんが発案し、陸軍省に談判し、そして朝日新聞社にわたりをつけ私をお相伴にして、他に古関^(ママ)祐而さんを誘ってイムパール戦線に出掛けたのは、昭和十九年の四月下旬であった。当時はサイパンが危なしと伝えられる一方、（イムパール指呼の間）（陥落は目睫の中）などと戦況が混乱していたし、ここで一つの銃後の国民の志気を昂める可し、という結果がこの出発になったのだが、私達をラングーンまで送り届ける航空機は陸軍にも手薄であり、どうしても朝日の航空部に頼る他なかったのである。その代り、イムパール入城感激の詩を葦平さんが作り、古関さんがそれを作曲、私は入場の華々しい状況を描く、そして早々に帰国して日本国内を講演して廻り、大いに戦意昂揚をやる約束の予定であった。／然し数日後、ラングーンに到着してみると、町の様相はすっかりと悪変していて、大きい道路には物々しい偽装網が吊り渡され、新聞社の前庭には奥深い退避壕が掘られている有様であった。ある参謀から航空戦力は彼我百対一だとおどかさながら、二三日後の夕食後、薄闇を縫って前進基地のメイミョウに飛んだが、途中で敵の編隊戦闘機に出逢って辛うじて着陸したのは、草茫々の仮設飛行場であった。それが苦難の皮切りであった。／葦平さんの異常な意力にひきずられて、どうやら前線司令部まで到達したが、連日の雨、後退してくる幽鬼のような将病兵達、飢餓、野宿、爆撃のくり返えして、全くイムパールを指呼の間に望みながら、崩壊する寸前の戦線を後戻りしたのは七月の下旬であった。／日記〔向井自身の日記 未公開〕を見ると（八月九日）台湾屏東の飛行場を七時十七分離陸して内地に向かったが、土産に買った砂糖十斤（四円二十銭）バナナ一房（六十銭）飴玉（六円）と甘いものばかりを買ったところが当時らしくて面白い。／その後、葦平さんと逢うとよくイムパールの話が出て、（もう一度歩いてみたいな）等と笑ったものだが、無論急造の軍用道路は、爆撃や砲撃や、そして豪雨の為にとうに夢の如く、崩れてあとかたも無くなったことだろうと思う。その葦平さんも灰になってからもう三年余りになる。」

資料20 向井潤吉「交遊抄 葦平さん」（「日本経済新聞」 昭和42年8月12日）

「火野葦平さんと初めて出会ったのはたしか昭和十四年で、A新聞の小説にさし絵を担当した縁であった。葦平さんが軍曹の兵隊作家であり、私が上等兵の従軍画家だという組み合わせであった。そして十七年のバターン半島の総攻撃には二人そろって報道班員をつとめたし、十九年のインパール作戦の時は、葦平さんの発案で古関祐而さんと三人でラングーンに急行したものである。／目ざすインパールは指呼の間と称された四月下旬で、葦平さんは戦勝感激の詩をうたい、それを作曲するのが古関さんの役、私は堂々とした入城の光景を描くという寸法であった。しかしそれは大当てはずれで、葦平さんと私の二人はインド・ビルマ国境を乞食（こじき）になってウロウロと、ある時は豪雨とぬかるみと砂ばえに悩まされ、爆撃と砲弾と時限爆雷に脅かされながら、約四カ月を放浪したのである。私はしだいにボンヤリと目的も気力もなくなりつつあったが、そんなギリギリの時でも、葦平さんは勇気と自信にみちた微笑をたたえて、途中で私と別れてただ一人、郷土部隊が奮戦しているという最

悪状態の雲南方面に出掛けて行ったのであった。その行動は文学者であるというよりも、任務に忠実果敢な一下士官そのものであった。／私は葦平さんその風態や経歴や生活から、放逸な大酒飲みとばかり考えていた。しかし本来の人となりはそれとうらはらに非常に細密鋭敏に神経の動く人であり、テレやであるとともに、アルコールのきれいな体質のようであった。驚くほどビールを飲んだが、それは周囲の人たちを楽しくにぎやかにするためと、自らを饒舌（じょうぜつ）に変える無理な手段であって、日本酒は一滴も受けつけず、たばこも全く手にしなかったのは不思議であった。／仕事に追われると、よく私の家へ、古ぼけたかばんいっぱい資料をつめて逃避してきた。顔を赤らめながら「泊めちょくれ」と言うのが精いっぱいのことばであった。私の家人も心得たもので、手にはいるだけのラムネを買い、はちに山盛りのうで卵とふろを用意しておくだけでじゅうぶんであった。深夜、疲れたり眠くなると、ぬるくなった湯もかまわずに使う音に、こちらも気がついて何度も半徹夜のお相伴をさせられたものである。／私はなりふりをいっこうかまわぬ葦平さんにせめて帯皮だけでも買ったらどうだと冗談めかしてすすめたことがあるが、「帯皮と女房はすり切れるまで使うもんじゃ」という返事であった。そしてその帯皮よりも前に自分の生命をあっけなくすり切らしたのであった。」

以上、互いについての描写を追いかけたに過ぎないが、二人の関係はこれ以上の贅言を寄せ付けないものがある。泥濘から安寧まで、この世のあらゆるありようが密接に絡み合うなか、支え合い助け合う二人は夫婦のようにさえ見えてくる。

6 二人の見たもの／二人の戦争観

昭和20年8月15日、日本は太平洋戦争に敗れたが、火野と向井の従軍は、昭和12年の第二次上海事変から昭和17年のフィリピン作戦まで、勝ち戦であった。昭和19年、最後のインパール作戦従軍においてはじめて転進、敗退の辛酸を舐めることになったが、二人は幸いにして帰還した。報道班員として、長いところでは火野は広東に約1年、向井はフィリピンに約300日滞留し、宣撫工作・文化工作に多忙を極めた。日本人向けの現地発行の新聞編纂や執筆、「広東迅報」（火野）や「海南迅報」（火野）などの現地人向け新聞の発行を行う傍ら、現地の人々と交わり、その社会を知り、土地と文化を知り、そこで豊富な素材を得てこれを吸収し、人間理解を深めていく。戦地でのルポだけでなく、こうした異文化接触の成果は、任務を解かれて帰還した後も手を休めることなく執筆や絵画制作であらわされた。従軍経験は、多くの活字・絵画に遺されており、現地での新聞や冊子を含め、確認できないものも多い。しかし、この異文化接触は、戦時においては火野・向井に限らず、軍人、居留民、現地人のあらゆる階層の人間の間で相互に濃密に行われていたことが管見の限りでも窺える。

宣撫活動

報道班の任務であった宣撫工作や文化工作とは、敵のデマゴグや日本軍に対するディスインフォメーションを正し、現地の民衆に知らせることであり、現地の治安と生活が維持されることを知らせるプロパガンダであった。『十五年戦争極秘資料集 第十三集 華中宣撫工作資料』（不二出版 平成元年2月）の解説（井上久士）は、占領地における「民衆に対する一定の公共事業の運営は不可欠であった。親日のための宣伝・教化活動も行われる必要があった。」そしてそのような目的のために、軍によって行われた活動が宣撫活動であると定義している。井上の引く「宣撫工作要領」（昭和12年11

月作成)によればその目的は、「作戦地域内ノ支那民衆ヲシテ今次事変ニ於ケル真意ヲ明ニシテ、排日抗日思想及欧米依存ノ精神ヲ排除シ、日本ニ依存スルコト即チ安居楽業ノ基ナルコトヲ自覚セシメルニアル。」(p6)とされる。

火野は、昭和14年11月17日、早稲田大学講堂に於ける講演筆記録(「戦後建設の一問題について」『河童昇天』改造社 昭和15年4月)に宣撫工作について詳しく語っている。一つの町を占領すると「昨日は銃剣を持って戦闘して居った兵隊自身が、今日は宣撫の仕事を開始する」(p318)のであり、現地の大勢の貧しい人々にまず食べ物を与えなければならない。ところが子供にキャラメル、大人に米を与えて懐いたと思うのは錯覚である。「どういう風にやっても、何をやっても、向ふ勝手に解釈される。」(p328) 宣撫工作や文化建設は困難を極める仕事であり、その理由は現地人の考えていることがなかなか理解できないからだ。同じ国内で使用される言語も、杭州、広東、上海、海口と、移動する先々で異なる。印刷所や活字、印刷機を捜して印刷所に行くと闇から敗残兵が飛び出してきたりする危険もある。抗日新聞で働いていた正直な現地人を雇ったがこちらの言うことが通じない。漢字の熟語で伝えるのだが、文法が滅茶苦茶であるから意味が逆になったりする。挙句、現地のいろいろな本を集め、小説、詩、女性の裸体写真を載せると大いに売れた。『麦と兵隊』は現地では2種類の訳本があるが、解説は「火野葦平なる者は、日本軍閥の走狗であつて、軍の要求によつてかういふものを書いたにも拘らず、戦場の現実を書くために支那軍の勇敢なることを書き現はさねばならなかつた。支那人の如何に勇敢で優秀であるかといふことは、これを読んでみても非常によく分る。(笑声)」(p328)となる。現地に入り込んで仕事をしていてもなかなか理解できないが、この理解が根底になれば文化工作にも建設にもならない、単に語学を習得するしないの問題ではなく、大陸の新秩序建設のためには知識階級の力が必要だと話している。(pp306-39)

前記井上の解説によれば、宣撫班員の構成については、満鉄派遣員、満洲国日系官吏、東亜経済調査局員等の「中国についての研究者・調査マン・官吏といった専門家、知識人が多用されている。彼らの専門的知識とこれらの人達のなかにあつたであろう中国への同情は、こうして軍によって動員されることとなった。」(p7)

火野の小品集『兵隊について』(改造社 昭和15年12月)には宣撫の体験を描いた小品が見られる。「山坡街」は、宜昌戦線視察の途次、弟政雄の駐屯地を訪れた際の話である。山坡完全小学校で宣撫教育を行う弟「玉井先生」(政雄)の仕事を見学する。誰にともなく静かな声で、『^{ウオラポンイウターターデチヨンスラ}我的朋友多々の戦死了』と話した時、「玉井先生は戦争して来たのだ。あの白墨を握つたり、俺達を撫でたり、^{キャラメル}牛乳糖をわけてくれたりするあの手で、鉄砲を撃つたり、塹壕を掘つたりしたのに違ひない。(中略)だが、玉井先生はどうしてあんなに優しい眼をしてゐるのだらう。」(p222)と感じた少年の作文を紹介し、「私」(火野)は、兵隊が戦いのあとの社会建設の困難を引き受けていることに感銘を受けている。

〈中支における反日武装勢力〉

前記井上によると、遊撃隊(ゲリラ戦を行う)・便衣隊(平服を来て敵地に潜行し宣伝・破壊活動を行う)・土匪(盗みや略奪を行う)などがいた。便衣隊や土匪の実態は明らかでない部分が多い。その中には、国民党系の、あるいは自然発生的な、さらに新四軍系がいた。

新四軍系とは、中国共産党の指導する国民革命軍新編第四軍のことで、毛沢東指導下に遊撃戦を展開した。盗賊団化した敗残兵や、もともとの土匪、両者の中間的存在もあつたと思われる。

火野は「戦友に懇ふ」（『河童昇天』p280）で同胞にむけ以下のように語る。

日本が嘗て支那を知ることの少なかつたことが今事変勃発の一原因であつたといはれる。今我々何百万の兵隊が生命を挺して支那を知つた。これはまた大いなる文化的収穫である。我々はそのことを生かさなければ何にもならない。

戦場でのみ我々兵隊の任務は終つたのではない。戦争は平和の延長である。一見すさまじき破壊の面貌を呈するけれども、それは建設のための破壊である。平和な時代に我々が静かに過した内地の暮しが、我々の日常生活であつたやうに、戦地に於ける生活もまた我々の日常生活の延長である。我々はその生活の中で得た貴い体験と生命力の強靱さを、新しい生活の出発の中に生かさなくてはなんにもならない。いはば、また、戦地で鍛へられて来た我々は、兄貴でもある。兄貴が兄貴らしくなくては、弟たちを導いてゆくことは出来ない。

『兵隊について』所収の「潮州記」では部隊の食事の世話をしている黄三の一八歳の長男がテロにあう。「輝さんの話によると、この勇敢な少年は、便衣隊が貼つた敵の伝單を剥がすために或る家の門柱の前に立つた時に敵のために射たれたのださうである。射たれながらもこの少年はその伝單を破り、百米ばかりの地面を這つて来た。」(p309)「正午近く、黄少年は屍骸になつて帰つて来た。」(p310)宣撫の打ち合わせにやってきた徳備少尉は「今まで苦心してやつと築いて来た宣撫工作の成果は（中略）破壊された。又、新規まき直して始めなくてはならぬ。」(p311)と言う。少年が死んだ時から父親が自分たちに対して心を閉ざしたことを「私」は知つた。「彼はさつきから涙一滴落さないのである。」(p310) そのあと、頭痛で寝込んでいることを聞き「何か安心したやうに、胸の中がひらけて来る思ひであつた」(p314)と記す。

大陸において、複雑な敵を相手とする宣撫工作が生易しいものでなかつたことがわかる。

フィリピンでの向井

向井らの先発隊は、上陸前の船中ですでに上陸に備えた伝單の用意をしている。「アメリカ文明の亡霊を駆逐せよ」の題のもと、ルーズヴェルトと骸骨との両面のビックリ箱の絵の肩に DESTINY と文字を入れたり、仲間の仕事を夜中まで手伝つた。ケソン大統領へのメッセージ作成は尾崎（士郎）、佐藤（嘉四郎）、今（日出海）が担当するなどの計画が立てられた。（『南十字星下』p35）さらに、ホセ・リサール（1861-1896）の肖像画も制作した。

私は輸送船の中で已に、リサール博士の面貌には馴染になつて居た。それは上陸後間もなく銃殺記念日 [12月30日] を迎へるのでその前後の期間に、全比島人に撒く伝單の爲めに、その顔をその周囲を月桂樹で飾つた肖像を描いたものを製作したからである。（「哮へるリサール博士」『大東亜戦争画文集 比島』新太陽社 昭和18年12月 p42）

この「哮へるリサール博士」にはホセ・リサールの来歴が詳しく書かれ、銃殺されたマニラルネタ公園の「リサール博士立像」のスケッチ（p41）が添えられており、「このサマルの伽藍の横に、辛うじて立つてゐる石像は、無念にも両手とも石膏が剥がれて鉄筋の骨が見え、因果にも米軍の立て籠もるサマツト、マリベレス山の方向を睨んで居るのである。」とある。（スケッチの像と今日のルネタ公園のリサール像とは異なる。ルネタ公園とフィリピンの独立運動との関連は深い。支配者であつたスペイン人は

リサールを処刑する以前にも、1872年2月17日に、フィリピン人牧師ホセ・ブルゴス、マリアノ・ゴメス、ジャシント・サモラの3名をカピテの叛乱の首謀者の冤罪を着せて、同公園で射殺している。愛国者ホセ・リサールは小説『エル・フィブリスティスモ』でこれを吊っている。(守川正道『フィリピン史』同朋舎 昭和53年4月 pp101-03))

〈フィリピン占領によって生まれた反日武装勢力〉

親日の立場をとったガナップ党(アメリカからの完全即時独立を主張していた)もあったが、一方では反日の武装組織も生まれた。

フクバラハップ(Hukbalahap 抗日人民軍)は以前からの左翼系農民運動を中核に、日本軍への抵抗と地主制の打倒を目指した。

他方に、米比軍の残存兵中心のユサフェ(USAFFE, 米極東陸軍)ゲリラがあったが、米軍のマニラ占領後、フクバラハップは以前から左翼系農民運動を中核に、ルイス・タルクに率いられ、日本軍の抵抗と地主制の打倒を目指し、ルソン島で結成された。地主側についたユサフェによって弾圧されることとなる。

(『日本歴史大事典』小学館 平成19年、『日本大百科全書: ジャポニカ』小学館 平成6年等を参照)

向井のフィリピンにおける宣撫工作の仕事は『南十字星下』にも見える。住民に与える通行良民証を謄写版刷りで作り、下士が机を出して通訳が年齢氏名を聞いて書き込んで渡す、また、日盛りの中、山間に避難している住民に呼びかけるために案内人、班員、警戒兵2名で村から村へ村長をたずね、話を聞き、さらに奥地に逃げ込んでいる家族に村に帰るよう勧める。子供にはありあわせのキャラメルや乾パンを与えてとにかく早く帰るよう諭す。伝単を渡してもこんなものは役に立たないと理屈をこねられる。谷間に潜んでいる人々にも安民の布告文を渡して早く帰るよう繰り返して元の道を引き返す。(p82-84)

向井のフィリピンでの伝単制作中に撮影された写真は2種確認できるが、伝単は2点確認したのみである。一つは前節に引いた「新美術」昭和18年2月に掲載の「従軍三百日」中の「ESTABLISH THE NEW PHILIPPINES WITH THE SWEAT OF YOUR BROWS」(p42)、今一つが「生活美術」(昭和18年7月 p25)に掲載の色刷りで、「J. P. C. A NEW DAY IS HERE! COME! LET us JOIN in ESTABLISHING THE GREATER ASIA」のスローガンのもと、現地人の男女が穀物袋や鍬や果物籠をもって行進しているものであり、挿絵のように美しい。

向井の宣撫の苦労は「従軍三百日」(「新美術」昭和18年2月)にも要約されている。「最初の宿营地バウアンに到着するとともにすぐに仕事が初められ絵画班(田中佐一郎[,] 鈴木栄二郎, 私)の三人は拾って来た紙と、クレヨンとインキで辻々に貼る安民布告のビラを描くとともに、これも探し出して来た手刷の印刷機の動力代りになって、徹夜で約一〇〇〇〇枚刷り上げた。吾々は十分の資材がないために、その後ともにジングスカン流に現地徴便の方法で仕事を続けなければならなかった。」(p40) さらに総攻撃前に対敵、対民衆の活動として新聞班が「トリビューン」紙を発行、放送班は放送局を修理しデマ放送に電波を送り、絵画班と印刷班は伝単その他の印刷をと矢継ぎ早の仕事をこなした。フィリピンの言語は約80種、英語、スペイン語、タガログ、ビサヤと多様を極め、一枚の伝単の説明すら数種の言語に訳さなければ用をたさない。投降兵の話に基づき図柄も何種も用意し、戦意破碎、厭戦気分を誘致する主題(家庭の団楽、美人、平和なマニラ、田園風景)を選び、形態(小説・

笑話・漫画など)も種々異なるものを制作した。

帰国早々、一先輩に文士や絵描きは従軍しても役に立たず沢庵を切っていたそうだねと揶揄されたことをうけ、以下のように記す。

と中々に含蓄のある言葉を吐いたが、私はこの言葉の内側にかくされてゐる、現実の日本の位置、運命に対する傍観者的乃至、批判的な精神の遍在を一番怖ろしいと思つてゐる。曾つてのそうした態度は吾々の仲間では、何か芸術に就いての一種の尊貴な心の在方として美しい煙幕を張つたが、目前の状態はたゞ戦ひに勝ち抜く、このみに集結されなければならないのは云ふ迄もないことと考へる。国民の一人一人が卒伍の中に生きる。この決意こそ一番大切であり、又要求せられてゐるのだ。沢庵の切り方の技巧はともかく、皆が沢庵を切る覚悟がなければ敵は已に吾々の精神の中に勝利を誇つてゐるのだ。(p47)

向井はここで、対米戦争が容易ならぬ戦いであることを強調している。

フィリピンでの火野

火野の従軍記録は、敵・味方を含めすべての人間に公平で温和なまなざしを投げかけている。大陸では、銃後の家族に思いを寄せ、故郷を懐かしみ、正月には餅を兵士とともに工面しようとする。身近の人の幸福を願い、悦び、伍長として部下を慈しむ様子が、進軍の苦勞とともに描かれ、一見戦場とは思えないような日常も、噛み砕いて理解できる文章で綴られる。『海南島記』(改造社 昭和14年5月)などに描かれる現地の子供の、煙草を吸い博打を打つ姿を嘆かわしいとは書いても、火野自身はどこかで愛着を感じ、じつは好きだと書いている。「難解」さは火野の著作のどこにもない。この特色は、軽視できるものではないだろう。他者への愛、それは異国人が彼等の母国を思うことへの同情にも繋がる。戦いのなかに敵はある。しかしそれは互いに尊敬すべき敵なのである。

『歴史』(生活社 昭和18年5月)には戦時の内地を舞台とする短篇6篇と、河童を主人公とする夢幻的な短篇6本が収められる。『バタアン戦話集 敵將軍』(第一書房 昭和18年11月)の「まへがき」には、「歴史の問題、民族の問題、さうして、それらのうへに立つ人間の問題、生死の問題。^(ママ)広大な海と空と山と町とに展開される切実な歴史の進行のながれのなかで、これを静かに観察し描くこと」に文学者の使命があるとし、それは「祖国の運命と、もはや切りはなすことのできなくなつた」、「さいきん、切実に反省するところがあつた」としている。「敵將軍」はバターン総攻撃で日本軍の捕虜となり釈放されたマテオ・カピンピン將軍を隠棲先のブニアンに訪ね手を握りあって民族の自立を励ます物語である。「私」の感懐は以下のように記される。

私たちにはもはや宣伝ビラ [新比島建設を促す内容] のおきまり文句として切実さを失つた言葉が、比島人たることをやめることができず、自分の一切の生命をかけてここに生きなければならぬ比島人にとっては、けつして死んだ言葉ではないのである。(p40)

その、命をかけて生きようとする比島人の子供たちの団結を描いた児童書『真珠艦隊』(朝日新聞社 昭和18年7月 表紙・挿絵 猪熊弦一郎)は、5人の靴磨き少年メンドサ、ラモン、ペドロ、ユアン、バヤニと「私」の出会いから始まる。少年たちに、「私」は、スペイン兵に脅されたフィリピン兵に銃殺されたフィリピン独立の英雄ホセ・リサールの精神と生き方を教え、勇気を称えて民族意識を覚醒させる。少年たちは混迷する当時のフィリピン人の敗残兵や匪賊と立ち向かうことで「ほんたうの

敵」米国を倒し大東亜共栄圏の実現を目指そうとして、漁師の小舟五隻で戦うが、仲間のひとり、バヤニが敵の弾丸の犠牲になる。祖国の真の独立のために命を落としたバヤニを称える碑文をすでに帰国した「私」が日本から書き送るところで終わる。

火野は『南方要塞』(小山書店 昭和19年9月)の「デル・ピラル兵営」にもカピンピンを描いている。本書もフィリピンを舞台とする短篇集であり、序詩「南方要塞」に続けて、オロンガボ、モロン、デル・ピラル兵営、南部・北部ルソン地区、ブニアン、コレヒドール、教会や墓地、日本建築の家、ニッパ・ハウス、ロスアニバ農場、農科大学などが舞台となった話が載るが人名は仮名で描かれている。

戦争を介した異文化接触

フィリピンに昭和17年末までいた火野は、帰国後23篇の民話を翻訳し『比島民譚集』(大成出版 昭和20年2月)を刊行した。報道班の仕事の合間にマニラの国立図書館を訪れ、館長ロドリゲス氏に奨められた PHILLIPINO POPULAR TALES と ANCIENT PHILLIPINO STORIES からそれぞれ18話、2話を翻訳し、数篇は雑誌「南十字星」に掲載された。このほか3篇「アモル・セコ草」(ジョセフ・マン)、「アボ・サコ老人」(パウロ・デイソン)、「アナニトマスの冒険」(マニユエル・アルギリヤ)は、火野が勧めて地元の作家に伝説を題材に書かせたものと解題にある。スペインの300年間に続くアメリカの40年間の支配をうけたフィリピンの歴史を勘案しながら、「静かに読むと比島の歴史の持つ宿命といふものがどの物語にもまざまざと滲みでてゐる」とし、「その底を共通して流れる一服の哀感是被征服民族たる比島人の悲しさに、私たちの心を惹きつける」(pp4-5)と記す。

以下の「古伝説」,「鳥と竹」は「わが国の竹取物語を連想させて微笑ましい」と解説する。

ある島に一本のすばらしく大きな竹がのびて来た。その竹はまはりがとても大きく、ほかのどの竹よりも太かった。一羽の鳥が地に降り、その竹をつつきはじめた。すると、竹のなかから、もつとひどく啄け、もつとひどく啄け、といふ声をした。鳥ははじめはびっくりしたが、やがて、なにがなかにゐるのか知りたいと思った。そこで、いつそうはげしくつついた。なほも声はもつとひどく、もつとひどく、といつた。たうたう、すさまじい音を立てて竹は根元から先まで割れた。一人の男と、一人の女とが、そこから出て来た。鳥はおどろいて、飛び去ってしまった。男はていねいに腰をかがめて、女にお辞儀をした。彼等は、竹の別々の節にゐたので、これまで顔を合はしたことは一度もなかった。

彼等は世界でさいしよの男と女であつた。(p42)

アジアの地誌や民族の歴史への関心の所産である。

向井も火野も、報道班に配属されたがゆえに歴史的な重要人物に会見する機会も得た。向井の『絵と文 北支風土記』には徳王(テムチュクドンロブ、1902-1966、チンギス・ハーンの子孫。1937年10月28日、綏遠(厚和と改称)に蒙古連合自治政府を雲王、李守真とともに成立させていた。)に拝謁した記録がある。綏遠場内で1937(昭和12)年11月2日、T記者と共に特務機関を訪ねたあと、洋車を走らせている時、徳王の居住する場所に通りがかった時、ふと思いついたT記者が引見を申し込むと、すぐに広い応接室に通された。

間もなく、写真で顔馴染みの徳王が、思ったよりも小柄で現はれた。あとで年を三十六歳と知ったが、見た所は五十に近い。赭顔にやや鶯色がかつた眼が、これは恐ろしく冴えて据わつてをり、卓子を隔てて

見ると、やはり争はれない（王の相）である。青の上下衣、黒い胸あてのやうなもの。飾り玉が三つ四つ、袴元に下がってゐる。（pp198-99）

この時はT記者の質問はインタビューの域を出ないものであり、徳王の答もそれに相応のものであったと記す。向井は道具を携行しておらず、画家であることを伝え、肖像画を「再遊の時に実現したい」ことなどを通訳を介して伝え、辞したという。

また、向井と火野は、インパール作戦に従軍した際、印度国民軍最高司令官チャンドラ・ボースにまみえたことを火野は従軍手帖に、向井はスケッチブックに遺した。

また、向井の『大東亜戦争画文集 比島』（新太陽社 昭和18年12月）には、画家としての向井の現地体験（色刷り口絵4葉・モノクロ9点を含めた豊富なスケッチ・41章の随筆）が淡々と、時に諧謔をこめて綴られており、画家に映じた戦争を知る一次資料として貴重である。（「後記」の日付の行に「十八年六月 遠く緬印国境に発つ日」（p126）とありビルマへの最初の従軍の時期が判る。）本書は、従軍記として書かれた『南十字星下』と時期は重なるが、日記体ではなく、絵に合わせた文章で戦時下のフィリピンの風物詩が紹介されている。宣伝班が数十台の乗用車、貨車（トラック）、側車（サイドカー）の前面に日比両国旗を交叉させて立ててマニラに向かい、伝単を撒く仕事を「初荷と少しも違はない」と感じた向井は可笑しくなり、愉快になり、避難民の群れを見ると「ヘーイ」と「きき齧りのタガログ語で呼びかけて、伝単のありだけを撒いた。振り返ると、色とりどりの伝単が道端や、畑の中に花が咲いたやうに飛び、それを追掛ける原住民が荷物を放り出して、夢中になつてゐる姿が、砂埃りの中に陽炎のやうに見えた。」（p18）この時、宣伝班の仕事は「撒くこと」であり、向井の昂揚感、通り過ぎる風景の中に気化していくような印象を与える。この伝単を追う原住民の描写は、ふと、向井が大正8年9月号「中学世界」口絵懸賞に当選した時の絵、「南禅寺附近」の、夏の日盛りで蝶を追う少年たちを想起させる。

向井が街頭でスケッチする時、近寄って見物する現地人もいた。『比島』の「ある美術家青年」では、サンフェルナンドの街頭で絵具箱を提げて歩いていた時、マニラのフィリピン大学の美術科を出た彫刻家の青年に声をかけられ、青年のアトリエに案内されたことを回想している。アトリエには「半出来の凝結土の床の上に、石膏のマリアや、キリストや、革命志士リサールの像等が埃に埋もれて押し重なつて置かれてゐた。」自作を見せてシュルレアリスムの自分の傑作の一つだと解説し、美術では暮らせないため墓地の装飾をしていたらしいが、「戦前、鬼畜同然だと米国人から宣伝せられてゐた日本軍の中に、美術家らしい私の姿を発見し、ホツと安心すると共に、俄かに親しさと自分の仕事の誇りを感じたものらしい」。青年は、大学の門前でボヘミアンネクタイをした自分の古い写真に署名して呉れたうえに、近くの難民収容区に案内し、インテリ兄妹の開く掘立小屋の喫茶店に連れていき、なけなしの財布を叩いて、水牛の乳の入った薄いコーヒーと砂だらけのカステラをご馳走してくれた。自転車に日本字で「電気工」と書いた札を吊るしていたので芸術とは縁遠い生活をしていて、今頃は比島戦死者の墓造りに忙しいかもしれないし、仲のよかった喫茶店の娘と新世帯を持って「アトリエで「愛国行進曲」などを口笛吹いて、シュールリアリズムの傑作に腕を揮つてゐるかも知れないと考へてゐる」（pp76-77）と結ぶ。

向井の対象を手放さないリアリズム（「幼少の頃からすべてをリアルに思考し、それを実践しなければ納得がいかかった」島田康寛「自然と人生の調和を求めて」『20世紀日本の美術 17 向井潤吉／小磯良平』集

い、出征を「見送り」、勝利に「歓喜し」、死者に「涙し手を合わせ」た。今日のわれわれはこれらの動詞の意味をたやすく理解する。しかし同時に、戦時におけるこれらの動詞の重力や濃度や切迫は、今日の比ではないことに気づかされる。野営や露営の日々は、密林の溪流で洗濯をし、炊爨をし、豚や鶏を鹵獲し、果ては犬や猫まで食う生活、一見お伽噺にも見えるが、その歴史の密林に立ち戻り、素顔の兵隊のとった行動の意味を測定しながら、理解しなおす必要があるのではないだろうか。

戦後の火野は戦争責任を指弾されながらも、『麦と兵隊』序文に記したとおり、戦争を考え続けた。そして向井は、火野の連載小説の挿絵画家として、火野が安心して依頼できる相手でもあり続けた。(火野葦平「向井潤吉画伯とのコンビ」『河童七変化』宝文館 昭和32年5月 p126)

最後に、溝口郁夫著『秘録・ビルマ独立と日本人参謀 野田毅ビルマ陣中日記』(国書刊行会 平成24年1月)に引用された火野の言葉を引く。野田毅は昭和23年1月28日、南京(雨花台)にて戦犯とされ36歳で刑死した。彼の遺した「野田毅・獄中記」の抜粋版(昭和34年 未刊)のコピーに火野の以下の三行が認められるとしている。(p329)

この人たちの小さな謙虚な叫びを、
吾々が世俗の混迷ゆえに聞き逃すならば、
日本人に永久に救いはないと思う

敗戦国が戦勝国に対して、戦争という犯罪を犯したと見做すのは、あくまでも戦後の戦争観であって、火野たちは、そして当時の日本人たちは、国家は自己の主張のために、互いに闘う権利があり(交戦権)、それは互いの国家にとって正当な行為であると認識していた。

そのような、国際法に定められたルールある戦争は「捕虜や敗者の中にもはや処罰や復讐や人質の対象を見ず、(中略)大赦条項を当然に伴ったものとして平和条約を締結すること」(新田邦夫訳・カール・シュミット『台地のノモス』下 福村出版 昭和51年6月 p450)によって終えられるものでなくてはならなかったのだが、火野はその対極を戦後に見ることとなった。

彼らの時代の戦争体験を理解するには、火野や向井たちの行為や道徳の前提にあった、今日とは正反対の戦争観を知らなくては不可能だと思われる。そして彼らが戦後身をもって示したこと、すなわち戦死者たちを忘却することは、われわれの歴史の、かけがえのない一体性を損ねかねないのだ、との主張を聞き逃してはいけないのではないだろうか。

向井は、18歳の時「中学世界」(大正8年9月)の「私の生ひ立ちと私の画について」で「描かなければなりません。又描かなければ生き得られません」と宣言した。戦争に志願したのも戦争を戦いながら戦争画を描くためであった。戦後、ただちに行動美術協会をおこして毎年出品を続け、連載小説や児童書等の挿絵なども引き受けながら、橋本善八によると、1074点の古民家を描いた「制作日誌」が遺されている(「向井潤吉 風景へのまなざし (附)「制作日誌」からたどる向井潤吉の足跡」『世田谷美術館コレクション選集 向井潤吉 風景へのまなざし』世田谷美術館 平成29年11月 p144)。自身も「敗戦が私に「民家」を描き出す機因を作ってくれた」(「雑感」『米寿記念「向井潤吉展」一郷愁への遍旅一』朝日新聞社 平成2年)と回顧し、昭和6年の『民家図集』(大塚工芸社)に開眼させられた(「民家に美を求めて」中央公論 昭和43年12月)という。滅びゆく古い日本を哀惜する向井自身の契機が明かされている。

今回、筆者は戦争画にあたる中、針生一郎・榎木野衣・蔵屋美香・河田明久・平瀬礼太・大谷省吾

編著『戦争と美術 1937-1945』（国書刊行会 平成28年12月 改定版第2刷）51ページに、熊岡美彦「九軍神の肖像」（昭和18年 海上自衛隊第一術科学校教育参考館蔵）を見た。真珠湾攻撃（昭和16年12月7日）の際、湾内敵艦船を攻撃するため5艇の特殊潜航艇で出撃し、未帰還となった9名の海軍軍人のそれぞれの肖像画と生家を描いた18点の作品で、昭和18年に完成し、第2回大東亜戦争美術展に出品されたこと等は、吉良智子の解説（pp216-17）に詳述されている。彼らの懐かしい生家の絵のうち4点が草屋根である。これを向井は見えていなかっただろうか。触発されたことはなかっただろうか。今、死者を育んだ生家と在りし日の軍服姿の絵画像を見ると、向井のモチーフ「民家」の彼方に「九軍神の肖像」の生家の油彩があったような気がしてならないのである。

おわりに

火野葦平と向井潤吉、二人を対照させようと考えたきっかけは、火野のインパール従軍記『従軍手帖』に描かれた二人の交流が魅力的だったからである。二人の従軍は第二次上海事変に遡る。先陣を切って戦争報道に携わり、命がけで戦う兵隊の様子だけでなく、現地の文化や民族、風土や気候、あらゆるものを吸収しペンと筆を揮った二人の、その情熱は同じであった。予想以上に、従軍体験を通して二人に刻まれたものは多く、絆の深さを浮き彫りにできたと考える。

残念ながら、調査のための十分な時間が取れず、資料を深く読み込む時間も足りなかったために、積み残したものは大きく、漸く研究の基礎となる部分が見えてきたに過ぎない。大方のご教示ご批判を俟つ。

拙稿執筆に際し、火野については鶴島正男「新編＝火野葦平年譜」（『文学批評 叙説 XIII』平成8年8月1日）、池田浩士『火野葦平論 [海外進出文学] 論・第1部』（インパクト出版会 平成12年12月）の恩恵に与るところが大きかった。『ロクタク湖白雨』画像掲載をお認めくださった北九州市立文学館、著作権継承者向井美榮子様とともに記して御礼申し上げます。

参考文献

引用については歴史的事実を重んじ、全て原典通りとし、漢字は概ね通行の字体に置き換えた。

火野葦平

『首を売る店』（内藤奎運堂 大正14年7月）

『首を売る店』（桐書房 昭和24年3月）

『糞尿譚』（小山書店 昭和13年3月）

『麦と兵隊』（改造社 昭和13年9月）

『土と兵隊』（改造社 昭和13年11月）

『廣東進軍抄』（新潮社 昭和14年3月）

『花と兵隊』（改造社 昭和14年8月）

『海南島記』（改造社 昭和14年5月）

『河童昇天』（改造社 昭和15年4月）

『兵隊について』（改造社 昭和15年12月）

『長編小説 美しき地図』（改造社 昭和16年8月）

『珊瑚礁』（東峰書房 昭和17年5月）

『兵隊の地図』（改造社 昭和17年8月）

『歴史』（生活社 昭和18年5月）

『真珠艦隊』(朝日新聞社 昭和18年7月)
『バタアン戦話集 敵将軍』(第一書房 昭和18年11月)
『南方要塞』(小山書店 昭和19年9月)
『比島民譚集』(大成出版 昭和20年2月)
『青春と泥濘』(六興出版社 昭和25年3月)
『赤道祭』(新潮社 昭和26年11月)
『どんこの舌』(創元社 昭和27年12月)
『花と龍』上・下(新潮社 昭和28年5月・7月)
『赤い国の旅人』(朝日新聞社 昭和30年12月)
『河童七変化』(宝文館 昭和32年4月)
『火野葦平選集』第一巻～第八巻(東京創元社 昭和33年2月～昭和34年6月)
『革命前後』(中央公論社 昭和35年3月)
『日本文学全集52 火野葦平集』(新潮社 昭和35年6月)
『インパール作戦従軍記—葦平「従軍手帖」全文翻刻』(解説 渡辺考・増田周子 集英社 平成29年12月)
『天皇組合』(河出書房新社 平成31年1月)

「バタアン半島総攻撃 東岸部隊」(比島派遣軍報道部『比島戦記』 文藝春秋社 昭和18年3月)
「木の葉虫」(比島派遣軍報道部「南十字星」第百号 昭和18年9月8日)

「美しき地図」(「朝日新聞」昭和15年12月6日～16年5月21日)
「赤道祭」(「毎日新聞」昭和26年3月11日～8月19日)
「花と龍」(「読売新聞」昭和27年6月20日～28年5月11日)

向井潤吉

「南禅寺附近」,「私の生ひ立ちと私の画について」(「中学世界」 大正8年9月)
『絵と文 北支風土記』(大東出版社 昭和14年7月)
『比島従軍記 南十字星下』(陸軍美術協会出版部 昭和17年12月)
『大東亜戦争画文集 比島』(新太陽社 昭和18年12月)
「ロクタク湖白雨」(油彩 50号 昭和19年)
『油彩』(東峰書院 昭和35年11月)
向井潤吉, 難波香久三編『行動美術 35年の小史』(行動美術協会 昭和55年11月)
『草屋根と絵筆』(橋本善八編 国書刊行会 平成30年9月)
「身辺秋心」(「朝日新聞」昭和5年10月20日)
「北支点彩」(「朝日新聞」昭和12年11月7日・8日・9日)
「小さい感慨」(「本の手帖」第3巻第6号 昭和38年8月1日)
「交遊抄 葦平さん」(日本経済新聞 昭和42年8月12日)

資 料

池田浩士『火野葦平論 [海外進出文学] 論・第1部』(インパクト出版会 平成12年12月)
井上久士編・解説『十五年戦争極秘資料集 第十三集 華中宣撫工作資料』(不二出版 平成元年12月)
今泉省彦著, 照井康夫編『美術工作者の軌跡 今泉省彦遺稿集』(海鳥社 平成29年6月)
後 勝『ビルマ戦記 方面軍参謀 悲劇の回想』(光人社 平成8年11月 新装版)
刑部芳則『中公新書 2569 古関裕而—流行作曲家と激動の昭和』(中央公論新社 令和2年1月)
神谷忠孝, 木村一信編『南方徴用作家 戦争と文学』(世界思想社 平成8年3月)
カール・シュミット著, 新田邦夫訳『大地のノモス 下 ヨーロッパ公法という国際法における』(福村出版 昭和51年6月)

川西政明『昭和文学史』中巻（講談社 平成 14 年 2 月）

川西政明『新・日本文壇史 6』（岩波書店 平成 23 年 8 月）

菊池寛「話の屑籠」（『文藝春秋』昭和 13 年 3 月）

菊地清麿『〔新版〕評伝 古関裕而』（彩流社 令和 2 年 5 月）

栗原 信『六人の報道小隊』（陸軍美術協会出版部 昭和 17 年 12 月）

軍事史学会『日中戦争の諸相』（錦正社 平成 9 年 12 月）

神坂次郎, 福富太郎, 河田明久, 丹尾安典『画家たちの「戦争」』（とんぼの本 新潮社 平成 22 年 7 月）

小勝禮子「もうひとつの 1940 年代—それぞれの美術史」（小勝禮子・鈴木さとみ・志田康宏編『戦後 70 年：もうひとつの 1940 年代美術—戦争から復興・再生へ 美術家たちは何を考え、何を描いたか』栃木県立美術館 平成 27 年）

國學院大學研究開発推進機構 研究開発推進センター「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」研究資料『靖国の絵巻』（https://www2.kokugakuin.ac.jp/kaihatsu/maa/yasukuni/yasukuni_s19b_005.html 最終閲覧日令和 2 年 8 月 1 日）

古関裕而『鐘も鳴り響け 古関裕而自伝』（集英社文庫 令和元年 12 月）

迫内祐司「3 人の絵描きの絵と言葉 向井潤吉」ほか（『特集 絵描きと戦争 「戦争画」とはなんだったのか?』「美術手帖」平成 27 年 9 月）

酒井忠康, 橋本善八, 矢野 進, 池尻豪介『世田谷美術館コレクション選集 向井潤吉 風景へのまなざし』（世田谷美術館・世田谷美術館分館向井潤吉アトリエ館 平成 29 年 11 月）

島田康寛, 増田 洋責任編集『20 世紀日本の美術 17 向井潤吉／小磯良平』（集英社 昭和 61 年 7 月）

陣中新聞南十字星編集部編『南十字星文芸集』（比島派遣軍宣伝班 昭和 17 年 6 月）

世田谷美術館, 橋本善八, 木村祐子編『向井潤吉の絵画と写真 絵画が語る風景, レンズが見た風景』（世田谷美術館, 神戸市立小磯記念美術館 平成 14 年）

大丸 弘, 高橋晴子『新聞連載小説の 挿絵でみる近代日本の身装文化』（三元社 令和元年 12 月）

田中艸太郎『火野葦平論』（五月書房 昭和 46 年 9 月）

玉井史太郎『河伯洞余滴 わが父, 火野葦平 その語られざる波瀾万丈の人生』（学習研究社 平成 12 年 5 月）

玉井政雄『兄・火野葦平私記』（島津書房 昭和 56 年 5 月）

鶴島正男『檻褻の人 評伝・火野葦平』（裏山書店 平成 7 年 6 月）

鶴島正男「新編＝火野葦平年譜」, 花田俊典「火野葦平という問題」, 楨林滉二「火野葦平・その一側面」, 下野 孝文「火野葦平と兵隊」ほか（『文学批評 敍説 XIII』平成 8 年 8 月）

土門周平『インパール作戦 日本陸軍最後の決戦』（PHP 研究所 平成 17 年 2 月）

成田龍一『増補「戦争経験」の戦後史 語られた体験／証言／記憶』（岩波文庫 令和 2 年 8 月）

西田市一『バタアン・コレヒドール攻略戦記 弾雨に生きる』（宋栄堂 昭和 18 年 3 月）

針生一郎, 榎木野衣, 蔵屋美香, 河田明久, 平瀬礼太, 大谷省吾編著『戦争と美術 1937-1945』（国書刊行会 平成 28 年 12 月 改訂版）

ピーター・ヤング原著, 加登川幸太郎監修, 戦史刊行会編訳『第二次世界大戦通史・全作戦図と戦況』（原書房 昭和 56 年 1 月）

増田周子『関西大学東西学術研究所研究叢刊行 48 1995 年「アジア諸国会議」とその周辺—火野葦平インド紀行—』（関西大学出版部 平成 26 年 5 月）

松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会 平成 27 年 3 月）

松本和也『日中戦争開戦後の文学場』（神奈川大学出版会 平成 30 年 3 月 10 日）

松本和也『太平洋戦争開戦後の文学場』（神奈川大学出版会 令和 2 年 5 月 30 日）

漫画集団編著『漫画昭和史—漫画集団の 50 年』（河出書房新社 昭和 57 年 10 月）

溝口郁夫『絵具と戦争 従軍画家たちと戦争画の軌跡』（国書刊行会 平成 23 年 3 月）

溝口郁夫編『秘録・ビルマ独立と日本人参謀 野田毅ビルマ陣中日記』（国書刊行会 平成 24 年 1 月）

三宅正太郎『弥生叢書 23 回想の芸術家たち』（国鉄厚生事業協会 昭和 61 年 3 月）

宮本常一『日本人を考える 歴史・民族・文化』(河出書房新社 平成18年3月)
守川正道『フィリピン史』(同朋舎 昭和53年4月)
陸軍省・海軍省編纂『昭和十八年春季大祭記念 靖国之絵巻』(陸軍美術協会 発行年月不明)
陸軍省・海軍省編纂『昭和十九年春季大祭記念 靖国之絵巻』(陸軍美術協会 昭和19年4月)
陸軍省・海軍省編纂『昭和十九年秋季大祭記念 靖国之絵巻』(靖国神社臨時大祭委員編纂発行 昭和19年10月)
ルイス・ブッシュ著、明石洋二訳『おかわいそうに 東京捕虜収容所の英兵記録』(文藝春秋社 昭和31年8月)
渡辺 考『戦場で書く 火野葦平と従軍作家たち』(NHK出版 平成27年10月)
渡辺 考『戦場で書く 火野葦平のふたつの戦場』(朝日文庫 令和2年6月)
『火野葦平選集』月報第1号～第8号(東京創元社 昭和33年2月～昭和34年6月)
「芥川龍之介賞経緯」(「文藝春秋」昭和13年3月)

「二科会新会員七氏」(「朝日新聞」昭和11年9月6日)
「絵と彫刻の従軍」(「朝日新聞」昭和12年10月5日)
『「糞尿譚」の栄冠陣中に輝く 士官も「占領の喜び」』(「朝日新聞」昭和13年4月3日)
「「彩管部隊、中支へ出動」(「朝日新聞」昭和13年4月16日)
「近代戦争と絵画 従軍画家を迎へて」(「朝日新聞」昭和13年7月29日・30日・31日)
「戦時下の紙上美術展 向井潤吉「突撃」」(「朝日新聞」昭和13年9月9日)
「二科会飾った戦争画 海外頒布を禁止」(「朝日新聞」昭和14年2月15日)
「盟邦へ贈る『無敵皇軍』向井画伯の従軍作「突撃、完成」」(「読売新聞」夕刊 昭和14年3月7日)
「伊国へ防共戦図」(「朝日新聞」夕刊 昭和14年3月10日)
「次の朝刊連載小説『美しき地図』」(「朝日新聞」昭和15年11月29日)
「撃ちてしまん 陸軍美術展出品画『肉薄攻撃』向井潤吉作」(「読売報知」昭和18年3月5日)
「描く「勝利の記録、火野、向井、古関氏ビルマ前線へ」(「朝日新聞」昭和19年5月9日)
「次の連載小説 赤道祭」(「毎日新聞」昭和26年3月6日)
「次の連載小説 花と龍」(「読売新聞」昭和27年6月5日)
「故火野葦平の未発表従軍記が日本兵の遺品に 戦中、比で出版 米人が遺族に返還」(「読売新聞」夕刊 平成元年12月28日)

「アサヒグラフ別冊 美術特集 向井潤吉」第2巻第2号(朝日新聞社 昭和51年5月15日)
『聖戦美術』(陸軍美術協会 昭和15年11月)
『別冊太陽 日本のこころ220 画家と戦争 日本美術史の空白』(平凡社 平成26年8月)
『世田谷美術館コレクション選集 向井潤吉 風景へのまなざし』(世田谷美術館 平成29年11月)

『画業六〇年記念向井潤吉環流展』(朝日新聞社 昭和49年)
『米寿記念「向井潤吉展」—郷愁への遍旅—』(朝日新聞大阪本社企画部 平成2年)
向井潤吉アトリエ館編『向井潤吉アトリエ館 開館記念展 郷愁と輝き 向井潤吉と民家』(向井潤吉アトリエ館・世田谷美術館 平成5年)
火野葦平展運営委員会編『火野葦平展』(北九州市教育委員会 平成6年1月)
小勝禮子・鈴木さとみ・志田康宏編『戦後70年：もうひとつの1940年代美術—戦争から復興・再生へ 美術家たちは何を考え、何を描いたか』(栃木県立美術館 平成27年)

火野葦平『麦と兵隊』の英訳

Barley and Soldiers. Translated by K & L . W. Bush. Tokyo: Kenkyusha, 1939.

Wheat and Soldiers. Translated by Baroness Shidzue Ishimoto. NY: Farrar & Rinehart, 1939.

“Wheat and Soldier.” In *War and Soldier*, translated by Lewis Bush. London: Putnam, 1940.

Corn and Soldiers. Translated by Shigeo Inoue, preface by Ashihei Hino. Tokyo: Kenkyusha, 1944.

(ふくだ じゅんこ 現代教養学科准教授・近代文化研究所所員研究員)